玉名市文化財調査報告　第6集

滑石小路箱式石棺
本堂山遺跡

1985

玉名市教育委員会

序

今回、関係各位の御尽力により調査報告書を刊行するはこびとなりましたことは、喜びにたえません。

この報告書は昭和５７年９月滑石小路の新築工事現場で発見された箱式石棺、並びに昭和５１年７・８月に実施した伊倉本堂山遺跡の発掘調査の記録であります。

昨今、開発工事の急増に伴い埋蔵文化財の発掘調査件数は急速に増加する傾向にあり、市教育委員会でも埋蔵文化財の保護に苦慮してまいりました。

市民の皆様の御協力をたまわり貴重な文化財を愛護し、次代に継承するのは勿論のこと、文化財の認識を新たにし、郷土に対する理解を深めることによって、より以上の文化的に豊かな市民生活を願うものです。

このたびの調査報告書刊行にあたりご指導、ご助言をいただきました市文化財保護委員会田添夏喜会長、長崎大学医学部の内藤芳篤教授、松下孝幸講師並びに調査員、地元の方々に対し厚くお礼を申し上げます。今後この報告書が各方面にわたりご活用いただければ幸いに存ずる次第であります。

昭和６０年３月

玉名市教育委員会

教育長　真　崎　延　人

滑石小路箱式石棺

例　　言

- 本稿は滑石小路箱式石棺の発掘調査報告である。
- 執筆は第１章を田添夏喜、第２章を松下孝幸が担当した。
- 挿図及び図版１～16を田添夏喜、図版17～25を松下孝幸が分担した。
- 編集については徳永太一郎が行った。

調　査　班

主体者	玉名市教育委員会	教育長	豊永義彰
総務	同	社会教育課長	野間和夫
庶務	同	社会教育課長補佐	荒川　巌
	同	社会教育課社会教育係参事	磯田　実
現場主査	玉名市文化財保護委員会会長		
	日本考古学協会員		田添夏喜
現場要員	玉名市教育委員会社会教育課文化財係		松尾克己
	同	職員	大平信行
	同	同	中山富雄
	同	同	坂西直明
	同	同	米田一公
	同	同	木村健一
人骨関係	長崎大学医学部解剖学第二教室	教授	内藤芳篤
	同	講師	松下孝幸

調査期間

発掘調査期間	自　昭和57年　9月　7日
	至　昭和57年　9月16日
場所	玉名市滑石字小路884－6

本　文　目　次

第 1 章　滑石小路の箱式石棺調査報告（田添夏喜）

第 1 節　発見の動機 …… 11

第 2 節　発掘調査に至る経緯 …… 12

第 3 節　遺跡の立地・地形 …… 12

第 4 節　遺跡の歴史的環境 …… 14

第 5 節　発掘調査の過程 …… 16

1. 梗　概 …… 16

2. 箱式石棺付近の地層 …… 18

3. 箱式石棺の棺体 …… 19

(1) 石棺用材 …… 19

(2) 石棺棺体 …… 22

(3) 小路石棺の被葬者 …… 23

(4) 副葬品 …… 24

① 棺　内 …… 26

② 棺　外 …… 26

第 6 節　小路石棺の年代考察 …… 27

（参　考） …… 28

あとがき …… 30

第 2 章　玉名市小路石棺出土の古墳時代人骨（松下孝幸）

はじめに …… 32

資　料 …… 32

所　見 …… 33

1号人骨 …… 33

1. 頭　蓋 …… 33

(1) 脳頭蓋 …… 33

(2) 顔面頭蓋 …… 34

(3) 歯 …… 34

(4) 下顎骨 …… 34

2. 四肢骨 …… 34
(1) 上肢骨 …… 34
① 鎖　骨 …… 34
② 上腕骨 …… 34
③ 橈　骨 …… 35
④ 尺　骨 …… 35
(2) 下肢骨 …… 35
① 大腿骨 …… 35
② 脛　骨 …… 36
3. 四肢骨比 …… 37
4. 推定身長値 …… 37
5. 性別・年令 …… 38
2号人骨 …… 38
1. 頭　蓋 …… 38
(1) 脳頭蓋 …… 38
(2) 顔面頭蓋 …… 38
(3) 歯 …… 39
2. 四肢骨 …… 39
(1) 上肢骨 …… 39
① 鎖　骨 …… 39
② 上腕骨 …… 39
③ 橈　骨 …… 40
④ 尺　骨 …… 40
(2) 下肢骨 …… 40
① 寛　骨 …… 40
② 大腿骨 …… 40
③ 脛　骨 …… 41
3. 性別・年令 …… 41
総　括 …… 42
参考文献 …… 48

挿　図　目　次

第 1 図　遺跡位置・地形図 …… 13

第 2 図　周辺遺跡分布地図 …… 15

第 3 図　石棺付近土層断面実測図 …… 19

第 4 図　箱式石棺実測図 …… 21

第 5 図　箱式石棺出土状態平面実測図 …… 23

第 6 図　主体人骨実測図 …… 25

図　版　目　次

図版　1　石棺出土現場の地形 …… 49

図版　2　石　棺　土　壙 …… 49

図版　3　箱式石棺の出土状態 …… 50

図版　4　同 …… 50

図版　5　石棺外南側土層断面部分 …… 51

図版　6　同 …… 51

図版　7　箱式石棺内複体人骨の配置状態 …… 52

図版　8　同 …… 52

図版　9　石棺内東側人骨の配列状態 …… 53

図版　10　石棺西側人骨の配列状態 …… 53

図版　11　東人骨の上半部 …… 54

図版　12　西人骨の上半部 …… 54

図版　13　東人骨の頭部拡大 …… 55

図版　14　西人骨の頭部拡大 …… 55

図版　１５　人骨撤去後の箱式石棺の棺体 …… 56
図版　１６　同 …… 56
図版　１７　１号人骨（男性・壮年）頭蓋後面 …… 57
図版　１８　１号人骨（男性・壮年）頭蓋上面 …… 57
図版　１９　１号人骨（男性・壮年）上顎骨・下顎骨・歯 …… 58
図版　２０　２号人骨（女性・熟年）頭蓋後面 …… 58
図版　２１　２号人骨（女性・熟年）下顎骨・歯 …… 59
図版　２２　１号人骨（男性・壮年）上肢骨 …… 59
図版　２３　１号人骨（男性・壮年）下肢骨 …… 60
図版　２４　２号人骨（女性・熟年）上肢骨 …… 60
図版　２５　２号人骨（女性・熟年）下肢骨 …… 61

第１章　滑石小路の箱式石棺調査報告

第１節　発見の動機

市内梅林下平野原の丘陵地で採土工事の現場から、火葬人骨を収めた箱式石棺墓が発見され、この調査を終了して、その翌日自宅で実測図の修正、整理などをしているとき、その日の夕方近くになって、県立玉名高等学校から電話があった。社会科担当の者であるが、市内滑石小路の住宅新築現場で、石を組んだ箱のようなものが出ている。古い墓ではないかと思うが、これが出たので工事が進められないから至急に何とかしてほしい。というおもむきの現地からの依頼の電話があったが、本校としては筋がちがうので電話したとのことであった。昭和５７年９月６日の午後４時３０分頃のことである。

速刻玉名市教育委員会社会教育課の松尾克己文化財係員に連絡の上、同伴現地へ赴き、その状況を本日中に見ておく必要があるということになり、神社付近から南に入った建築現場を目当てに行くと、夕闇の迫るころであったが、すぐ目についた。待ち受けていた戸主に案内され出土地点に向う。五分通り進んだ南に向く建物の裏側にまわる。合板廃材の覆いが取り除かれると、新しいコンクリート基礎工事の外側すれすれのところに、直径１メートル、深さ７０センチほどの大穴が穿たれ、排土の盛り上った上縁に、中から出たという板状の大石が放置され、上面に塗られた朱色が鮮明に見え、穴の底には角形に組んだ石材の一部分があり、当主が手にするスコップの先で数回つつくと、白い片々が懐中電燈に照らし出された。人骨であり、箱式石棺の墳墓であることが明白となった。

建築工事は現在は内装工事に入っているが、トイレをこの場所にしようと考え、水洗式のマンホールを取り付けるため穴を掘っているとこの大石に打ち当った。この石を取り除かないと、その先が掘れないので、機械を使って引き揚げたところ、またその下にもこのような状態の石があった。これは古い墓ではないかと思うと祟りが恐ろしくなり、作業を中止し、どの方面に見てもらったらよいか分らず、急を要するので、取敢えず玉名高等学校へ知らせたら何とかして下さるだろうと思い、そちらへ電話したというのであった。

第２節　発掘調査に至る経緯

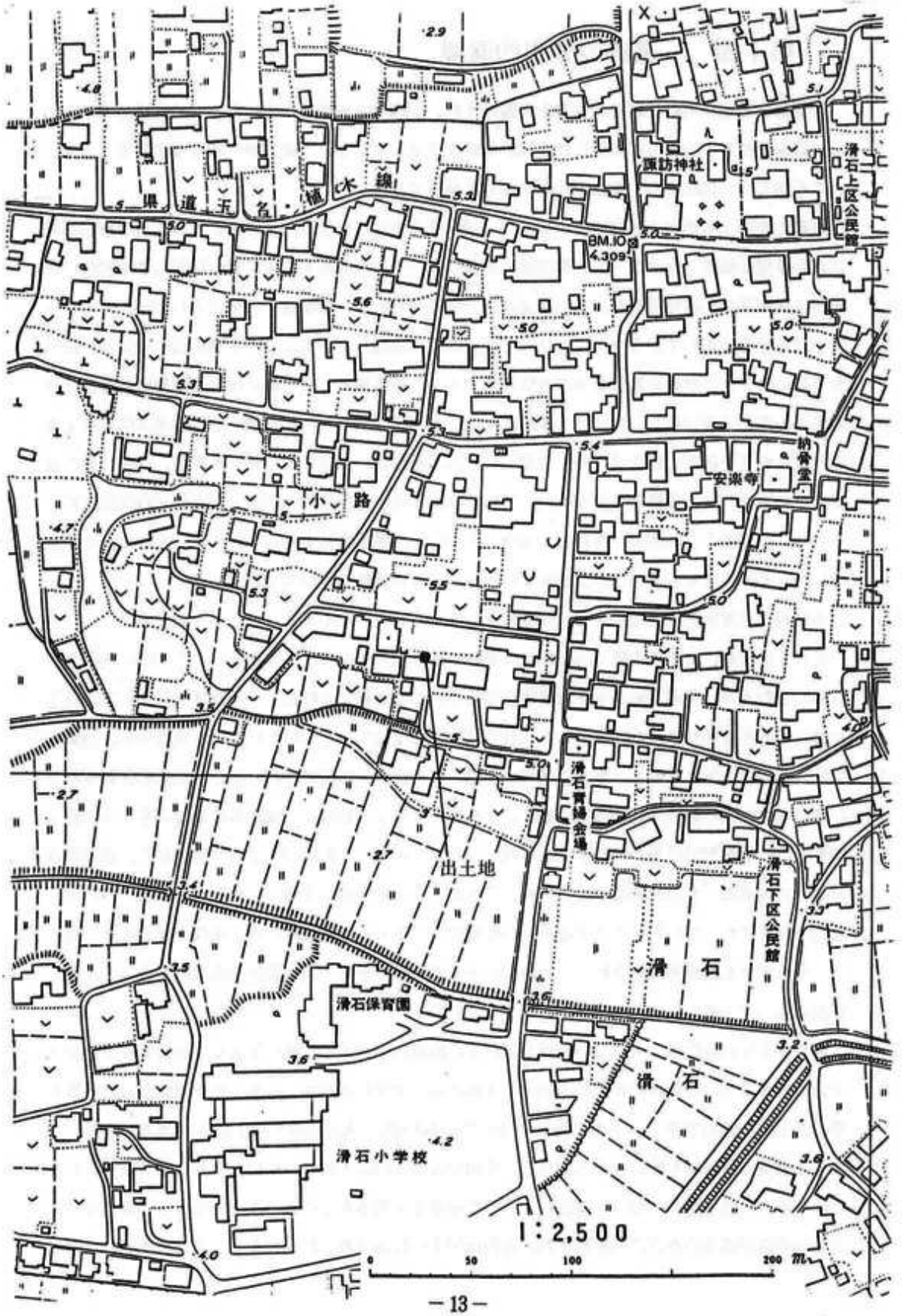
箱式石棺墓という埋蔵文化財が建築現場からはからずも発見されたのでこのあとのことについては文化財保護法の規定に基づいて処置しなければならないので、現地は手をかけないようにして覆いを施してもらい、次の指示を待たれるようにし、その翌日市教育委員会を通じて、熊本県文化財行政機関へ電話をもって発見と状況を報告した。実情から推して急を要すると思うので、速刻発掘調査を実施し、方法はその方へ一任する。終了後結果を報告されたい、との指示を受けたので、その旨現地へ通報し、市教育委員会側と発掘調査について打ち合わせ、この日の午後から実働に移すことにした。

現地では、尊い人の遺骸を埋葬した墳墓であるから、発掘に先立っては飽くまで丁重を期して、仏式に依る鎮魂の法会を執り行った。そのあと９月７日から向う同月１６日までの１０日を投入して、現地調査を終えた。

第３節　遺跡の立地・地形

遺跡の立地する滑石の集落地は、南面は清松、共和の二つの集落を包容する一面の純水田地帯を形成し、２.５キロをもって潮の干満差の大きいこと日本一と、遠浅を利用した海苔の養殖場として広く知られる有明海に達し、東は菊池川右岸流域平野を経て、約７００メートルにして菊池川と境界する。北は菊池川とその支流境川との流域平野が拡がり、小岱山の南麓がさらに南に伸びて形成する平坦な台地に対し、西は境川及びその流域平野と、平野の中に成立する中島の集落地を経て、岱明町の高道、山下等の台地に相対する。このようにして菊池川の西域と境川流域に展開する広汎な平野の真っ只中に自然的に形成された微高地上に営まれる滑石の密集集落の南端に遺跡が位置していて、この付近に最も高くて５.５メートルの標高を示す。地名を小路と呼び、箱式石棺を主体とした遺跡がここに発見されたわけである。出土地点は三戸並列する中央の家にあたり、北へ２メートルほどにして緑の葉波のそよぐ一面の水田地帯、西へ２０メートルにして同地区の公民館があり南へ水田地帯を隔てて、２００メートルにして市立滑石小学校の校地となっている。

第1図　遺跡位置・地形図


県道五名・福水線
諏訪神社
滑石上区公民館
BM.10
4.309
安楽寺
納骨堂
小路
出土地
滑石買物会場
滑石下区公民館
滑石
滑石保育園
滑石小学校
1:2,500
0
50
100
200 m

第４節　遺跡の歴史的環境

有明海と菊池川河口に臨み、台地から隔絶され、広汎な水田地帯の中に営まれた遺跡であるところに特殊性をもつ。従って周辺には古代の遺跡は成立しないという見方が一般的な傾向であった。ところがそうとは限らないことが近年になって分ってきた。

終戦直後頃から境川下流域の水田地帯で、川を挟んだ西は岱明町高道地区、東は玉名市滑石地区にかかる総面積約３００アール、深さ最大部分２メートル余りに及んで、製鉄原料とする砂鉄の大規模な採掘事業が進められた。この事業は長くは続けられず、数年後には閉鎖されたが、それから３０有余年を経過している今日、形跡もなく元の美田に帰している。この工事現場の中央部、岱明町高道の小字久々牟田にかかる川の右岸に接する一小微高地に、この地区民の鎮守神厳島神社が鎮座する。この工事に際し、当神社の西に隣して、地表下７０センチの地層中から弥生式時代終末期に比定される野辺式土器をはじめ、古墳時代に入る須恵器、土師器の小壷、丸底壷、高杯、碗、皿等やそれら断片など多数が発見された。当時その出土品は一括して社前の一民家に一時保管されていたが、そのあとどの方面に移されたか分っていない。厳島神社を俗に「いっちゃんさん」と呼んでいる。その呼名をもらって出土地を「いっちゃんさん遺跡」と命名されている。

小路箱式石棺墓の出土地点から西へ境川を隔てて５００メートル余りのところである。

これとは別に、ほとんど同じ時期にこの遺跡の沿う境川下流凡そ７００メートル付近の川底から近所に住む人が、完形大形の須恵器横瓶を発見したことが報じられた。その後まもなくして、自宅においても意味がない。学校生徒たちの社会科学習に役立ててもらいたいという良識から、岱陽中学校（昭和２２年４月創立、現在は岱明中学校と校名変更）に寄贈され、現在も大切に保管されている。本体は丸い筒形横長で両端は丸く、上面中央に丸くて短かく、縁が外にまるみをもって開く喇叭の口に似た形の口をつけた形に造られている。この類は玉名周辺では出土例がなく、重要視されるものである。６世紀末頃にはじまり、７世紀、８世紀を通じて造り、使用されたというのが一般的な見方になっている。そうするとこの横瓶がいっちゃんさん遺跡の成立年代とほとんど一致する。発見地点も距離的にも異動ルートの上からも考え合わせると同一遺跡の部類のものとする見方が濃くなってくる。

昭和５３年の夏の頃、大浜上の大橋上流付近の菊池川の川床で、柄の装着した磨製石斧１挺が大牟田方面からしじみ貝採取に来た人の手がきにかかって発見された。台地の弥生遺跡からは磨製石斧の出土例は極めて多く、決して珍しいものではないが、大河下流の川床から、然も柄の着いたままの発見は県内でも聞いたことがなく、全国でも珍しいことに違いない。川敷に打ち寄せられた土砂の中に石器土器片のひどく磨耗したものならばよく見るが、これらは上流地方の川岸付近に成立した遺跡が洪水のたびごと浸触され、遺物は川下へ打流され、長年かかって川底の土砂、一部は

第2図　周辺遺跡分布地図

お互い同志にすれ合い、もみ合って途中の土砂に引っ掛ったものであろうが、柄付石斧の出土地点からすると、菊池川上流川岸付近の遺跡としては、菊水町江田の縄文時代中期以降の遺跡とされる若園貝塚がただ一つあるだけである。ここは大浜大橋からは８キロをはるかに超ゆる遠距離であり流れもまれて行くうちに磨耗して、大浜付近に着いたときには見るかげもなく傷んでいるであろう。大浜付近の川床で発見されたとき磨滅の痕跡はまったく認められず、しかも完全な木製の柄まで付いていたことは、川流れによるものでなく、発見の場所が遺跡であったことを如実に物語っている。

大浜町は古い時代には川向うの小浜の集落と一つに合わさって浜村という集落を形成していた。加藤清正によって天正１７年（１５８９）から着工された菊池川の改修工事は浜村の中央を掘切って南へ注ぐ現在の川筋にした。浜村は二分されて大きい方を大浜、小さい方を小浜と名づけられた。この工事以前まで、浜村にこのようなすぐれた石器を使う部族の生活した遺跡があったことは、この遺物（柄付石斧）が立証している。つまり工事によって遺跡は壊され、遺物の一部が破壊から逃れ、或種の好条件に、川底に固く守られ流水に誘われることもなく原状を守り通したものと見るのが妥当ではないだろうか。小路石棺出土地から東へ1.３キロの地点に当り、今は消滅しているが、小路箱式石棺墓遺跡を取り巻き分布する関連遺跡の中に加えられるべきもので、特に注目に価する。

第５節　発掘調査の過程

１　梗　概

鎮魂の法会の済んだあと、調査の作業にかかる前に石棺確認当初のままの常態を写真撮影する。石棺上縁の露出部分を手掛りとして、西半部の覆土の排除にかかり、これを上縁の全体に及ぼす。中央部から僅かに西に寄って大小の板状石５個の一群があった。蓋石の残存する一部である。その西には蓋石がない。いつの頃かよく分らないが、棺縁は完全に遺存することから推せば、この部分には手がかけられたのであろう。次に全面を露出した棺縁の外周を幅５０センチにして縁と同じ高さに揃える。この作業にかかって全面に及ぶ濃厚な朱色の混入する土層となる。そこでこの状態をカラーを使って写真に記録する。そのあと、棺廓の周囲を従前の幅をもって土層の厚さ５センチづつ平面に削り剝いでこれを数回くり返して排土し、２０センチほど下げて棺内調査の場合の足場をつくる。同時に四囲の壁面を削り出して層序の状態を見やすくする。土層の第２層から下の層は細粒子の軟弱な砂土から成るので、作業もしやすい。このころになって墓孔の上縁は真赤になり、作業の手袋も、作業服の袖口も赤く染まっていることに気付く。勿体ないと思う心に捉われながらも、孔外に高く盛り上った排土の山を平らに均し、孔内に光線を導き入れて明るくする。而して全体を清掃したあと、写真撮影、実測製図によって記録に止める。朱色の最

も濃厚な部分を適量だけポリ袋に標本として採取する。現段階では蓋石の一部と石棺の上縁を露出させたところである。棺内の東半部は土の侵入が少なく、頭骨は半分ほどが発見当初から露出していた。このときにはすでに取り外され、上に引き上げてあった大石が蓋として覆っていたためである。蓋石はこの大石のほかに中央から西寄りに位置する板状石５個の一群が遺存することになる。西半部では１点の石片も認められず、棺内には黒色土の侵入が多くて、この段階では主体部、副葬品等の遺存状況については分らない。これから棺内の排土を行いながら主体部の精密調査にかかる。１日をかけて人骨に接触する深さまでの土を排除する。そのあともっぱら薄い竹篦と軟かい毛筆を使用し、細心の注意を払っての神経作業を続けること２日間、人骨部分の露出を一応は終る。当初から分っていたことではあるが、人骨の遺存状態は極めて良好で、然も頭骨が両端の位置に配された復合体であったことは、まったく心外の驚きであった。人骨の露出と同時に床面に近くなるころから副葬品にも十分の注意を払ったが、これまでには認められるものはなかった。

人骨の露出を終えたあと、その洗い上げと棺内の清掃を行う。この作業はさらに神経を要するもので、骨格を少しでも破損させないよう、骨組の構成を乱さないよう細心の注意を払い、能率を挙げて早く終ろうというようなものではない。この作業にも２日間をかけたが、清掃を終えたところで墓孔の上から眺めてみると、真紅に染った棺床の中に朱色の淡くのこる人骨の、互いに交錯する有様は壮観を呈して見えた。あまりの美しさに心を奪われてしまって、次の作業にうつることも忘れていた。モノクロ、カラーのふた通りの写真撮影のあと、全面に覆いをかけておき石棺外周の仕残りの壁面をつづける。棺外副葬品と墓孔の状態とに主力をおいて、少しづつ平面に削り取りを重ね、棺内床面と均等の層位まで掘り下げたところで、幅３０センチほどの、壁面とは異質の土層が棺外をめぐっている状態が明瞭に認められた。これが石棺敷設に伴って掘られた墓孔を示すものであることが分った。また棺側の中央部からわずかに西に寄るあたりから南へ８センチほど離れた位置に手こぶし大で、粒子が細かく表面のなめらかな丸石１個と、その地点から西へ５０センチ、棺の西端にあたるところから南へ１０センチのところに、細長い和釘とも、また尖根式鉄鏃の下半部ともつかない形体不明の鉄片１点がそれぞれ出土をみたほか、何も認められなかった。

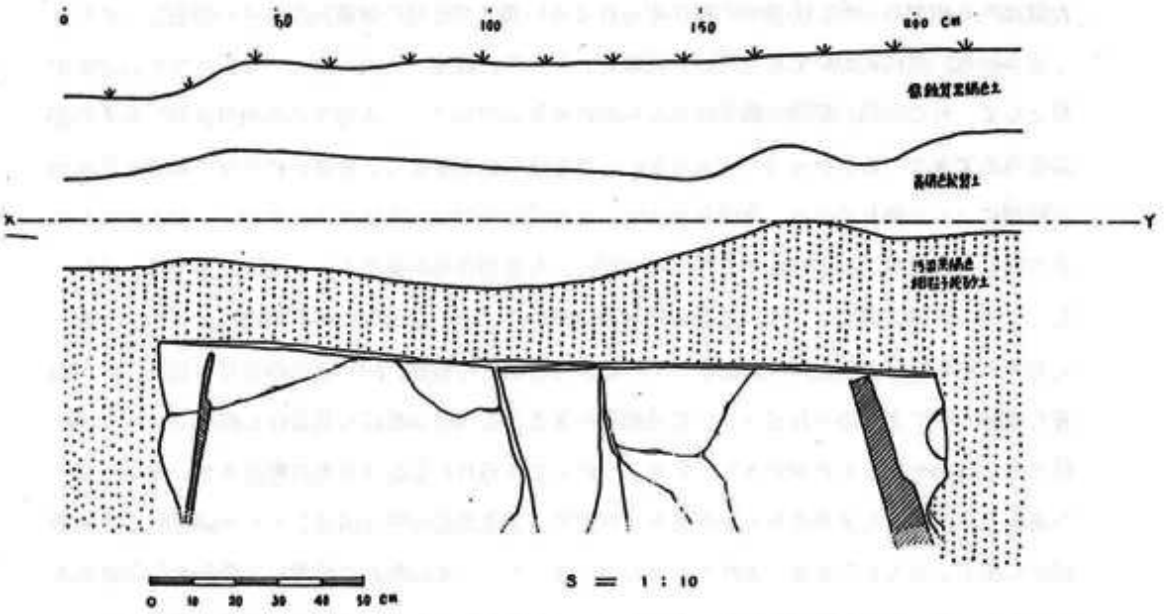
これで一応調査は終り、このあとは整理作業となる。再度棺内外の清掃について記録作成にかかる。石棺全体、石棺と孔壁との関係を示すもの、墓孔と石棺の関係を示すもの、人骨を含めた石棺全体等、写真二様、実測作図によって記録を作成する。このところで墓孔内に仏壇を設け、香華を捧げて一同合掌した。最後に棺内人骨実測図の転写図を用い、人骨各部を図上に分解してそれぞれ符号を付し、棺内人骨を符号に合わせて解体の上符号毎に梱包して容器に収め、そのあ

と棺底の副葬品の遺存状態を精査する。遺存するものがなかったことを確認して、棺体を解きはずし、全員かかって運搬用車に積みこみ一応市教育委員会事務局へ搬出する。一方調査あとの用具等の取片付け、整理など行って現地調査を完了した。人骨については、後日符号付実測図を添え、長崎大学医学部解剖学第二教室の内藤芳篤教授のもとへ送り、専門的分野の調査に委ねることにした。

2　箱式石棺付近の地層

北に標高５０１.４メートルの小岱山、東に標高６８５.４メートルの二の嶽（熊の嶽）の裾が南と西へなだれて、そのあいだに底辺１１キロ、高さ７キロにわたる三角形の低地を形づくって残し、山肌は長年月のあいだに洗い流されて三角形の低地を埋め、ある部分は盛り上がり、ある部分は低くなり、またある部分は平坦地をつくる。山の谷間の湧水はさらに雨水を加えて水量を増し、低地さして流れ、平坦な低地の表面を蛇行して海に入る。菊池、山鹿を経て玉名に入った菊池川は三角形の低地帯を南北方向の縦に二分する。低地帯は長年のあいだに沃野となり、そこには人々が入りこんで、砂丘上に集って住みつく。こうして長い期間を経て形成された集団生活の一群が滑石の集落である。海に臨み、玉名地方で最も標高の低い地域で、台地地帯の集落にまったく見ることのできない特異性をもっている。ではそのあたりの地盤組織はどのようになっているのだろうか。このことについては、大形建造物の設置で行う地盤検査のボーリング結果は別として、石棺墓発掘によって掘削した深さ1.３０メートル、長さ2.３０メートルの範囲について述べることとする。

発掘時の地表面は、トイレ設置工事によって幾分か変調が見られたが、前述第３節、遺跡の立地・地形の項の標高5.５メートルと記した数字は、ここの場合も変らない。地表下各層序に上ったり下ったりした乱れを生じていることは、石棺蓋石の西半部がすでに失われていたことに関係すると思うが、後世の人為的な所作の結果であることは間違いないであろう。その部分を除いて表土とする初層は最も厚いところで２７センチ、最も薄いところで１８センチ、腐触質の多く混入する黒色土で、腐触質分の多いのは古い建物のあとだからである。第２層は中央部が平坦になり、西側で１６センチの厚さをもって７センチほど上昇し、やや厚くなって元に戻り、さらに厚みを増し、平坦さをもって西へ伸びる。東端はわずかに厚みを減じて下の方向へ伸びる黄褐色土層、以下を第３層とし、粒子の細かな純砂土に、上層に被いかぶさる腐触質土が水分にあって溶解したものに汚染されたと見られる茶褐色を呈する層が石棺全面を包み、棺上部の最も高いところで３４センチ、最も低いところで１８センチの線を上限とし中央部に弓なりに下がり、西方に一部は盛り上った形となって第２層の下底部分に境界し、なお下方へつづく様相が感じられる。その線が掘削した土孔の下限になるのでこれまでに止めることとする。



第３図　　石棺付近土層断面実測図

3　箱式石棺の棺体

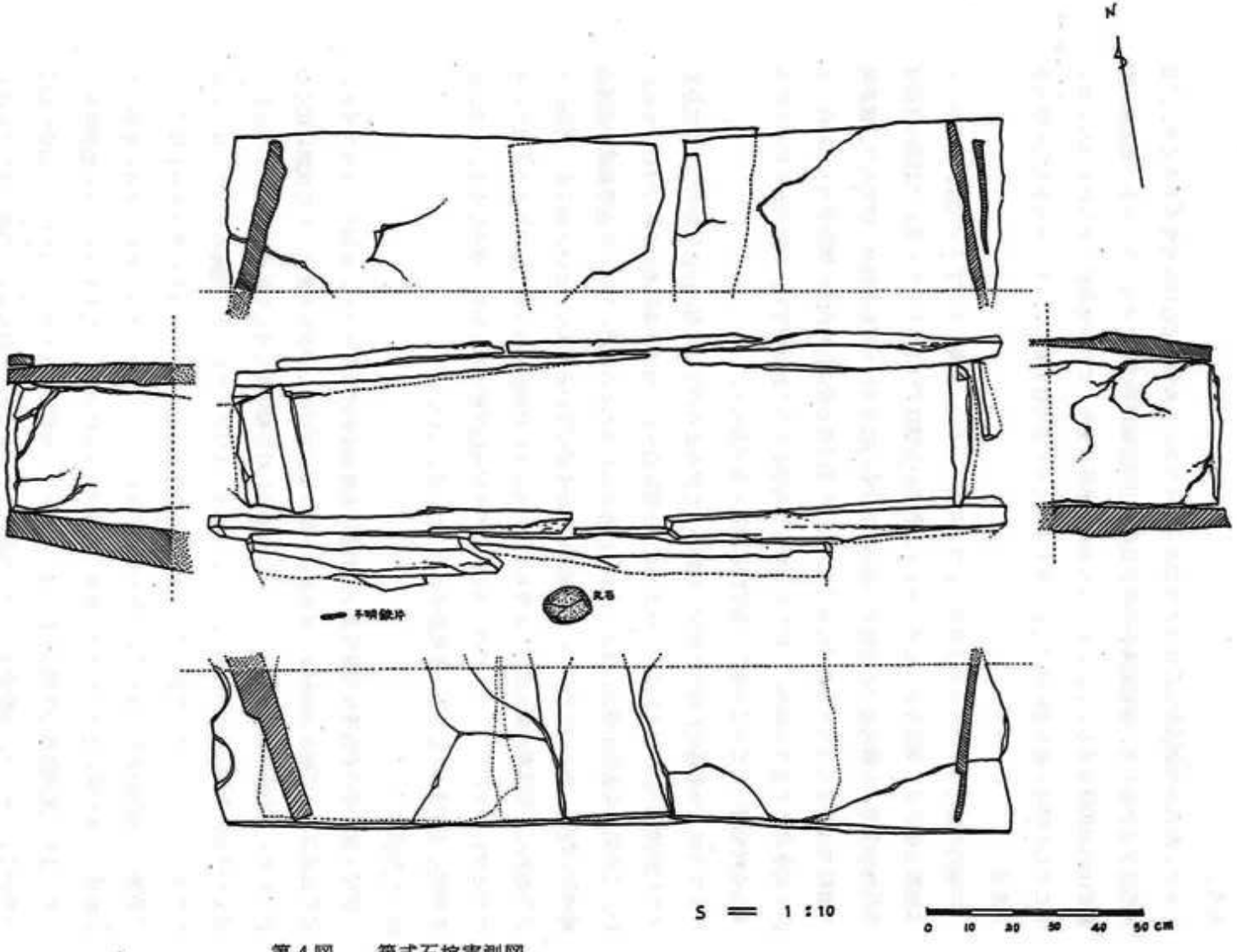
(1)　石棺用材

安山岩の人工でも加えたかのように見える形のよく整った板状の自然石、大小１３枚を用い、いずれも淡灰色の色調で粒子の細かな良質同種のものである。ではこの石材はどの地域から得られたものであろうか。ここではその範囲を城北地方に絞って検討してみることにしよう。

安山岩というものは火山の噴火によって生成された岩石であるから、火山の多い日本列島の至るところに産出する。九州島においては、南の方の南西諸島から開聞岳桜島、霧島、阿蘇を結んで一脈とした霧島火山帯と、北の方は加賀（石川県）の白山、伯耆（島根県）大山、出雲（島根県）の三瓶山、石見（島根県）の青野山、長門（山口県）の権現山、さらに九州に入って肥前（佐賀県）の多良岳、経ケ岳、同じ肥前（長崎県）の吾妻岳、雲仙岳等の火山系の山々を一連とする白山火山帯とが中九州で相会する接点に、金峰系の旧火山金峰山（一の嶽）、熊の嶽（二の嶽）、三の嶽等が、秀麗な姿で呼応し合う。このような山々は城北地方でただ一つの良質安山岩の産地で、その包蔵量は無限である。箱式石箱の棺材や小口積み石室の石材ばかりでなく、小さく破砕すれば縄文時代の後、晩期に多く出土する打製石器となり、さらにこれを磨いて磨製石器をつくり出し、また、もっと小さく砕いて石鏃をつくるなど、縄文、弥生時代を通じて石器の用材とし

た最高のものであった。山頂や山裾に祀られる古い神社や仏閣の参道石段や柱の礎石などにもよく見かける。現代においても大理石や花崗岩と並んで、庭園、石垣、敷石、壁張りなどの建築用材として、その利用の範囲は縄文時代から現代に及んで幅広く、人類生活に利用されて多大の便益を与えてきている。ひと口に安山岩といってもその種類も多く、特徴的に含有される有色鉱物の種類によって輝石安山岩、角閃石安山岩、黒雲母安山岩などに区別されている。安山岩の石材を生成した火山系の山裾にはその採石場が開け、石器製作場が発展する。城北地方では、近年になって国の史跡に指定されている菊池郡西合志町の二子山石器製作遺跡を筆頭に、三の嶽北麓、玉名郡玉東町原倉の町史跡に指定されている大谷石器製作所跡、同じ原倉の立岩石器製作跡が顕著な遺跡としてよく知られるほか、この地方の至るところの山肌に石器製作の断片や、細片が堆積または露頭を見ることができる。このようにして作られた石器は各地に搬出され、縄文、弥生の遺跡から決まったように出土をみるが、石棺では玉名郡岱明町の国道２０８号線に沿う大原遺跡から出土した大小１３基、またそこから北へ８０メートルの地点に位置して西南大門遺跡があり、大小３基の箱式石棺が出土し、玉名市内では方格規矩鏡を出した繁根木の宮中箱式石棺、山田の中馬場箱式石棺、同区高岡原のいっちょ畠箱式石棺、高岡古墳、築地西の西の山古墳群の３基中の２基等があり、菊池川東方の台地では寺田古墳群５基、高田古墳陪塚１基、南の方では天水町部田見丘陵上の塚の神古墳の西に出土した箱式石棺１基、米の山箱式石棺の１基、さらにその東方で大塚古墳陪塚石棺４基等、すべて安山岩を利用した石棺墓である。なお安山岩で作った石器を多く出土させた遺跡としては、岱明町野口の年の神遺跡、菊水町松坂の松坂原遺跡、玉東町原倉の大谷と立岩の両石器製作遺跡、菊池郡西合志町の二子山石器製作遺跡等が挙げられる。飽託郡北部町の太郎迫遺跡は、小路箱式石棺出土地からは随分遠距離になるが、安山岩で作った打製石斧を主体とした大量の打製石器を出土させた遺跡としてここに挙げておきたい。

安山岩が山中や山裾の土中に埋没するものの多くが塊状をなして剝離性に乏しく、海浜に屹立する岩山、または岩壁において剝離性が高い傾向にあるように思われる。小路石棺の地点から東へおよそ８キロ、熊の嶽の北西裾あたりから飽託郡河内町を経て熊本市の区域に入り、松尾町坪井川河口付近まで海に面して延々とつづく岩壁はすべて剝離性の安山岩である。この長さはおよそ１０キロにも及び、延々長蛇の岩壁上のゆるやかな斜面には、総数５５基にも余る古墳が分布している。特に坪井川河口の白川と相接する付近では北に権現山と、その南裾で西に高城山と東に楢崎山の三つの小丘陵が５００メートルを隔てて相呼応し、山裾や山頂には、国指定の装飾古墳として全国に知られる千金甲甲、乙号の二大古墳を中心に、総数３８基が集中的に分布し、その多くが横穴式石室古墳や箱式石棺を主体とした剝離安山岩造りの古墳である。これらのものの構築に当っては、無限に産出する地元の石材が用いられていることは、もう疑う余地はないであ



第４図　箱式石棺実測図

ろう。

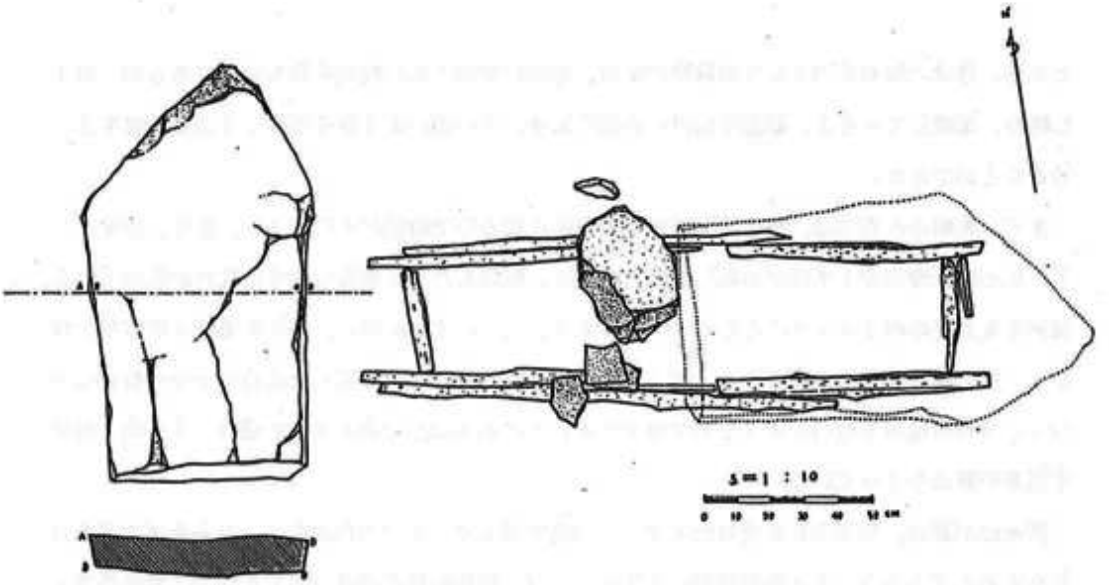
さて、滑石の小路石棺の石材はどうであったろうか。この周辺で石材産地を考えるとき、花崗岩を産する小岱山と、溶結凝灰岩を産する菊池川中流域が挙げられよう。ところが小路石棺が剝離安山岩が用材である以上、これらのものは無関係にあり、これを他地に求めなければならない。そこでこの用材の最も近い産地として第１に考えられるのは金峰系の小天、河内あたりの臨海地である。

地域的に輸送の上からみては最適のようである小岱山の、南麓に分布する状況は、先ず西の山古墳群と保多地古墳群を取り上げてみると、西の山古墳群では４基のうち１基だけが地元に産する花崗岩を用いる横穴復式石室墳で、他の３基は安山岩を用いた箱形石棺の古墳であり、保多地古墳群では５基のうちの４基は花崗岩で、他の１基は処女墳のため内部の構造が分っていないが、同じ花崗岩とする見方が強い。総じて、横穴式石室をもつ大形古墳では、造営地近くに多く産出する石材を用いたことは当然で、塊状巨石が適するであろう。

ところが、小形箱式石棺では塊状の花崗岩では組みようがなく、西の山古墳群中の３基に見るような板状安山岩が望まれる。このように、必要に迫られて用材を遠隔地に求めなければならない。この場合も金峰山系の石材よりほかには考えられるところは浮ばない。交通運輸網や交通運輸機関の陸上、海上、空界を問わず飛躍的に進歩を遂げている現代ならばいざ知らず、当時のことであれば、重量物の輸送は陸上よりも海上に頼っていた傾向にあったことが言えると思う。そうだとすれば滑石と、小天、河内、あるいは坪井川河口付近は同じ海浜の連らなるところで、海を利用して運び入れたことは至極簡単であったに違いない。

(2) 石棺棺体

建築工事現場の不均等な地盤地表下、棺身の上縁が東側で６７センチ、西側で７３センチのところに位置し、主軸を北緯線より9.5度西へ傾け東西方向に、東側を５度高くした状態に収められていた。安山岩の板状に剝離した大小１４枚の石材を縦に長く立てて矩形に組み、いづれも上部をわずかに内側に傾け、西側では広い石２枚を、中央に２０センチの間隔をとって１線上に並べて立て、２０センチの空隙には小形の板状石を挿入し、さらにその外側に板状大石１枚を当てて補強し、西側の大石にはさらに１枚を外側に添え全長１８６センチの南側壁とする。北側は広い板状石２枚を縦にとり、中央部の継目には外側にさらに加え、全長１７９センチの北側壁をつくる。また南北両側壁の空間の東側では３４センチ、西側では３１センチのあいだに側壁の両端の東側で１０センチ、西側では南側壁の西端から２０センチほど内に入れ、内側へ３０度傾けて取り付け東西両側をつくる。内部は中央部にわずかに広く、東側で３４センチ、西側で３１センチの棺幅に対して棺の上縁は３９センチ、棺底で４３センチをとる。棺床は棺上縁から４０セン



第５図　　箱式石棺出土状態平面実測図

チほどの深さ、地表からは１メートル１０センチの深さにあたる自然に形成された細粒子の純砂層の上に、厚さ８センチから１０センチ程度の粘土質土を一面に敷いて固め、その上に厚さ３センチほどの土砂混りの朱粉をおいて棺床をつくる。

棺身の上面には大小の安山岩板状石を並置して棺身を覆っていた形跡が、遺存する大石１点と中央部を覆っていた５個の板状石などで察知される。一般的に各地に出土例を多くみる普通形の箱式石棺である。素性のよい剝離安山岩を使用するため、棺形がよく整い、棺蓋の西３分の１程度がなくなっていたほか、すべて原形を止めていて、典型的といえる箱式石棺を満足に調査することができたと思っている。

なお、多くの箱式石棺の出土例では石材の接合する部分に弥生式時代の合口式甕棺の場合も同様、粘土をつめて内部を密封する例をよく見るが、ここの石棺ではそれは見られなかった。

(3)　小路石棺の被葬者

新築住居のトイレを設置するに当って、マンホールを埋めるために掘開された孔底に棺材の一部と、その内部にすでに頭骨の上部が見えていて、その状態から推して完全に近い主体人骨が遺存していることが見当づけられた。頭骨の一部のほか、朱粉の多量に混入する土がほとんど棺内を埋めつくしていたので、人骨に伴う副葬品も同時に十分な配慮の上で、排土には特段の注意を払った。排土なかばにして中央部付近で、脚部のつけ根あたりに骨格の異様を感ずるものがあり、左大腿骨に平行する腓骨が胸の付近に位置してあらわれ、しかもそれが逆の配例になっている。このことで主体人骨は１体ではないことを知った。ほとんど完全に近い複体の骨格の交錯すると

ころを、丹念の限りをつくしての精密作業は、細かい神経と長い時間を要したのであるが、排土し終り、洗滌してみると、頭部を棺内の両端におき、互い違いに２体を埋葬してある状態をよく見ることができた。

まず、東側の人骨では、棺体は主軸が東西方向になるので頭部が東に配され、椎骨、肋骨と、手、足の指、顔面の上半部が消滅しているほかは、胸部あたりに骨格の多少の乱れが認められる。頭部を東側壁の内３センチのところの中央におき、北へわずかに傾け、胴体を南側に片寄せ、背を丸くして縮め、膝を北壁に接し、顎下から骨盤までの長さが、伸展した場合の半分の長さしかなく、脛骨の位置も棺内の中央をやや過ぎたところにあるなどの諸点が示す通り、北へ向く横臥半屈葬の葬法をとっている。

顔面の消滅は、発見当初に受けたスコップの傷跡であり、この所作がなかったら今まで完全な形を止めたであろう。また胸部骨格の多少の乱れは、肉体の腐敗の進むにしたがって骨組を支え保つものがなくなり、漸次骨格の変動を生じたものであろう。西側の人骨では、東側の人骨と互い違いの配置になっているので、頭部を西端に２センチの間隔をとって位置し、しかも西北隅に片寄り、主体は棺の中央に正しく仰臥伸展し、両足を南側に寄せて左膝を右膝に接したまま、東人骨の上に乗せかけた状態が見られる。この状態は一つには西人骨が後の追葬であるとする２体埋葬の場合の前後関係を示すものである。椎骨、肋骨と顔面、頭部上面、手足の指など消滅し、東人骨に比べて特に胸部あたりに空隙が目立つ。

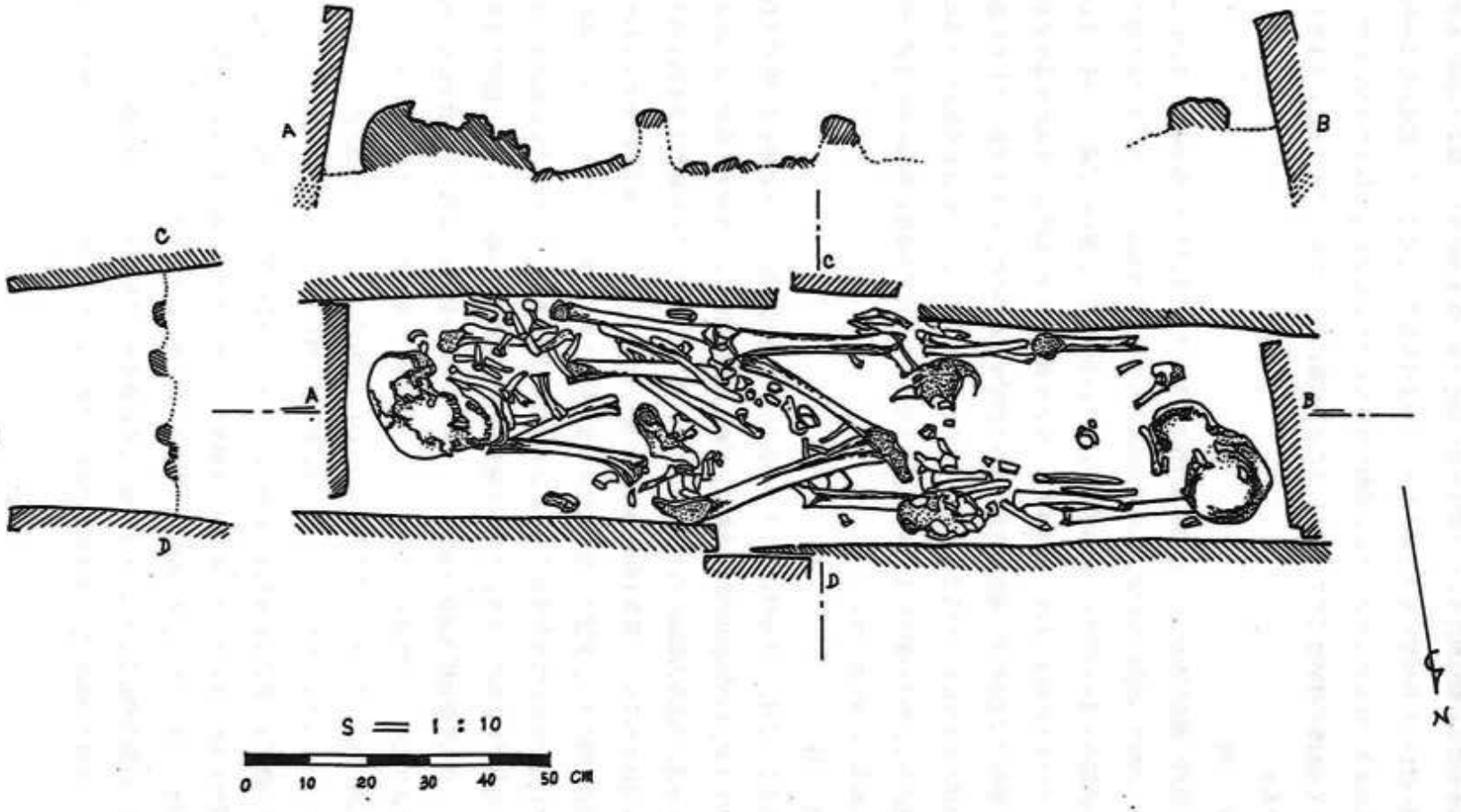
このことでは、調査当初まで東側３分の２程度が蓋石に守られ、内部の保存に効果を奏していることは、遺存状態の極めて良好な骨格によって察知され、西側３分の１程度は、早いころ人為的に剝ぎ取られたのであろう。蓋石は失われていたわけで人骨の保存に大きく影響していることは争えないであろう。

１基の石棺内に２体、またはそれ以上に合葬した例は多いので何も珍しいものではないが、海浜地域の標高5.5メートル、地表下1.１０メートルの土層から出土しているので、海抜は4.４０メートルとなる。このような海浜に臨む最も低いところに当って、２体合葬でしかも完全な人骨の遺存をみた例はここだけではないだろうか。それだけに学術的にも高く評価されよう。

２体合葬の主体者たちは、取りも直さず夫婦であり、あの世においても夫婦仲よくしあわせに暮してもらいたいとの、送ってくれた人たちの心づかいがしのばれる。なお人骨の細部については専門的分野の見解を俟つことにしたい。

(4) 副　葬　品

古墳の石室や石棺に副葬された遺物が、その古墳や石棺の造営年代を判定する第一の鍵となることから、発掘調査に当る誰もが、主体人骨と並び神経を傾注するものである。まして、内部に



第６図　主体人骨実測図

埋蔵される金銀宝石製品が出るという期待が或いは先に立つかも知れない。筆者（田添）も後者の方が或いはいつわりのない本音であろうか。このような観点の上に立って、結果的には一物をも認められるものはなかったにしても、発掘してみないとそのことが分るものではないので、発掘に当っては副葬品は副葬されているということを前提においてかかるべきことはいうまでもない常識である。

① 棺　内

まず、棺内の調査にかかった。当初棺蓋の西方の３分の１ほどがすでに剝ぎ取られていたことから、いつの時代か判明しないが、人の手がかけられていて、内部はかく乱されていると思うと、副葬品への期待も薄らいできた。だが手がかかっているにしても、幾分かが遺っていることが多いので、このことに励まされて、慎重さをもって人骨露出に併せ、副葬品の探索に作業を進めて行った。結果では完全に近く遺存する複体人骨の錯綜する組織には、ほとんど錯乱された形跡はなく、原状のままを止めていることが分った。それに望みをかけ、十分の注意を払い、さらには人骨撤収のあと、棺床の調査に至るまで精査の手をつくしたのであるが、棺内においては一物をも認められるものはなかった。

② 棺　外

昭和３３年７月、玉名市伊倉の中北で小形の合口甕棺の北側から大形鉄斧１点が発見され、昭和３９年４月、岱明町開田の院塚古墳第２号船形石棺外南側から中形鉄斧１点が、さらには昭和４０年５月、玉名市山部田の山下古墳後円部の船形石棺外南側から中形鉄斧１点と鉈１点とがそれぞれ発見されるなど、筆者（田添）が調査に携わった玉名市及びその近郊内だけで、これだけの棺外副葬の例があり、範囲を拡張すればその数は極めて多く、挙げるまでもないが、一般的に棺内だけに主力を注いで棺外をおろそかにされていた傾向にあった。このような見地に立って棺内同様、棺外にも十分に心を用いて調査を厳しくした。棺の外周を幅４０センチ、棺縁下２０センチまで、排土を兼ね棺内調査の足場をつくった。この場合も棺外の副葬品にも留意した。棺内の調査を終えたあと、棺形確認を併せ、外周の土層を除く作業では特に気を配った結果、棺外中央部から南へ８センチの地点に手こぶし大の丸い石１個があり、さらにその西５０センチほどの同じ高さのところに位置して、細長い鉄片１点が発見された。

石棺を包囲する土層は全面細粒子の砂層で、他に１点の雑物の混入を見ぬ状態の中にただこの丸石１個があるだけで、人工の加えられた形跡もない自然のままの石塊のようで、何に使った石なのか判断のしようがなく、この位置にあるからには何かに役立てたものとも思うが、副葬品と決定するには難点があるであろう。また他の１点の鉄片は、角形の和釘か細身鉄鏃の下半部か、長さ４センチほどの断片で、しかも腐触が深いため形状さえ把握し難い。出土地点が棺体から離

れていることや傾斜している状態は、副葬されたものでなく、放置されたものであるとする見方が濃厚である。棺外に副葬された場合のほとんどが棺側に接するようにし、丁寧に置かれている。このことから考えてもこの鉄片１点も、棺に副葬されたものではないことで処理しなくては仕方があるまい。

第６節　小路石棺の年代考察

一般的に箱式石棺は、４個以上の平板石を四角に組み合わせ、上面にも同様の石材を覆うて蓋とした構造をとる極めて簡単な遺体を埋葬するための容器である。日本の箱式石棺のはじまりは、弥生文化の外来伝播ルートのころとみられている。ところが長崎県島原半島南部、北有馬村の原山遺跡の一例では、支石墓に混って箱式石棺が発見されている。周辺から出土した山の寺式の最も新しいもの、または縄文土器で最も新しい夜臼式土器を年代判定の基準にして、縄文終末期に比定している。この石棺は縦８０センチ、横５０センチ、深さ６０センチという小形で正方形に近い形をもち、縄文式文化の風習である屈葬墓であろうと解されている。長崎、佐賀、熊本各県、それに加えて隣県の山口に及んで多く分布を見る形式のものと異なり、これを基準とするには無理があり、特例として扱うよりほかないであろう。熊本県内で特に南玉名地方で過去の経験の上から、弥生式時代の中期、またはその前後ごろから甕棺と並行に群集し、古墳時代になってもなお形を変えることなく、終末期に及んでいることが言える。このような箱式石棺の年代を何によって判定するか。ここではこの問題が主題となるわけで、第１に挙げられるものは何といっても豊富な副葬品である。多いほど明確に判断出来、少いほど判断に苦しみ、副葬品が１点も出土しなかった場合、いよいよ困難となってくる。不確実ながら石材や棺の構造若しくは周辺からの出土遺物に頼るほかない。

昭和５８年５月のこと、菊池郡西合志町の迫原石棺を調査した一例では勾玉、小玉など多数の玉類、鎌、鏃先、鉄鏃、刀子、鉄斧、直刀などの農工具、武器合わせて１０７点の出土を見たが、全長1.９０メートル、幅５０センチという普通形の石棺で、小路石棺が全長1.８０メートル、幅３５センチを測り、迫原石棺がわずかに大きい違いはある。小さな簡単な構造の棺内に、封土を有する石室の大形古墳に副葬されるほどの副葬品のすべてが網羅されている。あるいはそれ以上かもしれない。このような例はざらに存在するものでなく、恐らく特例中のまた特例であろう。豊富な副葬品がその石棺の年代を確実に示しており、年代判定はいとも簡単にできる。

玉名地方の南部だけで３０基に及ぶ箱式石棺の出土例を数える中で、岱明町大原遺跡１３基、そのうち第１号棺で古式鉄鏃１点、第９号棺で鉄鏃半欠品１点、第１３号棺で勾玉２点、管玉半欠品１点、刀子１点、玉名市繁根木の箱棺から小形の方格規矩文鏡１点、同市溝上の赤禿山石棺から鉄

刀1振、天水町大塚古墳の陪塚箱棺から小形の漢式鏡1点等が挙げられるほかは、まったく副葬品の出土がなく、記した通りに出土品の貧弱がよく分り、西合志町の例と一様にはいかないことも十分理解されるであろう。

ここで小路石棺の場合前にすでに述べた通り、棺外発見の鉄片1点がある以外割合に幅が狭いとする棺形と、剝離のよい棺材と、この地点から西へ700メートルのところに位置するいつちやんさん遺跡の野辺田式土器などを不確実ながら参考にするよりほかない。そうしたところで弥生式時代の終末期から、古墳時代初頭期に位置づくれば、大きな違いはないであろうというところで結んでおきたい。なお、人骨の経過年数に基づく年代判定は、長崎大学医学部解剖学第二教室の専門分野の調査結果を俟つことにしたい。

（参　考）

(1) 熊本県埋蔵文化財遺跡地名表
熊本県教育委員会　昭和37年度

(2) 熊本県埋蔵文化財包蔵地一覧表
熊本県教育委員会　昭和51年度

(3) 図解考古学辞典　水野清一・小林行雄
東京創元社刊　昭和52年7月

(4) 大原遺跡発掘調査記録帳
田　添　夏　喜　昭和42年7月

(5) 大原遺跡遺物発見届出書控
岱明町教育委員会　昭和43年9月

(6) 南大門西遺跡調査記録帳
田　添　夏　喜　昭和35年11月

(7) 嘉島村出土箱式石棺　粘土枕二体合葬の例
熊本史学　35号・36号　昭和45年3月

(8) 迫原箱式石棺　調査報告　第2集
西合志町教育委員会　1983・10

(9) おさき墓地古塔碑群　熊本県文化財調査報告　第30集　中世墳墓の調査
熊本県教育委員会　昭和54年3月

(10) 北牟田塚墳墓　玉名市文化財調査報告　第3集
玉名市教育委員会　1979・3

(11) 世界考古学大系　2　日本Ⅱ
平　凡　社　　昭和３５年４月
(12) 玉名社会科研究会報　第１巻　第３号
玉名社会科研究会　　昭和２７年３月
(13) 玉名社会科研究会報　第７号
玉名社会科研究会　　昭和２８年４月
(14) 新・熊本の歴史　5　近世（下）
熊本日日新聞社　　昭和５５年４月

あとがき

滑石の小路石棺について調査を行ったが、その結果を一応まとめ終り、長崎大学医学部解剖学第二教室の内藤芳篤教授、同松下孝幸講師の人骨全般の調査結果を併せ、一書にして茲に刊行の運びとなったことを何よりもの喜びとする。

発見当初、現場に赴いてから人骨の遺存する典型的な箱式石棺であることが分ったとき、まず驚いたことが二つあった。その一つはこのような海浜の低地帯に、完全な人骨をのこす古式の墳墓が存在していたこと、他の一つはトイレ設置の穴がはからずも偉人の墳墓に掘り当ったことである。前の一件についてはこれまで菊池川下流域平野が全面的に、加藤清正の肥後入国まで、波浪の打ち巻く海であった。伊倉町台地の西には良港が開けこれを丹倍津と呼び、唐船も多く来航した。現在も衰えを見せず断崖上に聳ゆる大銀杏は、当時栄えた桜井山安住寺の遺物であるが、唐人船つなぎの銀杏というその名や、唐人が多く来航して住みつき町をつくったという唐人町の名も、すべてそこに由来している。こうした考え方は歴史上のことは別として、海であったとする信じ方は今も変らず、専門史家のあいだですらその考えを信じ、定説のようにしてしまっている。そうした傾向のなかで、八代海、不知火海、有明海等県内臨海の干拓状況を多年にかけて研究してきた一老研究家が、菊池川河口域の干拓に関して、従来説を大きく変えた新説を打ち出し、いくつかの史書に発表した。この新説は北牟田塚と小路石棺の調査を終えたあと筆者（田添）の共感するところでもあった。即ち、昭和５３年３月発見の北牟田塚墳墓に加えた小路石棺の発見実例が、老研究者の新説を強く、しかも確実に実証するものとなった。この意味において小路石棺調査の成果は、学界にも一石を投じたことになろう。

マンホール用の穴がはからずも偉人の墳墓に掘りあたる、粋な言葉でマンホールというが、実は昔から家の中で一番きたないところとされた。人間の排出物の溜め場で、不浄どころ、それが昔から最も崇敬され、最も神聖される偉人の墳墓に掘りあたるとは、何という貧乏神のたわむれだろうか。

昭和３４年８月のこと、岱明町野口の大原遺跡東南方１００メートルのところで、住居を新築し、便所の溜つぼを掘っていたとき、地下７０センチのところで、中国南宋代の画花花弁文の青磁碗同形２個と土師器の糸切皿６個を掘り当てた。

奈良県で終戦直後、駐留軍が盛土の封土をきり開いて、付近に兵舎を建て、きり開いた場所にトイレを造った。元の盛土が古墳で、古墳の上にトイレを造っているこの事実を知って早速駐留軍側に申し入れをしたところ、そんな尊いものとはまったく知らなかった。とんでもないことをしてしまった。と大変恐れ入って、直ちに取り除き、他の場所に移したという、似たようなことがあるものだと、いま思い出している。

小路の現地では、とんでもないえらいものに掘り当ったものだ。建築がこうまで進んでいる上はどうすることもできはしない、祟りを受けるのではないだろうか、家中に不幸が続くのではないだろうか、などと大変なくやみようというか、恐ろしがりようというか、言い表わせない様子、何をおっしゃいますか、この石棺が発見されたことで、むかしこのあたりは海であったと学者までが信じていた。あなた方もそうだったでしょう。それが海でなく、陸地であったことがこれではっきりしたではありませんか。あなた方は学界に大きな手柄をたてた大功労者ですよ。そんなつまらんことは考えないで、今後この場所に一郭をとり、石碑でも建て、立派に整備の上、香華を供えて祀ったら祟るどころか、この家の守り神となって、ますます栄えるようにして下さるはずですよ、とさとして聞かせ、慰めてやるなど、気をその方に向けられるよう努力した。我が身におきかえてみると家中の気持はよく分るのである。なるべく近所に知らさぬように、教育委員会関係以外者の立入りをかたく禁じ、それでもどうして知ったのか、見学者がぞくぞくやって来る。断られて引き返す人もずいぶん多かった。新聞発表も是非必要とあれば仕方ありませんその場合は名前だけはひかえさせて下さい、との切なる申し入れであったので、その意志を尊重して、従って本書にも一切氏名をさしひかえた。

こうしたことで、いままでにない苦い経験というか、それよりも、尊い経験といったほうが適切であろうか。そういった経験をしたことが特徴的なところだろうか。

この調査に当っては、主体者側の玉名市教育委員会社会教育課におかれては、本務の一端とはいえ、野間和夫課長をはじめ課内全職員がうまくやり繰りして、現場作業に従事し、特に松尾克己文化財担当者は、終日、連日にわたって熱心に現場作業に従うなど、お陰をもって調査の実績を挙げることができ、また長崎大学医学部解剖学第二教室の内藤芳篤教授並びに同松下孝幸講師におかれては人骨関係全般をお願いし、ご多忙の中に大変な御迷惑をかけ、その結果を本書に加えさせていただいたことを喜んでいる。なおまた、現地御当主は、せわしい工事の最中にも拘らず、その部分の工事を中断し、また終始何くれと調査上の便宜を計って下さるなど感謝に堪えず、共々、本書を借りて深謝の微意を表したい。

昭和６０年２月２８日

調査担当者　田　添　夏　喜

第2章　玉名市小路石棺出土の古墳時代人骨

松　下　孝　幸

は　じ　め　に

熊本県玉名市滑石字小路に所在する箱式石棺の発掘調査が１９８２年（昭和５７年）に行なわれ、この石棺から人骨が出土した。この人骨は別稿で述べられているように、考古学的所見より、古墳時代前期に属する人骨である。

古墳時代人骨の出土例は、熊本県では珍しいことではないが、その割には他地方との差異を含めて、本県の古墳人の特徴はまだ明確になっていないのが現状である。また、本例は古墳時代でもその前期に属する人骨で、この時期の人骨の出土例はあまり多いものではなく、九州西部地域の古墳時代人の特徴を明らかにする上では貴重な資料となるものと考えられる。人類学的観察および計測を行なったので、その結果を報告しておきたい。

資　　料

箱式石棺から出土した人骨を解剖学的に精査した結果、残存していた人骨は２体分の人骨であった。従って、東頭位の人骨を「１号人骨」、西頭位の人骨を「２号人骨」とした。この２体の性別年令は、下記の所見より、次のように推測した。

人骨一覧

人骨番号	性別	年令
１号人骨	男性	壮年
２号人骨	女性	熟年

なお、この人骨は、別稿で述べられているように、考古学的所見より古墳時代前期に属する人骨である。

計測方法は、Martin－Saller（１９５７）によったが、一部はHowells（１９７３）の方法で計測した。また脛骨の横径はオリビエの方法で計測した。

比較資料としては、長崎県の愈場古墳人（松下、１９７９）、山口市の朝田墳墓群第Ⅱ地区にある横穴墓出土の古墳人（松下、１９８２）、西北九州弥生人（内藤、１９７１）および大友弥生人（松下、１９８１）を用いた。

所　　見

各骨についての計測値は文末に一括して示している。

1　号　人　骨（男性、壮年）

1．頭　　蓋

(1) 脳　頭　蓋

脳頭蓋の諸径はやや大きい。外後頭隆起の発達は著しく悪く、乳様突起も小さいが、乳突上稜は良く発達している。縫合は、三主縫合とも内板は開離しているが、外板については、冠状縫合とラムダ縫合は閉鎖しており、矢状縫合は大部分が癒合閉鎖している。

頭蓋最大長は１９０㎜、頭蓋最大幅は１４７㎜、バジオン・ブレグマ高は１３２㎜で、示数値は、頭蓋長幅示数が７７.３７、頭蓋長高示数は６９.４７、頭蓋幅高示数は８９.８０となり、頭型はmeso—，chamae—，tapeinokran（中・低・平頭）に属している。また横弧長は２９８㎜である。

次いで、比較資料との比較を行なってみた（表１）。頭蓋最大長はどの比較資料よりも大きく、頭蓋最大幅もどの資料よりも大きい。バジオン・ブレグマ高は朝田古墳人よりは大きいが、宮崎県の地下式古墳人および西北九州弥生人の平均値よりも小さく、大須賀古墳人と大差なく、頭の高さは低い。頭蓋長幅示数は大須賀古墳人、地下式古墳人および西北九州弥生人よりも小さく、朝田古墳人と大差ない。しかし、頭蓋長高示数と頭蓋幅高示数はいずれの資料よりも小さく、また、横弧長も比較群のいずれよりも小さい。

表１　脳頭蓋計測値（男性）

（㎜）

		小　路 1号人骨	朝田横穴墓古墳人（松下）		大須賀古墳人（松下）		地下式古墳人（松下、他）		西北九州弥生人（内藤）	
			n	M	n	M	n	M	n	M
1.	頭蓋最大長	190	4	183.00	1	169	6	183.50	21	182.81
8.	頭蓋最大幅	147	2	143.00	1	142	5	144.00	20	144.95
17.	バジオン・ブレグマ高	132	2	130.00	1	133	9	136.11	15	134.60
8／1	頭蓋長幅示数	77.37	2	76.71	1	84.02	1	80.56	20	79.17
17／1	頭蓋長高示数	69.47	2	73.93	1	78.70	5	73.82	15	74.15
17／8	頭蓋幅高示数	89.80	1	92.25	1	93.66	3	93.42	14	93.11
24.	横　弧　長	298	1	306	1	315	3	315.00	15	324.67

(2) 顔面 頭蓋

大部分が欠損しており、残存していたのは上顎骨の歯槽突起と下顎骨だけであった。眉上弓は強く隆起しているが、残存部分が少ないので、顔面の計測はできない。

(3) 歯

歯は比較的良く残存しており、大部分釘植していた。その残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

◉ M_2 M_1 P_2 P_1 C ／ ／	／ I_2 ／ ／ P_2 M_1 M_2 M_3
／ M_2 M_1 P_2 P_1 C I_2 I_1	I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 M_2 ／

（／：不明（破損）
◉：歯槽閉鎖）

咬耗度はBroca の1～2度である。また、風習的抜歯は認められない。

(4) 下 顎 骨

右側下顎枝の一部と両側の下顎頭を欠損している以外はほぼ完全に残存していた。下顎体は大きく、頑丈であり、下顎枝は幅広く、下顎切痕は浅い。

また、下顎体の内側には左右とも弱い下顎隆起が認められる。

2. 四 肢 骨

(1) 上 肢 骨

① 鎖 骨

左右とも両端を欠いていた。大きさは中程度である。

② 上 腕 骨

右側は、上腕骨頭の一部と大結節を欠いている以外は良く残存していた。長さはやや長く、骨体の径も大きく、三角筋粗面の発達も良好で、頑丈である。

最大長は３０５㎜（左）で、骨体最小周は６４㎜（右）、６３㎜（左）で、長厚示数は２０.６６（左）である。中央最大径は２５㎜（右）、２３㎜（左）、中央横径は１９㎜（右、左）で、骨体断面示数は７６.００（右）、８２.６１（左）となり、右側骨体は扁平である。また、中央周は７２㎜（右）、７０㎜（左）で、骨体はやや大きい。

次いで、他の資料と比較してみると（表２）、最大長は朝田古墳人、大友弥生人よりも大きく、また骨体最小周や中央周は朝田古墳人よりは大きいが、大須賀古墳人よりも小さく、大友弥生人の平均値に近い。長厚示数は大友弥生人よりは小さく、朝田古墳人に最も近く、骨体の諸径の割には長さがやや長いようである。また、中央最大径は３群よりも大きく、中央最小径も３群の比較資料

よりも大きい。骨体断面示数は大須賀古墳人、大友弥生人よりは大きく、朝田古墳人と大差なく、骨体の扁平性は大須賀古墳人、大友弥生人よりは弱い。

すなわち、本例は長さも長く、また骨体も太いものである。

表２　上腕骨計測値（男性．右）　(mm)

		小　路 1号人骨	朝田横穴墓 古墳人 (松下)		大須賀 古墳人 (松下)		大　友 弥生人 (松下)	
			n	M	n	M	n	M
1.	上腕骨最大長	305(左)	1	299		—	9	294.33
2.	上腕骨全長	—	1	294		—	8	291.75
5.	中央最大径	25	3	23.00	1	27	37	24.46
6.	中央最小径	19	3	17.67	1	18	37	17.97
7.	骨体最小周	64	1	62	1	67	37	64.57
7(a)	中　央　周	72	3	68.00	1	75	35	71.00
6／5	骨体断面示数	76.00	3	76.84	1	66.67	37	73.60
7／1	長厚示数	20.66(左)	1	20.74		—	9	22.32

③ 橈　　骨

右側は骨体の中央部の一部を欠いているが、その他の部分はほぼ完全であり、左側は骨体が残存していた。長さは長く、また骨体の径は大きい。

④ 尺　　骨

右側は肘頭の一部を欠いている以外は完全に残存していたが、左側は遠位部を欠損していた。長径は長く、また骨体の径も大きい。

(2) 下　肢　骨

① 大　腿　骨

左右とも骨体が残存していた。骨体の径はやや大きいが、粗線の発達は悪く、骨体の後方への発達も悪いもので、柱状形成の像は認められない。

骨体中央矢状径は２６㎜（右）、２７㎜（左）、中央横径は２８㎜（右）、２９㎜（左）で、骨体中央断面示数は９２.８６（右）、９３.１０（左）となり、骨体は矢状径よりも横径の方が大きい。また、上骨体断面示数は７５.００（右）、７５.７６（左）となり、骨体上部はやや扁平である。

次いで、他資料との比較を行なってみると（表３）、骨体中央矢状径は大友弥生人よりは小さく、

朝田古墳人および大須賀古墳人と大きな差はないが、中央横径は３比較群よりも大きく、骨体中央断面示数は朝田古墳人および大友弥生人よりも小さく、大須賀古墳人の値に一致している。また、上骨体断面示数は大須賀古墳人よりは大きいが、朝田古墳人および大友弥生人よりは小さい。

すなわち、本例の大腿骨の骨体は朝田古墳人および大友弥生人のそれとは異なり大須賀古墳人に最も近く、骨体後面の発達は認められず、骨体上部はやや扁平なものである。

表３　大腿骨計測値（男性．右）

(mm)

		小　路 1号人骨	朝田横穴墓 古墳人 (松下)		大須賀 古墳人 (松下)		大　友 弥生人 (松下)	
			n	M	n	M	n	M
6.	骨体中央矢状径	26	6	27.17(左)	1	25	41	28.85
7.	骨体中央横径	28	6	26.67(左)	1	27	41	26.07
8.	骨体中央周	86	6	85.17(左)	1	83	41	87.22
9.	骨体上横径	32	6	30.17(左)	1	32	42	30.62
10.	骨体上矢状径	24	6	24.50(左)	1	23	42	24.83
6／7	骨体中央断面示数	92.86	6	102.03(左)	1	92.59	41	111.72
10／9	上骨体断面示数	75.00	6	81.29(左)	1	71.88	42	81.34

② 腓　　骨

両側とも骨体が残存していた。骨体の径はやや大きいが、ヒラメ筋線の発達は悪い。また、骨体中央位における断面形は両側ともヘリチカのⅡ型を呈している。

計測値は、推定中央位における最大径が３０㎜（右）、横径は２０㎜（右）で、中央断面示数は６６.６７（右）となり、骨体はやや扁平である。また、最小周は８０㎜（右）、７９㎜（左）、骨体周は８５㎜（右）で、骨体は太い。

次いで、朝田古墳人、大友弥生人との比較を行なってみると（表４）、中央最大径および中央横径は比較資料と大差ないが、中央断面示数は朝田古墳人よりも小さく、比較的大友弥生人に近い。

また、骨体周および最小周は朝田古墳人および大友弥生人よりも大きく、骨体は太い。

表４　脛骨計測値（男性・右）　　(mm)

		小　路 １号人骨	朝田横穴墓 古墳人 （松下）		大　友 弥生人 （松下）	
			n	M	n	M
8.	中央最大径	30	2	29.50	35	31.26
8a.	栄養孔位最大径	—	2	34.00	30	34.63
9.	中央横径	20	2	21.50	38	21.29
9a.	栄養孔位横径	24	2	24.00	32	23.22
10.	骨体周	85	2	80.00	34	82.85
10a.	栄養孔位周	—	2	92.00	30	92.00
10b.	最小周	80	2	75.00	34	75.35
9／8	中央断面示数	66.67	2	70.48	34	68.03
9a／8a	栄養孔位断面示数	—	2	70.48	30	67.16

３．四肢骨比

右側橈骨と左側上腕骨の最大長が計測できたので、この両者の比を算出してみると７９.０２となり、上腕骨の長さのわりには橈骨が長い傾向にあることを示している。

この比を、宇久弥生人、宮の本弥生人および大友弥生人と比較してみると（表５）、橈骨と上腕骨との長さの比は宮の本弥生人よりもやや大きく、宇久弥生人および大友弥生人と大差ない。

表５　四肢骨比（男性・右）

	小路１号人骨	宇久弥生人 （松下）		宮の本弥生人 （松下）		大友弥生人 （松下）	
		n	M	n	M	n	M
橈骨／上腕骨	79.02（右／左）	1	78.55	1	77.38	7	79.69

４．推定身長値

左上腕骨および右橈骨の最大長から、Pearson の式および藤井の式を用いて推定身長値を算出してみると、表６のとおり、上腕骨からは１５８.９１cm（Pearson の式）、１５９.２２cm（藤井の式）、橈骨からは１６４.７６cm（Pearson の式）、１６２.１４cm（藤井の式）となり、上腕骨から算出すれば、低身長であるが、橈骨からは高身長になる。

表6　小路1号人骨推定身長値（男性．cm）

	Pearson	藤　井
上腕骨（左）	158.91	159.22
橈　骨（右）	164.76	162.14

次いで、上腕骨からの推定身長値を宇久弥生人、宮の本弥生人、大友弥生人および土井ケ浜弥生人と比較してみると（表7）、この4群のいずれの平均値よりも大きい。日本の古人骨の場合、上腕骨からの推定身長値は一般的に大腿骨から算出した値よりは小さくなるので、このことを考慮に入れれば、本例は低身長ではなく、むしろ身長はやや高いものと考えられる。

表7　上腕骨からの推定身長値（男性．cm）

小路1号人骨	宇久弥生人（松下）		宮の本弥生人（松下）		大友弥生人（松下）		土井ケ浜弥生人（財津）	
	n	M	n	M	n	M	n	M
Pearsonの式 158.91(左)	1	154.28	2	156.31	9	155.82	16	157.50
藤 井 の 式 159.22(左)	1	153.87	2	155.83	9	155.36		—

5．性別・年令

性別は、眉上弓の隆起が強いことや四肢骨が大きいことから、男性と考えられ、年令は縫合が内板において開離していることから、壮年と推定した。

2　号　人　骨（女性、熟年）

1．頭　　蓋

(1) 脳　頭　蓋

後頭半は完全であり、前頭骨も残存しているが冠状縫合部が欠損しているため、脳頭蓋を復元することはできない。外後頭隆起の発達は著しく悪く、乳様突起も著しく小さく、頭蓋の径も小さいものである。縫合は三主縫合とも内板は癒合閉鎖しているが、外板は開離している。

計測値は、頭蓋最大幅が１３２㎜、両耳幅は１１７㎜で、径はやや小さい。

(2) 顔面頭蓋

下顎骨のみが残存していた。眉上弓の隆起は弱く、下顎骨も小さく、下顎切痕も著しく浅い。また、下顎体の内側面には弱い下顎隆起が左右に認められた。

⑶ 歯

歯は下顎歯のみが残存していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で表すと次のとおりである。

◉ ◉ M_1 ◉ ◉ C ○ ○ | ○ I_2 C P_1 P_2 M_1 ◉ ◉

／：不明（破損）
○：歯槽開存
◉：歯槽閉鎖

咬耗度はBroca の2度である。また、風習的抜歯の痕跡は認められない。

2．四 肢 骨

⑴ 上 肢 骨

① 鎖 骨

左側の中部が残存していた。径は著しく小さいものである。

② 上 腕 骨

左右の骨体が残存していた。骨体の径は著しく小さく、三角筋粗面の発達も悪い。

推定中央位での最大径は１９㎜（右、左）、横径は１４㎜（右、左）で、骨体断面示数は73.68（右、左）となり、骨体は扁平である。また、骨体最小周は５１㎜（右）、中央周は５５㎜（右）、５５㎜（左）で、骨体は著しく細い。

次いで、長崎県大村市の憩場古墳人、朝田古墳人および大友弥生人との比較を行なった。中央最大径は憩場古墳人、大友弥生人よりも小さく、朝田古墳人に比較的近く、中央横径は３群と大差ない。骨体断面示数は朝田古墳人よりも小さく、憩場古墳人、大友弥生人より大きい。また、骨体最小周および中央周はこの３群の平均値よりも小さい。

すなわち、上腕骨の径は著しく小さく、比較的朝田古墳人に近いが、骨体の扁平性は朝田古墳人よりも強いようである。

表８　上腕骨計測値（女性．右）　　(㎜)

		小路 2号人骨	憩場古墳人（松下）		朝田横穴墓古墳人（松下）		大友弥生人（松下）	
			n	M	n	M	n	M
5.	中央最大径	19	1	23	2	19.50(左)	25	21.68
6.	中央最小径	14	1	13	2	15.00(左)	25	15.48
7.	骨体最小周	51	1	58	2	53.00(左)	20	57.65
7(a)	中 央 周	56	1	62	2	57.50(左)	23	61.96
6／5	骨体断面示数	73.68	1	56.52	2	76.84(左)	25	71.53

③ 橈　　骨

右側は近位端と茎状突起を欠いた骨体が、左側は骨体中央部が残存していた。径は著しく小さく、また、右側の骨体遠位部には変形治癒骨折の跡が認められる。

④ 尺　　骨

右側の骨体のみが残存していた。骨体は細くてきゃしゃである。

(2) 下 肢 骨

① 寛　　骨

右側の腸骨体が残存していた。寛骨臼は小さく、大坐骨切痕の角度は大きい。

② 大 腿 骨

左右とも骨体が残存していた。径は小さく、粗線の発達は著しく悪いが、骨体上部は扁平である。

推定中央位での矢状径は２１㎜（右、左）、横径は２５㎜（右、左）で、骨体断面示数は84.00（右、左）となり、矢状径よりも横径が大きく、骨体の断面形は横広い楕円形を呈している。また、上骨体断面示数は７0.３７（右）、６7.８６（左）となり、骨体上部は扁平である。

次いで、他の資料と比較してみると（表９）、骨体中央矢状径は３群のどれよりも小さく、また横径は憩場古墳人よりも小さく、朝田古墳人および大友弥生人と大差ない。骨体断面示数は大友弥生人はもとより、朝田古墳人の平均値よりも小さく、憩場古墳人にきわめて近い。また、骨体中央周および上骨体断面示数はともに３群のいずれよりも小さい。

すなわち、本例は骨体が細く、骨体の後方への発達は著しく悪いが、骨体上部には扁平性が認められるものである。

表９　大腿骨計測値（女性・右）

(㎜)

		小　路 2号人骨	憩　場 古墳人 (松下)		朝田横穴墓 古墳人 (松下)		大　友 弥生人 (松下)	
			n	M	n	M	n	M
6.	骨体中央矢状径	21	1	24	7	24.00	30	26.00
7.	骨体中央横径	25	1	28	7	25.29	30	25.03
8.	骨体中央周	72	1	82	7	77.43	28	80.32
9.	骨体上横径	27	1	31	4	28.75	32	29.06
10.	骨体上矢状径	19	1	23	4	22.75	32	22.75
6／7	骨体中央断面示数	84.00	1	85.71	7	95.47	30	104.05
10／9	上骨体断面示数	70.37	1	74.90	4	79.15	32	78.42

③ 腓　　骨

左右の骨体が残存していた。骨体は小さく、ヒラメ筋線の発達も悪い。また、骨体中央部での断面形は左右ともヘリチカのⅡ型を呈している。

推定中央位での最大径は２４㎜（右、左）、横径は１８㎜（右）、１９㎜（左）で、中央断面示数は７５.００（右）、７９.１７（左）となり、扁平性は認められない。また、骨体周は６８㎜(右)６９㎜（左）、最小周は６０㎜（右、左）で、骨体は細い。

次いで、他の資料と比較してみると（表１０）、中央最大径および横径はともに３群よりも小さい。中央断面示数は憩場古墳人および大友弥生人より大きく、朝田古墳人の平均値に一致する。また、骨体周および最小周も３群のいずれよりも小さい。

すなわち、腓骨もその径は著しく小さいもので、骨体の扁平性は認められない。

表１０　腓骨計測値（女性．右）　(㎜)

		小路 2号人骨	憩場 古墳人 (松下)		朝田横穴墓 古墳人 (松下)		大友 弥生人 (松下)	
			n	M	n	M	n	M
8.	中央最大径	24	1	29	6	26.00	27	27.26
8a.	栄養孔位最大径	27		—	7	29.57	25	30.56
9.	中央横径	18	1	21	7	19.14	29	19.48
9a.	栄養孔位横径	19		—	7	21.43	25	21.12
10.	骨体周	68	1	78	6	71.33	27	74.74
10a.	栄養孔位周	73		—	6	79.17	24	82.13
10b.	最小周	60		—	4	65.00	23	68.17
9/8	中央断面示数	75.00	1	72.41	6	75.19	27	71.79
9a/8a	栄養孔位断面示数	70.37		—	7	72.61	25	69.24

３．性別・年令

性別は、寛骨の大坐骨切痕の角度が大きいことや頭蓋の眉上弓の隆起が弱いことから、女性と推定した。また、年令は縫合が内板で癒合閉鎖していることから、熟年と考えられる。

総　　括

熊本県玉名市滑石字小路にある箱式石棺から１９８２年（昭和５７年）に、２体の古墳時代人骨が出土した。２体とも顔面頭蓋の保存状態は悪かったが、この他の部分は比較的良く残存していたので、計測および人類学的観察を行なった。その結果は次のように要約することができる。

1．２体のうち１体は壮年男性骨（１号人骨）で、残りの１体は熟年女性骨（２号人骨）であり、２体とも古墳時代前期に属する人骨である。

2．１号人骨（男性）の頭蓋最大長は１９０㎜、頭蓋最大幅は１４７㎜、バジオン・ブレグマ高は１３２㎜で、頭蓋長幅示数は７７.３７、頭蓋長高示数は６９.４７、頭蓋幅高示数は８９.８０となり、頭型は中・低・平頭に属している。

3．２号人骨（女性）の頭蓋の諸径は小さく、頭蓋最大幅は１３２㎜である。

4．顔面頭蓋の計測は２体ともできなかった。

5．１号人骨の（男性）の上腕骨は長くて太く、三角筋粗面の発達も良好なもので、また、橈骨、尺骨も長くて、大きいものである。

6．２号人骨（女性）の上腕骨は著しく小さく、三角筋粗面の発達も悪いが、骨体は扁平である。また、橈骨、尺骨も小さい。

7．１号人骨（男性）の大腿骨はあまり大きいものではなく、粗線の発達も著しく悪く、柱状形成は全く認められないが、骨体上部はやや扁平である。脛骨はやや大きく、ヒラメ筋線の発達は悪いが、骨体はやや扁平である。

8．２号人骨（女性）の大腿骨は細くて、粗線の発達も悪いが、骨体上部は扁平である。脛骨の径も小さく、ヒラメ筋線の発達も悪く、扁平性も認められない。

9．推定身長値は１号人骨（男性）のみが算出可能で、左上腕骨最大長からの推定値は１５８.９１㎝（Pearson）、１５９.２２㎝（藤井）である。

10．特殊所見として、１号人骨（男性）、２号人骨（女性）ともに下顎隆起が、２号人骨にはその他に右側橈骨遠位部に変形治癒骨折が認められた。

11．以上のように、小路石棺から出土した２体の人骨のうち、男性は中頭で、頭蓋や四肢骨の径は大きいものであったが、女性の頭蓋や四肢骨は著しく小さいものであった。また、男性の大腿骨は上腕骨の大きさに比べるとあまり頑丈なものではなく、粗線や骨体後面の発達は著しく悪いものであった。上肢と下肢のこのような関係は、宮の本弥生人に顕著に認められ、また山口県の大須賀古墳人にも同じような傾向が認められた。本例は宮の本弥生人ほど顕著なものではないが、これらと同じような傾向を示しているようである。

九州の中部に位置する熊本県での古墳時代人骨の出土例はけっして少なくはないようであるが、

その特徴はいまだ明確にはなっておらず、また弥生人との関係についても充分な検討がなされていない。このような課題を解明していくために、今後とも資料の蒐集とその形質人類学的研究を進めていきたいと考えている。

≪擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた、田添夏喜先生、玉名市教育委員会社会教育課ならびに人骨研究に関してご指導いただいた内藤芳篤教授に感謝致します。≫

表11　頭蓋計測値　(mm)

		1号 男性	2号 女性
1.	頭蓋最大長	190	—
8.	頭蓋最大幅	147	132
17.	バジオン・ブレグマ高	132	—
8/1	頭蓋長幅示数	77.37	—
17/1	頭蓋長高示数	69.47	—
17/8	頭蓋幅高示数	89.80	—
11.	両耳幅	125	117
12.	最大後頭幅	119	103
7.	大後頭孔長	40	—
24.	横弧長	298	294
	Vertex R.	121	119

第12　下顎骨計測値　(mm)

		1号 男性	2号 女性
65.	下顎関節突起幅	—	—
65(1).	下顎筋突起幅	—	—
66.	下顎角幅	100	—
68.	下顎長	75	—
69.	オトガイ高	33	25
69(1)	下顎体高 (右)	31	—
	(左)	31	25
69(2).	下顎体高 (右)	31	—
	(左)	30	—
71.	枝幅 (右)	—	31
	(左)	39	32
71a.	最小枝幅 (右)	—	31
	(左)	39	32
69(2)/69	下顎高示数 (右)	93.94	—
	(左)	90.91	—

表13　鎖骨計測値　(mm)

		1号 男性		2号 女性
		右	左	左
4.	中央垂直径	12	—	8
5.	中央矢状径	12	13	11
6.	中央周	40	—	32
4/5	鎖骨断面示数	100.00	—	72.73

表14　上腕骨計測値　(mm)

		1号 男性		2号 女性	
		右	左	右	左
1.	上腕骨最大長	—	305	—	—
5.	中央最大径	25	23	19	19
6.	中央横径	19	19	14	14
7.	骨体最小周	64	63	51	—
7(a).	中央周	72	70	56	55
6/5	骨体断面示数	76.00	82.61	73.68	73.68
7/1	長厚示数	—	20.66	—	—

表15　橈骨計測値　(mm)

		1号 男性		2号 女性	
		右	左	右	左
1.	最大長	241	—	—	—
1b.	平行長	239	—	—	—
2.	機能長	226	—	—	—
3.	最小周	—	—	—	—
4.	骨体横径	—	16	14	13
4a.	骨体中央横径	—	16	13	13
5.	骨体矢状径	13	13	10	9
5a.	骨体中央矢状径	13	13	10	9
5(5)	骨体中央周	—	—	37	36
3/2	長厚示数	—	—	—	—
5/4	骨体断面示数	—	81.25	71.43	69.23
5a/4a	中央断面示数	—	81.25	76.92	69.23

表16　尺骨計測値

(mm)

		1号 男性 右	1号 男性 左	2号 女性 右
2.	機能長	229	—	—
3.	最小周	37	—	28
11.	尺骨矢状径	14	14	11
12.	尺骨横径	18	17	13
S	中央最小径	14	14	10
L	中央最大径	18	18	13
C	中央周	52	52	41
3/2	長厚示数	16.16	—	—
11/12	骨体断面示数	77.78	82.35	84.62
S/L	中央断面示数	77.78	77.78	76.92

表17　大腿骨計測値

(mm)

		1号 男性 右	1号 男性 左	2号 女性 右	2号 女性 左
6.	骨体中央矢状径	26	27	21	21
7.	骨体中央横径	28	29	25	25
8.	骨体中央周	86	90	72	75
9.	骨体上横径	32	33	27	28
10.	骨体上矢状径	24	25	19	19
6/7	骨体中央断面示数	92.86	93.10	84.00	84.00
10/9	上骨体断面示数	75.00	75.76	70.37	67.86

表18　腓骨計測値　(mm)

		1号 男性 右	1号 男性 左	2号 女性 右	2号 女性 左
8.	中央最大径	30	—	24	24
8a.	栄養孔位最大径	—	—	27	27
9.	中央横径	20	—	18	19
9a.	栄養孔位横径	24	—	19	20
10.	骨体周	85	—	68	69
10a.	栄養孔位周	—	—	73	74
10b.	最小周	80	79	60	60
9/8	中央断面示数	66.67	—	75.00	79.17
9a/8a	栄養孔位断面示数	—	—	70.37	74.07

表19　腓骨計測値　(mm)

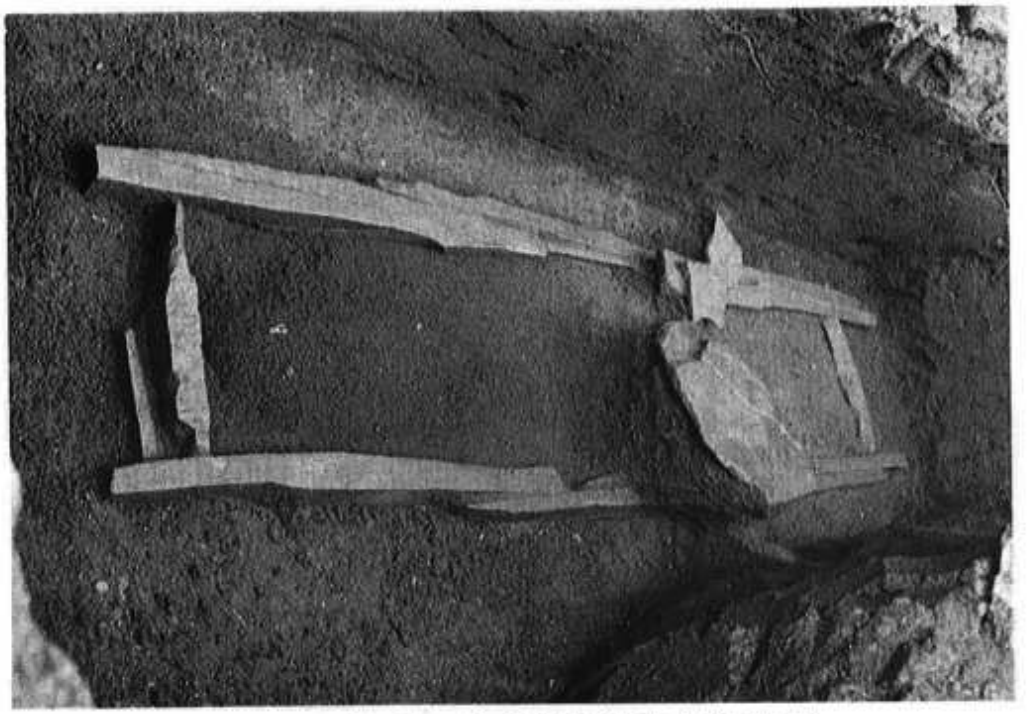
		1号 男性 右	2号 女性 右	2号 女性 左
2.	中央最大径	14	12	13
3.	中央最小径	11	9	9
4.	中央周	—	37	36
4a.	最小周	—	—	27
3/2	中央断面示数	78.57	75.00	69.23

参考文献

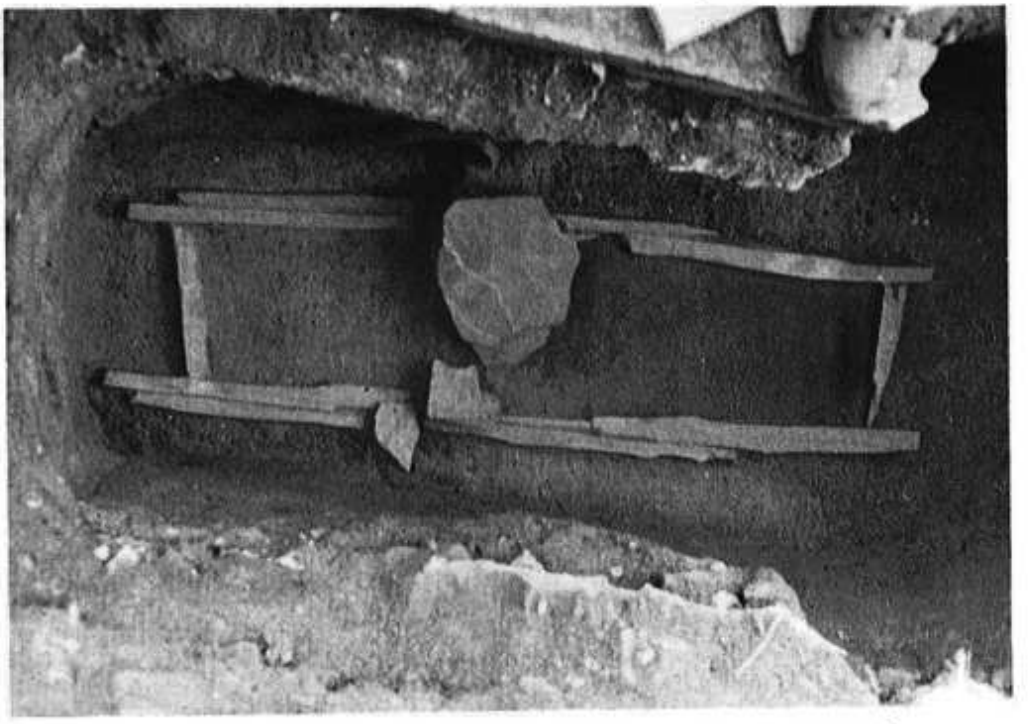
1. Howells.W.W, 1974：Cranial Variation in Man. Peabody Museum Papers, vol.67.
2. Martin—Saller, 1957：Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1.Gustav Fisher Verlag, Stuttugart：429—597.
3. 松下孝幸，１９７９：妙法塚古墳出土の人骨について。長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅱ（長崎県文化財調査報告書第４５集）：３５－３６．
4. 松下孝幸，１９７９：慈場石棺出土の人骨について。長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅱ（長崎県文化財調査報告書第４５集）：１１３－１１６．
5. 松下孝幸，１９８１：佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨。大友遺跡（佐賀県呼子町文化財調査報告書第１集）：２２３－２５３．
6. 松下孝幸，１９８２：宮の本遺跡出土の人骨。宮の本遺跡（佐世保市埋蔵文化財調査報告書）：９３－１０９，１４５－１４６．
7. 松下孝幸，１９８２：山口県朝田墳墓群第Ⅱ地区出土の人骨。朝田墳墓群　Ⅴ（山口県埋蔵文化財調査報告第６４集）：１７９－２０６．
8. 松下孝幸，１９８４：宇部の古人骨。宇部地方研究、第１２号：１－２３．
9. 永井昌文，１９８１：古墳時代人骨。季刊人類学，１２：１８－２６．
10. 内藤芳篤，１９７１：西北九州出土の弥生時代人骨。人類学雑誌、７９：２３６－２４８．
11. 内藤芳篤，１９７５：塚原中世墳墓・丸尾５号墳出土の人骨。熊本県文化財調査報告、第１６集：３１７－３２２．
12. 内藤芳篤，分部哲秋，１９８０：清水１号古墳出土の人骨について。清水古墳群・野寺遺跡・林源衛門墓（熊本県文化財調査報告第４１集）：２２－２８．
13. 寺門之隆，１９８１：古墳時代人骨。人類学講座　５：１０１－１２１．
14. 財津博之，１９５６：山口県土井ケ浜弥生前期人骨の四肢長骨に就いて。人類学研究　３：３２０－３４９．

図版1　上　石棺出土現場の地形

図版2　下　石棺土壙　（中央の白いもの供えもののおみき）



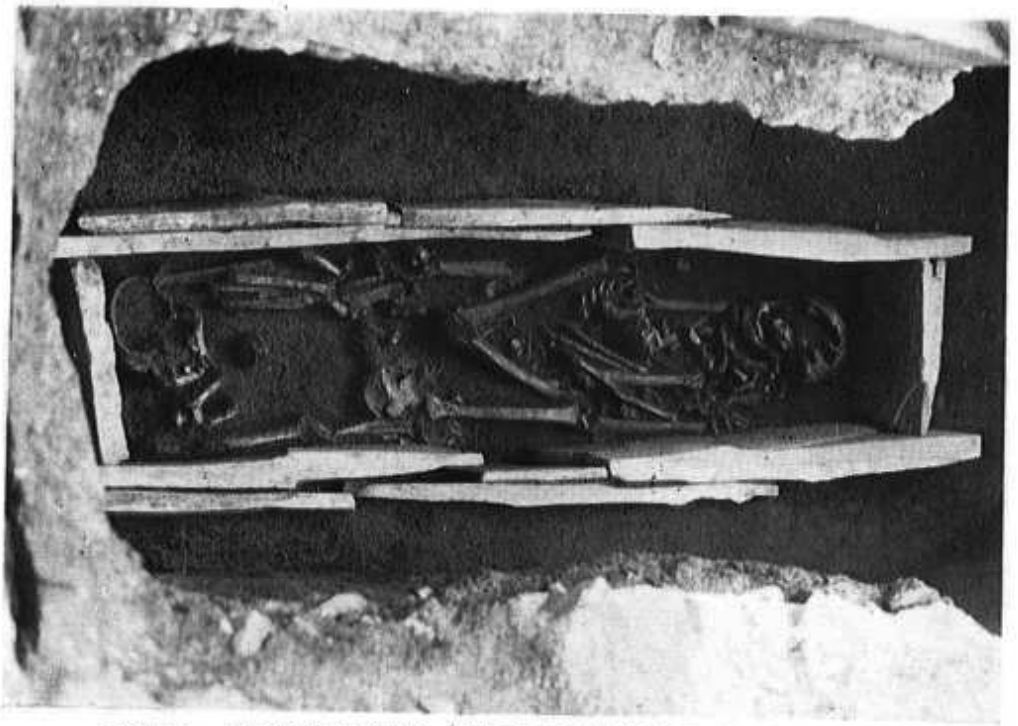
図版３　箱式石棺の出土状態（東方より見る）



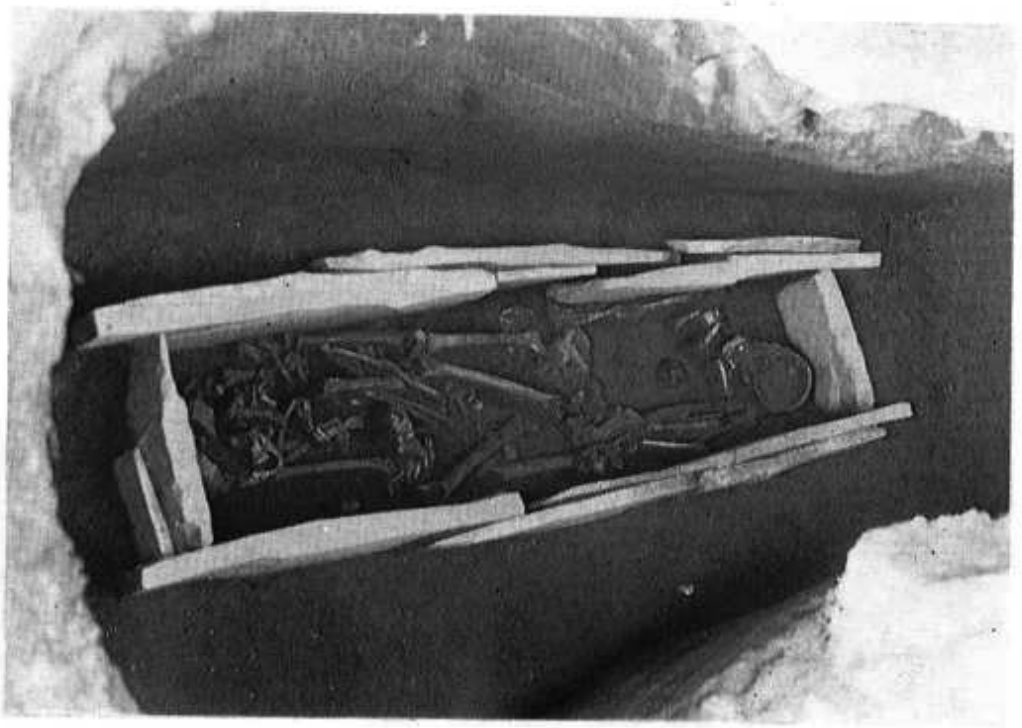
図版４　　同　　（西に向き真上より見る）

図版5　上　石棺外南側土層断面部分

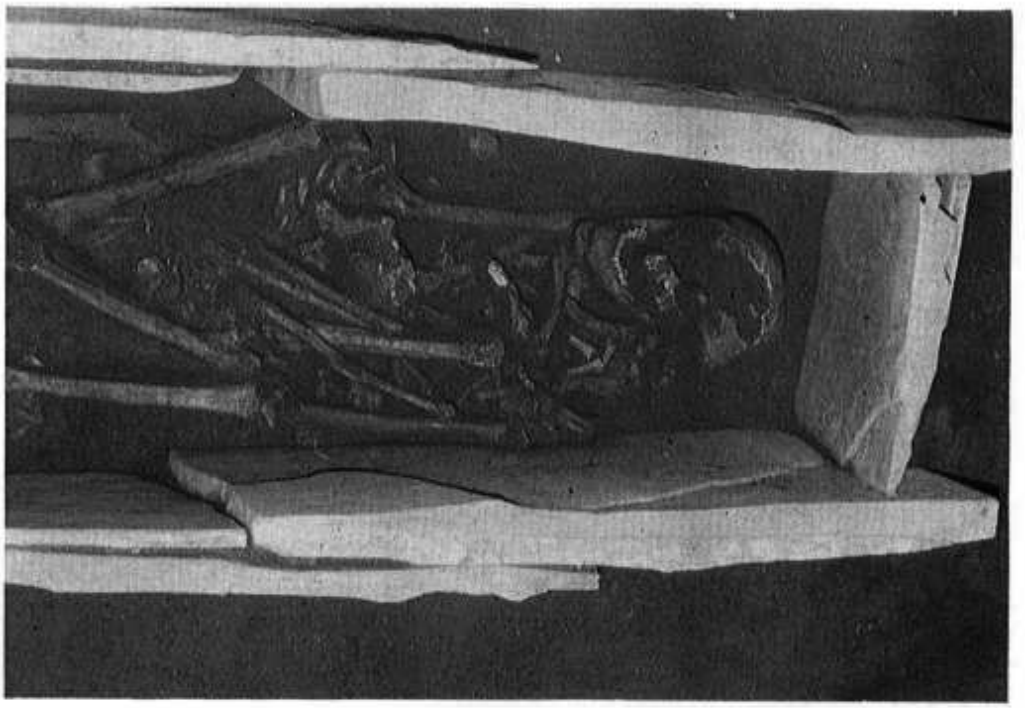
図版6　下　同　（横へ拡張したところ）



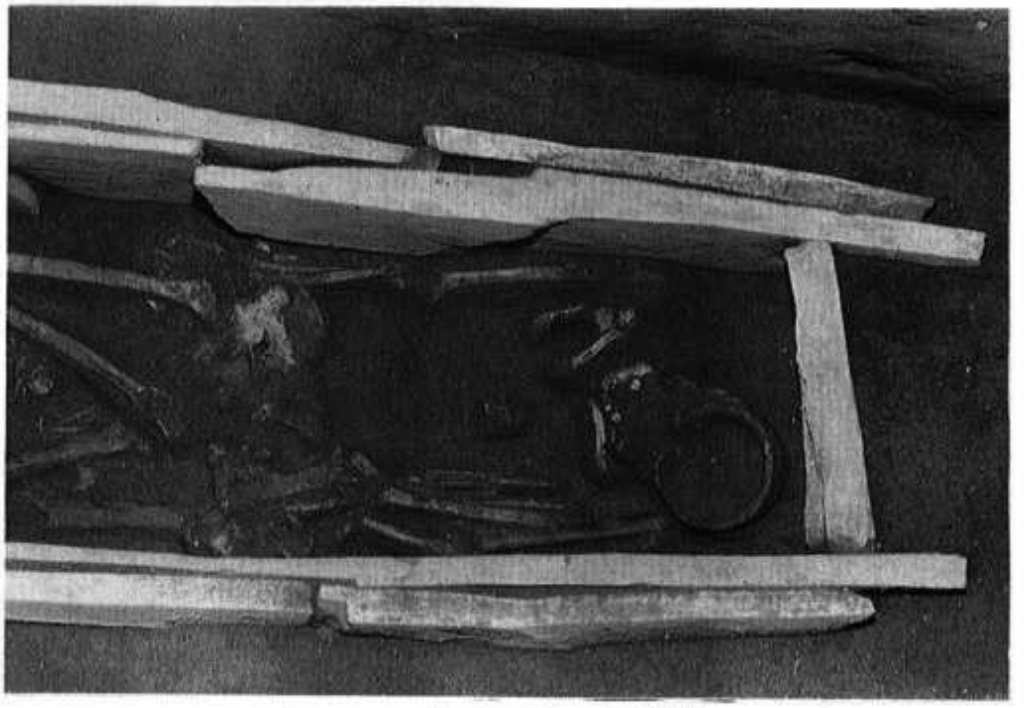
図版７　箱式石棺内複体人骨の配置状態（西方上より見る）



図版８　　同　　（東上より見る）



図版９　石棺内東側人骨の配列状態



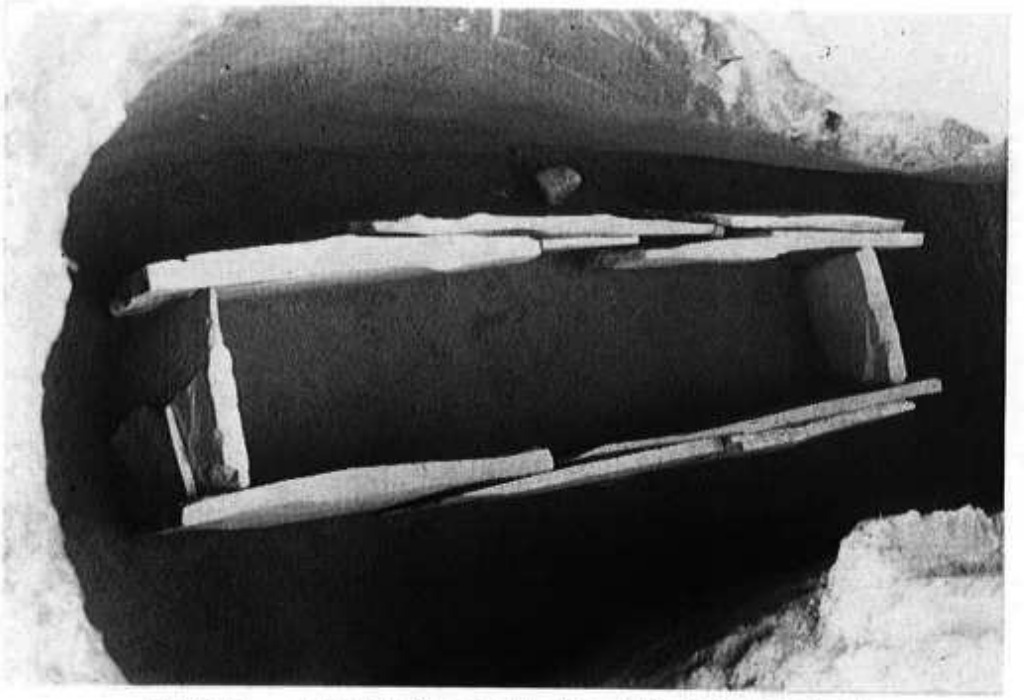
図版１０　石棺西側人骨の配列状態

図版 11　東人骨の上半部

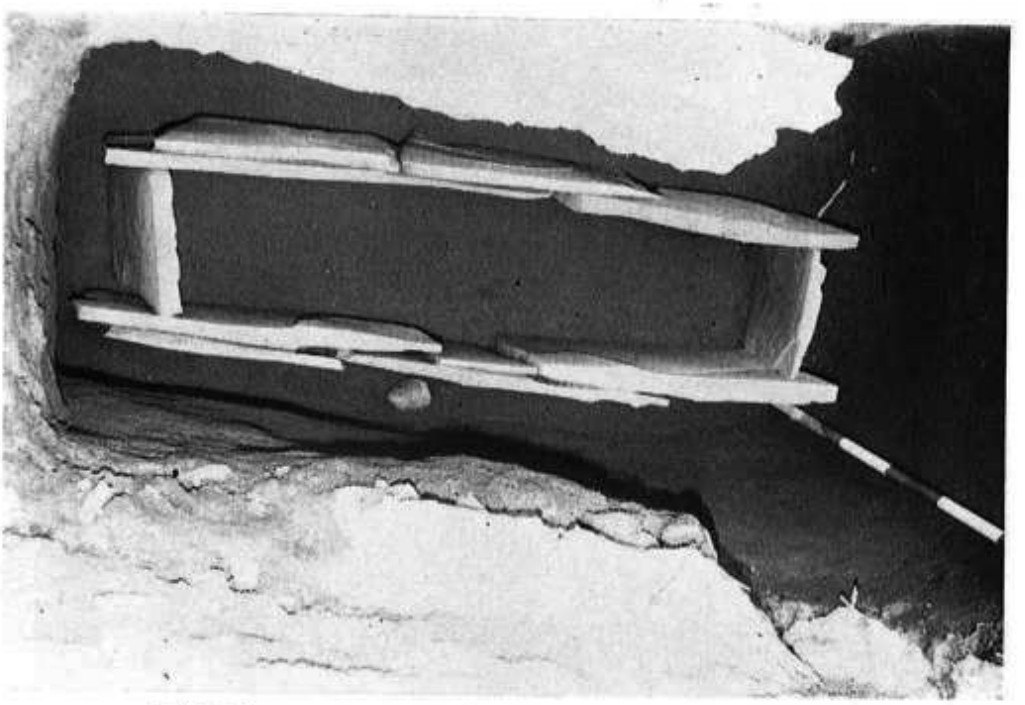
図版 12　西人骨の上半部

図版 13　東人骨の頭部拡大

図版 14　西人骨の頭部拡大



図版 15　人骨撤去後の箱式石棺の棺体（東より見る）



図版 16　　同　　（西より見る）

図版 18
1号人骨（男性・壮年）頭蓋上面

図版 17
1号人骨（男性・壮年）頭蓋後面

図版 20
2号人骨（女性・熟年）頭蓋後面

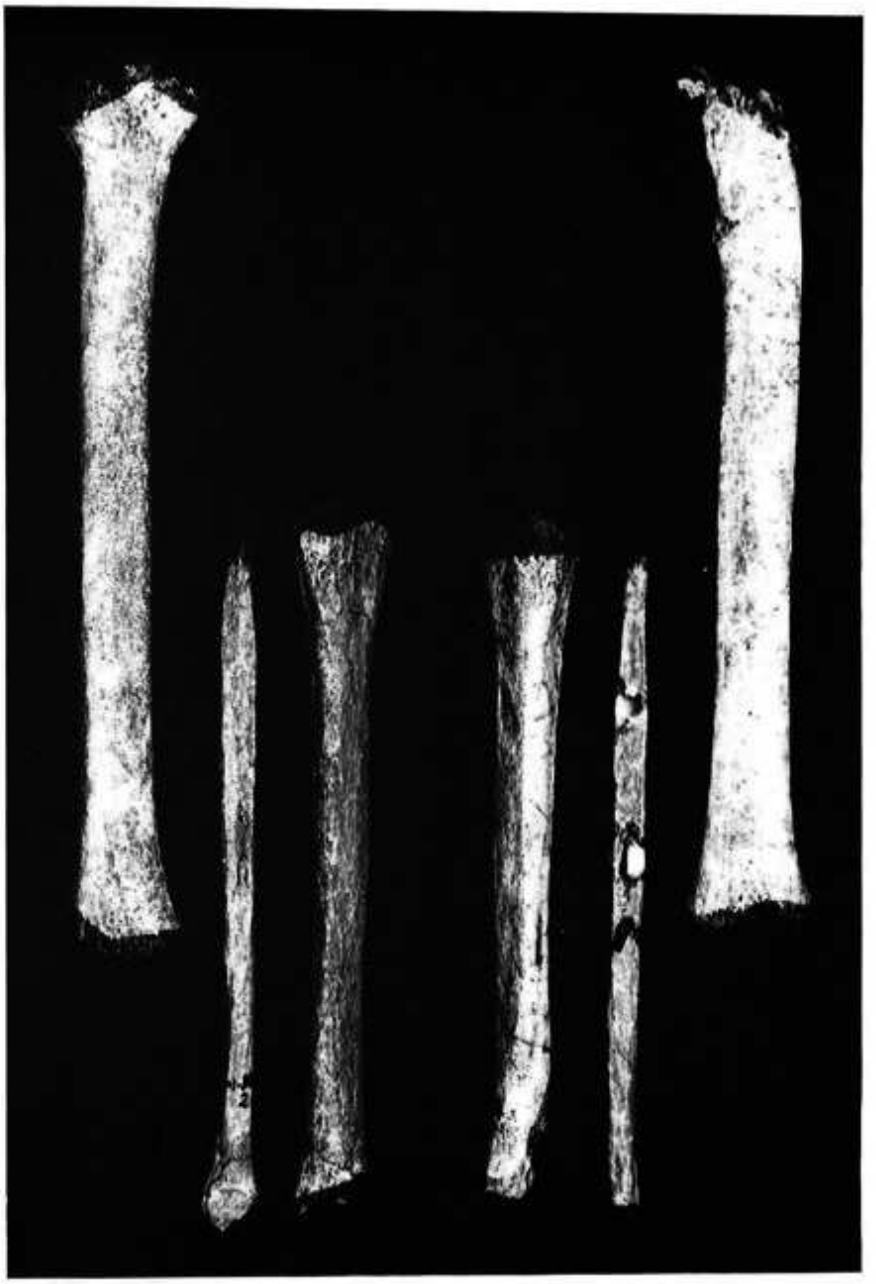
図版 19
1号人骨（男性・壮年）上顎骨・下顎骨・歯

図版 21
2号人骨（女性・熟年）下顎骨・歯

図版 22
1号人骨（男性・壮年）上肢骨

図版 24
2号人骨（女性・熟年）上肢骨

図版 23
1号人骨（男性・壮年）下肢骨



図版 25
2号人骨（女性・熟年）下肢骨

本　堂　山　遺　跡

濃 飛 山 堂 本

例　　言

- 本稿は本堂山遺跡の発掘調査報告である。
- 執筆は田添夏喜が担当した。
- 挿図、図版は田添夏喜が作成した。
- 編集については徳永太一郎が行った。

調　査　班

主体者	玉名市教育委員会教育長	福山芳雄
総務	同　社会教育課長	大磯英雄
庶務	同　社会教育課文化財係	内藤博道
現場主査	玉名市文化財保護委員会会長	
	日本考古学協会員	田添夏喜
調査協力員	玉名市文化財保護委員会	仲野俊良
	同	古財幸八
	同	石岡照呼
	同	山本　均
	同	東　弘典
	同	小川治雄
	同	田原富貴男
	同	鶴上寛治
	同	森田民代

調査期間

発掘調査期間	自　昭和51年7月　1日
	至　昭和51年8月31日
場所	玉名市伊倉北方字堂山3319番地

本　文　目　次

はじめに …… 71
Ⅰ　本堂山遺跡 …… 72
1.　文献で見る報恩寺 …… 72
2　伊倉五山と報恩寺 …… 73
3.　報恩寺の移転 …… 73
4.　宇佐氏一族の墓・供養塔 …… 73
5.　大明振倉謝公とその墓 …… 77
6.　報恩寺歴代住持の墓 …… 78
(一)　中興開基慶存法印墓誌銘　原文 …… 81
(二)　中興二世慶雲法印墓誌銘　原文 …… 82
7.　報恩寺歴代住持供養板碑群・補陀落渡海碑 …… 82
Ⅱ　本堂山遺跡の発掘調査 …… 83
第１地区　報恩寺跡　第１遺構　本堂跡 …… 83
第２遺構　庫裏跡 …… 87
第３遺構　本堂前広場跡 …… 101
第４遺構　山門跡 …… 101
第２地区　振倉謝公墳 …… 102
第１号墓 …… 104
(1)　屋蓋 …… 104
(2)　棺郭 …… 104
(3)　木棺 …… 104
(4)　主体人骨 …… 110
(5)　副葬品 …… 110
第２号墓 …… 112
(1)　木棺 …… 112
(2)　主体人骨 …… 112
(3)　副葬品 …… 113
おわりに …… 115

挿　図　目　次

第 1 図　本堂山遺跡位置図 …… 74
第 2 図　本堂山遺跡周辺地形図 …… 75
第 3 図　中尾山報恩寺本尊 薬師 如来石像実測図 …… 76
第 4 図　當山中興開基権大僧都法印慶存墓・當寺中興二世住権大僧都法印慶雲墓実測図 …… 79
第 5 図　當山中興三世墓・當山中興四世大僧都[illegible]超大和尚塔 …… 80
第 6 図　當山中興五世法印墓・権大僧都法印快信大和上墓実測図 …… 80
第 7 図　中尾山住職中野快玉玄了房墓塔実測図 …… 81
第 8 図　遺跡内各種遺構・遺物配置状態実測図 …… 85
第 9 図　本堂基壇跡出土石組実測図 …… 88
第10図　本堂基壇跡石敷西辺南端部及び庫裏跡の礎石根石・付帯施設石組実測図 …… 89
第11図　報恩寺庫裏跡基壇南辺敷石実測図　その1 …… 91
第12図　報恩寺庫裏跡基壇南辺敷石実測図　その2 …… 93
第13図　報恩寺庫裏跡基壇南辺敷石実測図　その3 …… 95
第14図　庫裏跡礎石・礎石根固め石実測図　その1 …… 97
第15図　庫裏跡礎石根固め石実測図　その2 …… 98
第16図　庫裏跡礎石根固め石実測図　その3 …… 99
第17図　報恩寺跡出土土師器皿実測図 …… 100
第18図　報恩寺山門跡礎石実測図 …… 103
第19図　報恩寺山門跡礎石埋納品実測図・拓影 …… 103
第20図　振倉謝公墳棺郭外形実測図 …… 105
第21図　振倉謝公墳内部構造実測図 …… 107
第22図　振倉謝公墳第1号木棺内出土品実測図 …… 109

図　版　目　次

図版　1　本堂山遺跡全景 …… 117
図版　2　発掘前の遺跡中心部 …… 117
図版　3　鎮魂祭・鍬入式の情景 …… 118
図版　4　中尾山報恩寺本尊 薬師如来石仏 …… 118
図版　5　本尊石仏背銘 …… 119
図版　6　宇佐一族の墓・供養塔 …… 119
図版　7　伊倉本地主宇佐公満墓塔地輪銘 …… 120
図版　8　中興報恩寺歴代住職墓塔群 …… 120
図版　9　當山中興開基権大僧都法印慶存墓 …… 121
図版　10　當山中興開基権大僧都法印慶存墓塔正面刻銘 …… 121
図版　11　當山中興開基権大僧都法印慶存墓塔正面銘文拓影 …… 122
図版　12　當山中興開基権大僧都法印慶存墓塔左側面銘文 …… 123
図版　13　當山中興開基権大僧都法印慶存墓塔左側面銘文拓影 …… 124
図版　14　當山中興開基権大僧都法印慶存墓塔背面銘文 …… 125
図版　15　當山中興開基権大僧都法印慶存墓塔背面銘文拓影 …… 126
図版　16　當山中興開基権大僧都法印慶存墓塔右側面銘文拓影 …… 127
図版　17　當寺中興二世住権大僧都法印慶雲墓塔 …… 128
図版　18　當寺中興二世住権大僧都法印慶雲墓塔銘文拓影 …… 129
図版　19　當寺中興二世住権大僧都法印慶雲墓塔左側面銘文 …… 130
図版　20　當寺中興二世住権大僧都法印慶雲墓塔左側面銘文拓影 …… 131
図版　21　當寺中興二世住権大僧都法印慶雲墓塔右側面銘文拓影 …… 132
図版　22　當寺中興二世住権大僧都法印慶雲墓塔背面銘文 …… 133
図版　23　當寺中興二世住権大僧都法印慶雲墓塔背面銘文拓影 …… 134
図版　24　當山中興四世傳燈阿闍梨法印大僧都𑖨超大和上尊霊塔 …… 135
図版　25　當山中興四世傳燈阿闍梨法印大僧都𑖨超大和上尊霊塔銘文 …… 136
図版　26　當山中興五世法印墓塔 …… 136
図版　27　當山中興五世法印墓塔銘文拓影 …… 137
図版　28　権大僧都法印快信大和上墓塔銘文拓影 …… 137
図版　29　教師大阿闍梨位中野快王玄了房墓塔銘文拓影 …… 138

図版　３０　教師大阿闍梨位台礎側面銘文拓影 …… 138
図版　３１　中興報恩寺歴代住持・宇佐家・補陀落渡海碑・板碑群 …… 139
図版　３２　夢賢上人補陀落渡海碑（左）同銘文（右） …… 139
図版　３３　発掘完了後の遺跡中心部の景観 …… 140
図版　３４　露出された本堂基壇跡北面・西面の一部敷石状態 …… 140
図版　３５　露出された本堂基壇跡北面・西面敷石の出土状態 …… 141
図版　３６　庫裏基壇跡の南辺部敷石の出土状態 …… 141
図版　３７　庫裏跡出土の礎石の一部・第１３号礎石 …… 142
図版　３８　庫裏跡出土の礎石の一部・第１４号礎石 …… 142
図版　３９　庫裏跡出土の根太束礎石の一部・第１７号礎石 …… 143
図版　４０　庫裏跡出土の根太束礎石の一部・第１８号礎石 …… 143
図版　４１　庫裏跡出土の石組遺構 …… 144
図版　４２　本堂基壇跡西辺石敷中出土の石棺形石組遺構 …… 144
図版　４３　山門跡礎石の一部 …… 145
図版　４４　山門跡礎石の埋納品永楽通寶・短刀の出土状態 …… 145
図版　４５　山門跡礎石の永楽通寶出土状態 …… 146
図版　４６　山門跡礎石の短刀出土状態 …… 146
図版　４７　大明振倉謝公墳の墓標石 …… 147
図版　４８　発掘完了後の振倉謝公墳外容 …… 147
図版　４９　振倉謝公墳・第２号棺内部の露出状態 …… 148
図版　５０　振倉謝公墳・第２号棺の人骨の出土状態 …… 148
図版　５１　振倉謝公墳の外観 …… 149
図版　５２　振倉謝公墳・第１号墓棺郭の漆喰屋蓋 …… 149
図版　５３　振倉謝公墳・第１号墓漆喰棺郭 …… 150
図版　５４　振倉謝公墳・棺郭底人骨・鉄釘の配置状態 …… 150
図版　５５　山門跡礎石埋納品 …… 151
図版　５６　振倉謝公墳表土中の出土品 …… 151
図版　５７　振倉謝公墳・第１号棺出土品　その１ …… 152
図版　５８　振倉謝公墳・第１号棺出土品　その２ …… 152
図版　５９　振倉謝公墳・第１号棺出土鉄釘の一部 …… 153
図版　６０　振倉謝公墳・第２号棺出土鉄釘の一部 …… 153

図版　６１　報恩寺跡　第１調査区・第２調査区出土品 …… 154
図版　６２　報恩寺跡基壇跡北辺東端部出土の土師器糸切皿 …… 154
図版　６３　報恩寺跡第２調査区第２１号礎石出土土師器皿　その１ …… 155
図版　６４　報恩寺跡第２調査区第２１号礎石出土土師器皿　その２ …… 155
図版　６５　報恩寺跡第２調査区第２１号礎石出土土師器皿　その３ …… 156

はじめに

伊倉地方は、金峰山系の山裾が北西へゆるやかに延び、木葉山に連なる広い台地の一端が西に突出し、南と西は菊池川下流に形成された穀倉地帯に臨み、しぜんに形成された地形は長い期間のうちに高い文化を創造し、各時代にかけて変化させながらそれらを育て上げてきている。中世ごろより大陸との交渉が開かれはじめると、彼の地の文化も輸入され、やがてそれは異国風な傾向を帯びて、一種独特の伊倉文化となっていることが言えると思う。今も唐人町とか、唐人船つなぎの銀杏とか唐人墓、切支丹墓、明人献納の麒麟香炉があることや、地名に三官があることなどそのことをよく示している。

伊倉はまた宗教の町でもあった。奈良時代あたりから日本全国に仏教が広まると、伊倉には中尾山報恩寺をはじめ多くの寺院が建立された。鎌倉時代終末期に伊倉五山が制定され、一方、豊前の宇佐より宇佐八幡が勧請され、次いで小さな社もこれにならい多く建てられた。

このようにして各時代それぞれ、それらに相応した多種多様の文化を打ち立て、それを今に伝えているが、ここでとくに取り上げなければならないものは中尾山報恩寺があったと伝えられている「本堂山仏教遺跡」である。

本堂山は、菊池川下流東域の水田地が田端という部落で細長く東へくいこんだ突端部に位置し、最大部の幅約９０メートル、長さ１５０メートル、高さ３０メートルほどの、大判型中高の美しく整った小さな山というよりも岡といったほうが適切かもしれない。鎌倉時代の古い墓と近代の墓とが入り交って全山を被いつくして、伊倉町民の一大霊場の観を呈していた。本堂山は、「本」を省いて「堂山」とも呼び、中尾山、八幡山などの別名も古記に見出される。「中尾山福寿院報恩寺」という山、寺号の寺があったということや、この地に伊倉八幡宮の神宮寺、宮家の菩提寺があったということに由来する。

山上に報恩寺跡と、寛文９年（１６６９）以後明治時代までの同寺住持の墓７基、伊倉八幡宮鎌倉時代の神官の墓、供養塔８基があり、また一郭には北八幡宮関係神官一族の墓群がある。

なお東の別区に報恩寺江戸期各代住持の供養板碑８基がありそれにまじっている補陀落渡海碑（海中の彼方にあると信じられた観世音菩薩の浄土へ旅立つとき、その成就をいのって建てた碑）と明人振倉謝公の墓石があるがこれはとくに異例で珍しく、貴重とされる。

これらのものは肥後国誌、玉名郡誌、肥後古塔調査録、国郡一統誌、事蹟通考などの郷土史書に取り扱われ、多くの人に知られている。

近来、近代墓の発掘改葬が盛んに行われて、廃石は放置され、笹竹や雑草は生い茂って、山容は荒廃の一方にあったところから、この際に残る墓石を移転して一定の場所に整備し，広場をこしらえ、墓地公園を兼ねた小運動公園として町民に親しまれる場所としたいという計画が進められている。

ところがこの地が前に述べた通りの、多くの文化財を容する重要な遺跡であるため、事前に学術に基づく発掘調査を行うことが先決だとし、市教育委員会が主体となり、同市文化財保護委員会がその依頼を受け、同年7月1日より向とう2箇月間の期間をもって発掘調査を行ったものである。

I　本堂山遺跡

1　文献で見る報恩寺

中尾山福寿院報恩寺について開山は、伊倉町工藤家伝来の古記録によれば「當山開山前長者大僧正行基菩薩、天平年戊寅奉詔至干此地　八月當山於開闢　伊倉宮寺之社式指揮依」云々、とあることから報恩寺は最初天平１０年（７３８）聖武天皇の勅願、伊倉八幡宮の社式指揮によって、大僧正行基を開基として開山されたということになる。

また「當山密宗開山中興第一世前法務執行長者僧正法印頼賀聖覚　延長二年（９２４）依勅有下向　則王子而寛平法皇入室上足也」云々とあることでは、延長以前にはずいぶん衰微していたらしく、それを第６０代醍醐天皇の延長二年（９２４，平安前期）父君宇多法皇の高弟頼賀聖覚僧正が勅をうけて伊倉に下向し、密宗高野山金剛峰寺の末寺として中興したというのである。境内寺坊として神徳院妙覚寺別当坊、福聚院霊仙寺定福坊、正覚院神宮寺松林坊、転法心院清光寺浄念坊、如意輪院延福寺明福坊、宝光院龍福寺浄林坊の６坊をもっていたこともみえる。このことについては現在の本堂山上にある寛文９年（１６６９）以後の住持慶存、慶雲らの墓誌銘にも明記されている。

報恩寺がもっとも栄えた吉野、室町時代には１７の坊と８２の堂をもち、郡内で野原庄府本村宗善寺、大野庄中村慈恩寺、江田庄江田村高乗寺、臼間障子嶽知足院など３３の寺、そのほか肥後、筑前、筑後に及ぶ１０５箇寺の末寺をもっていたというから、それはどの程度信用してよいか判断に苦しむところであるが、事実そうだとすればそのころの報恩寺の規模と勢力は想像以上の偉大なものであったかがうかがい知られる。

報恩寺は伊倉八幡宮の神宮寺、伊倉八幡宮は報恩寺の鎮守としてたがいに密接なつながりをもって発展し、報恩寺、両八幡宮を中心母体として伊倉は宗教的な町として栄えいく。

2　伊倉五山と報恩寺

伊倉町では、鎌倉時代になって、仏教が盛んになると、正中3年（１３２６）に中尾山報恩寺、伊倉山大平寺、桜井山安住寺、海福山潮音寺、大寧山長福寺などの5箇寺を推して、伊倉五山が制定されると報恩寺はその首位に位置づけられ、いよいよ格式高い寺としてまつり上げられた。五山の起りが、鎌倉時代中期以降禅宗が盛んになるにつれて、中国南宋の五山、十刹の制度にまねて、鎌倉で建長寺、円覚寺、ほか3か寺を五山と格式づけるようになったことによるため、五山が禅宗に限られたから、最初真言宗であった報恩寺も、その他の寺も同じように禅宗に改宗し、川尻の大慈禅寺を本山とした。

3　報恩寺の移転

このように繁栄した報恩寺は、室町時代の終りごろより漸次衰微に赴き、ついには廃絶同然の状態におちいる。そのあとを永正年間（１５０４－１５２０）小森田但馬守源常有、小森田三河守小森田刑部少輔源元夏、小森田長門守治清等4小森田氏によって再興されている。

時勢は移り伊倉庄は宇佐氏に代って小森田氏の治政下に入ると、伊倉庄に最初に赴任したのが小森田但馬守である。そのあと数代相続している。小森田氏は小田村（山部田）の出身で、代々城主、総庄屋などをつとめた家柄である。一門中朝鮮の役で勲功あり恩賞を拝受し、治政に当っては水利事業に大きな功績をのこしているのは人のよく知るところであろう。

細川治政となって伊倉の庄名は「小田手永」と改名される。手永名「小田」は総庄屋の出身地名をとって命名されたものである。

小森田一門によって再興された報恩寺伽藍は７０年ばかり後の天正１０年（１５８２）１１月、肥前密開城主龍造寺隆信と薩摩の島津義久の軍の戦火のために全焼し、古記録、什器、寺宝のこらず失われた。

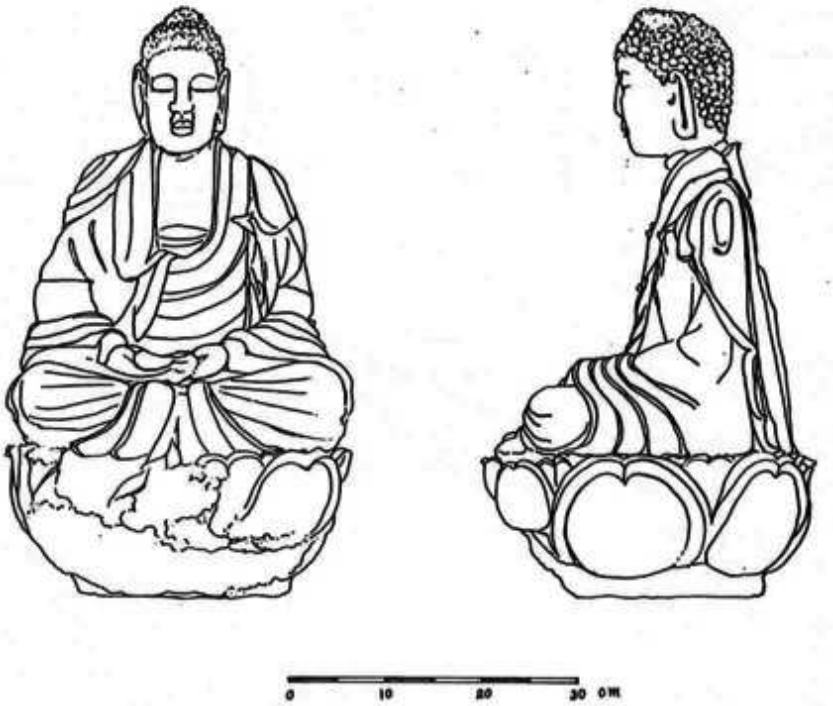
それから８７年後の寛文9年（１６６９）に櫨大僧都法印慶存がこの寺地を伊倉北幡宮のかたわらに移して再興した。もとの真言宗に復帰し、北八幡の神宮寺として運営の調和を計り、享保2年（１７１７）5月２２日中興開基の慶存の死にあい、そのあとを弟子の慶雲が継いでいる。それより六代を経て明治時代に及び、中野快玉玄了房を最後に廃寺となった。（慶存、慶雲墓誌銘による）

4　宇佐氏一族の墓・供養塔

本堂山頂上の墓碑群の中心部に、型の変った凝灰岩製の古い墓碑の南北に一列に並ぶ一群と、そこから東へ少しはなれたところに一つ、合わせて8基がある。いづれも現在はあべこべに積み重ねてあるが、本体は宝塔で、もとのものは最下段の角型の地輪にあたる石だけであるが、この一群が

第1図　本堂山遺跡位置図

第２図　本堂山遺跡周辺地形図



第３図　中尾山報恩寺本尊　薬師　如来石像実測図

鎌倉時代に造立された宇佐氏一族の墳墓と供養塔である。それぞれ少しづつ大小の違いはあるが、大体においては幅２５センチ、長さが横に６５センチ内外の大きさで、その一面に七基だけ銘字を刻んである。宇佐八幡宮の神霊が伊倉へ勧請されたとき伊倉へ来た宇佐本家の一門で、伊倉八幡宮の祠官となり、兼ねて伊倉庄の領主をつとめた家柄である。

八幡宇佐宮神領大鏡（創始期から平安末期までの宇佐八幡の神領を記する。大宮司公通まで）の記事によれば、伊倉庄内の中心部伊倉の町一帯を伊倉別府とし、康和５年（１１０３）ごろより宇佐大宮司直接支配の神領地として大宮司直系の宇佐公順、公基、宇佐の命婦、公通と受け継ぎ支配され、公順以来不輸租田とし、官物を国庫へ納めること、国役に従事することなどが免除されたところである。

墳墓は公通の子公満から、その子の公長、地頭沙弥行恵、念阿、比丘尼蓮阿等の墓、供養塔で、他の３基は不明。

公通は嘉応元年（１１６９）より伊倉別府の領主となり、また他地方の山香（山鹿）南郷、石原別府をも領有していた。伊倉南八幡宮境内末社始祖御前社に祀られる。子の公満は伊倉庄のほか島崎、荒尾、山鹿方面までも支配したというが、これについては問題がのこるようである。

宇佐氏一族のそれぞれの墓誌銘を下に記する。

1. 公　満　墓

伊倉本地主
宇佐公満墓
為滅罪生佛
決定生浄土
先兼久元年
九月十六日死
今文應元年
秋彼岸改葬

2. 公長逆修塔

宇佐大宮司
公長現在〇時
為臨終生極楽
自造卒塔婆也
文應元年庚申
八月彼岸立

3. 沙弥行恵供養塔

奉為
伊倉保一方地頭沙弥
行恵往生極楽也
元享二年十一月廿六日
公　勝
公　貞

4. 念阿供養塔

専修
念阿尊〇〇
佛本願无〇
必生極楽界
建長七乙卯
十一月十二日死
今文應元年
八月時

5. 蓮阿供養塔

右建立志者
為過去比丘尼
蓮河往生極楽也
建武三年丙子十月一日

6.

〇造立志者
過去蓮〇〇
極楽也
永仁六年〇〇〇月
戊戌九日

7.

右造立
意趣者
為蓮〇
聖霊〇
〇施〇
文保二年〇〇十五日

8. 無銘

5　大明　振倉謝公とその墓

本堂山の頂上へ、西より上がる中腹よりやや下方にあたるところ、小路の左わきの低い崖下に位置し、大判の形に似た自然石安山岩の片面に、上部に横書きで「大明」その下の中央に大文字で「振倉謝公墳」と刻んだ墓標が崖にたてかけられていた。いまは頂上東がわの板碑群の中に移してあるが放置も同然の状態からすると原位置から動かしてあることは確かだ。山の斜面を切り開き、細長

い平地が湾曲して幾段となく上下に重なり合った地形の一郭で、新しい墓標や、墓標のない饅頭墓の立ち並ぶ狭苦しいくらいの場所である。新規の墓をつくるため古くなった無縁のものを廃棄したあとかたがうかがわれ、振倉謝公の墓もその中の一つかと考えられる。一面では付近に内部主体は遺存している可能性もあると思った。

さて、この振倉謝公は如何なる人物か、これが重要な問題である。記録も何一つのこっていない。ただ玉名郡誌に、この地に振倉謝公の墓のあることだけを簡単に書いてある程度で参考にもならない。古い記録といえば墓標の墓誌銘があるだけで、中国の明人であることだけはこれでわかる。

伊倉鍛冶屋町通りの東裏手に唐人墓と呼ばれる同じ明人の墓がある。規模の大きく、日本の墓とまったく異なった珍しい型である。縁飾りのついた標石の正面に、「皇明、考儀沂郭公墓、元和己未年仲秋吉旦　海澄縣三都男国珍栄立」と鮮明に刻んである。元和５年に子の珍栄が立てた父の郭公の墓で、皇明とあることで明人であることも明白である。

また、天水町部田見にも同じ墓があり、切石の墓標正面に「龍郡林均吾墓　元和七年男新作立」と刻銘されている。郭公を四位官、均吾を三位官といい、どちらもともにもと明朝に仕えていたが明朝が衰微するころ官を辞して、当時豊臣秀吉の奨励によって盛行した日明貿易に乗り出した。伊倉は室町時代ごろから丹倍津と呼び良港として栄え、中国船も出入りし海外貿易の根拠地とされていて、元和時代には日明間の貿易商人の寄港するものが多かった。郭公、均吾等もこの地に来住し幕府の朱印状をもらってその事業に従事、大いに活躍した。伊倉本堂山に葬られている振倉謝公もそうした仲間の一人と考えられる。「振倉」は「古伊倉」のなまったもので、本堂山の西北方にあたる高台上の集落地の地名で、謝公がこの地に居住したのでその名があるという一説があり、さらにいまは本堂山から西方に見下ろす水田地になる北牟田という集落中に「三官屋敷」の地名があって謝公の住居跡という説もあるがよく分っていない。

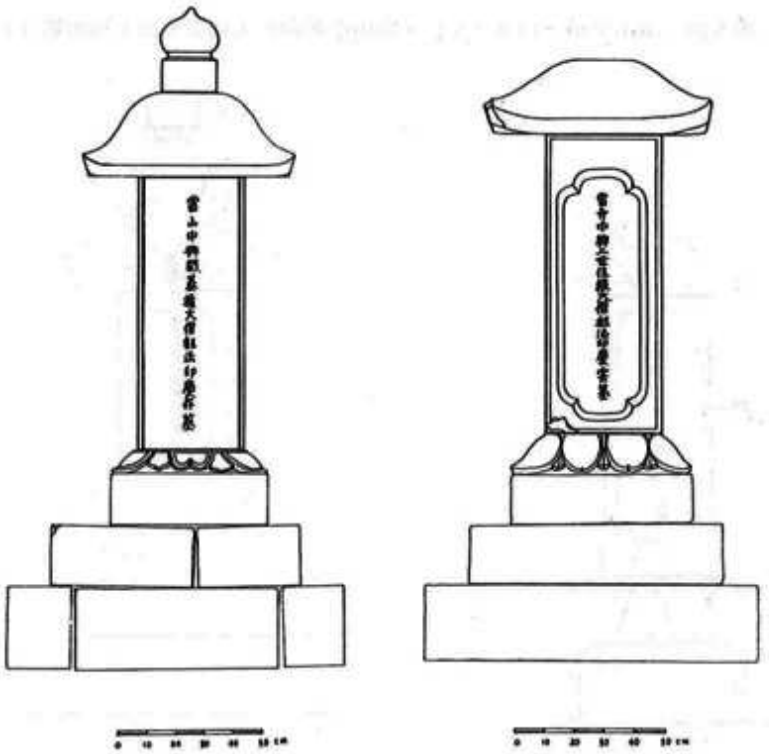
6　報恩寺歴代住持の墓　―寛文から明治まで―

本堂山の頂上のほとんど中心にあたるところで、宇佐大宮司一族の墓の西に隣りして、一種の、何か言いしれぬ風格をたたえて立ち並ぶ古びた大きな塔碑の一群が視線を捉える。全部で７基、並んでいるというより、半ば点在しているといったほうが当っているかもしれない。現存する報恩寺歴代住持墓碑群である。天正１０年の戦禍のあと、寛文９年（１６６９）ここの寺地より、東南方５００メートルのところになる伊倉北八幡宮のかたわらに移転再興開基した慶存法印の寶永３年（１７０６）慶存自身が生存中に立て、享保２年（１７１７）５月２２日に葬むられた墓を筆頭に、つづいて第二世権大僧都慶雲法印の墓の２基が墓域の最南端に南面して東西に並び、慶存の墓のすぐ背後に、西に第四世大僧都〻超法印、東に隣りして第五世（銘は剝落して不明）の墓が南に向い

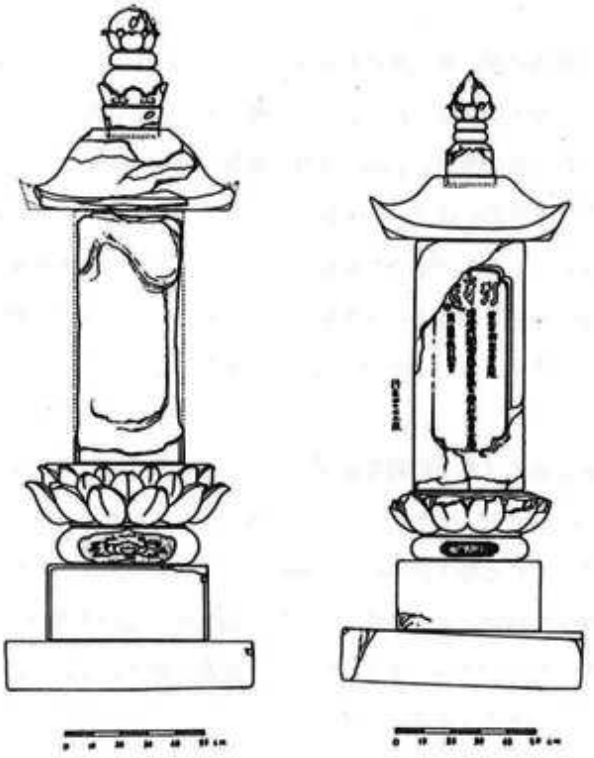
て並ぶ。群をはなれて後方に第三世（剝落し銘不明）、その少し北に寄った西隣りに、慶応３年（１８６７）２月建立の権大僧都快信法印、その西隣りに明治３２年（１８９９）５月建立の教師大阿闍梨中野快玉玄了房の墓が東西に南面して並び墓群の北限を極める。

快信は熊本藩士中島忠左衛門の次男で出家後伊倉に来て、報恩寺終末期の住職をつとめ、かたわら書道を教授した人で、この墓も門弟たちが建てたものである。また中野快玉玄了房は同寺最後の住職。同じく旧熊本藩士石尾伴輔忠正の次男坊としての武家育ち、成人し僧俗に入り後山鹿町真言宗の金剛乗寺の住職をつとめ、次いで伊倉に入り、高瀬町の真言宗宝成就寺兼報恩寺の住職となった。

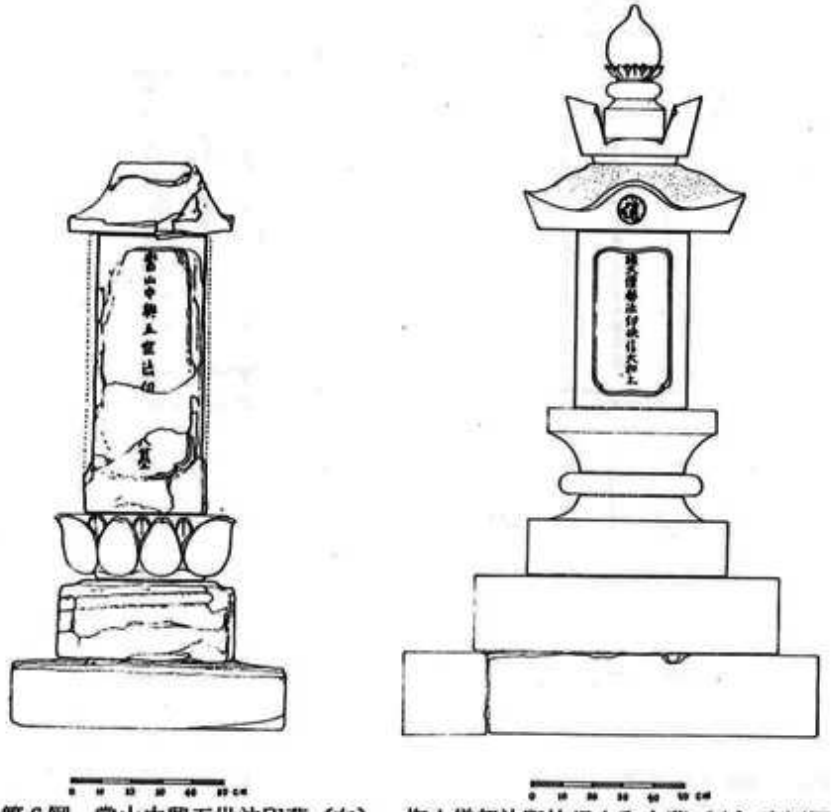
なお、中興四世の墓誌銘に「傳燈阿闍梨法印大僧都𑖎超大和上尊霊塔　當山中興四世兼両院　前法務執行別當　行年四十七入寂」とあるうちの僧号名の𑖎超とした、「𑖎・カク」の１字を梵字を使ってある。「かくちょう」と梵字読みにして読むのだろうか、漢字だったら「覚」の字が普通であろうが、わざわざ梵字を採用している点、何か深い意味があるのであろう。他にあまり見当らない珍しい１例で、特記しておこう。第１、第２世の慶存、慶雲の墓には、ともに３面に長文の報恩寺由来が銘記してあるので原文を別に記する。



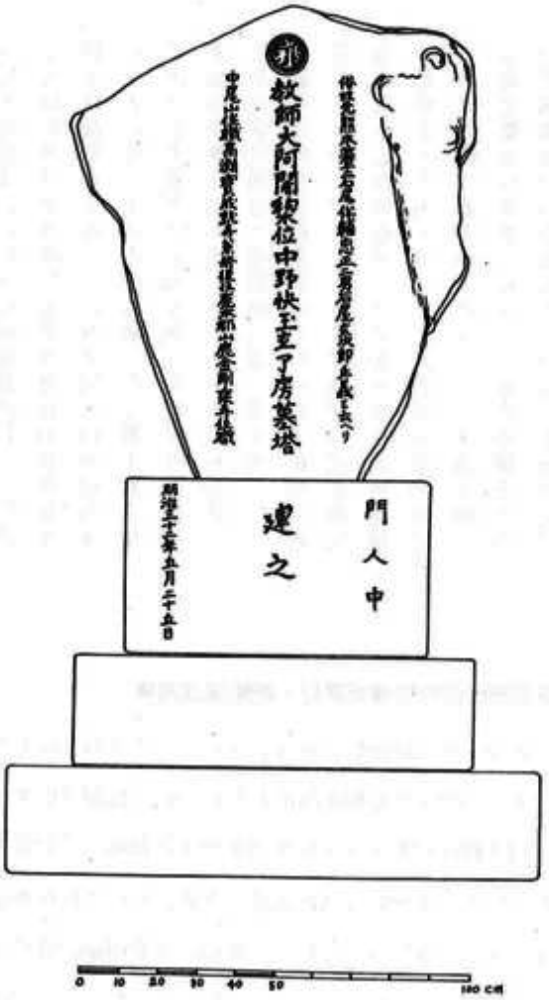
第４図　當山中興開基権大僧都法印慶存墓（左）・當寺中興二世住権大僧都法印慶雲墓（右）実測図



第5図　當山中興三世墓（左）・當山中興四世大僧都[illegible]超大和尚塔（右）



第6図　當山中興五世法印墓（左）・極大僧都法印快信大和上墓（右）実測図



第7図　中尾山住職　中野快玉玄了房墓塔実測図

(一)　中興開基慶存法印墓誌銘

原文

鎮西路肥之後州玉名郡伊倉保中尾山
報恩寺者八幡宮社僧職也當醍醐天皇
朝延長二年甲申草創也頼賀僧正為第一祖
宏開真言密宗法席有供僧所謂定福坊
松林坊別當坊浄然坊明福坊浄林坊也時之
領主寄附地数頃而宗風事熾矣然去天正十年壬午
仲冬朔日罹兵焚而殿堂楼閣咸成灰燼公文
旧記雑誌亦随而畝矣千茲予生千定福遂殆
深歎法裏千時寛文九己酉年前保正長清田
民某為外護而寺移於社邊中興之開基
始復臼貫予鄙懐亦解今記於廃興之趣
以為後来亀鑑

寶永三龍集丙戌一陽復日

現住芯芻慶存謹立

(二) 中興二世慶雲法印墓誌銘

原　文

中尾山報恩寺真言密宗道場也曩者有六坊所謂
定福坊松林坊浄然坊明福坊浄林坊別當坊是也
棟宇既没絶存定福之一坊耳此坊也以地蔵為本
尊其霊応非一事詳本朝霊應記故不贅千此夫中
尾山之院主者則皆定福兒孫而相継至今余壮歳
遊城西沖洲沖洲海濱也偶得一丸石其形如卵白
且滑也清明通徹殆類鎮懐石實可薦於神明遂以
安置平社内今猶存矣享保七年保長小田明英官
襲善左衛門歎招提淪落有經營護摩堂之志興衆
義之衆亦左祖余聞其功半成如没得舩如暗得燈
於是励土木之労使老工匠之術者幹其事刀鋸之功
不日成矣嗟呼蹇劣而受恵果弘法之末流幸開
金剛之關鍵以修無上秘密之法歓喜踊躍遂不得
己雖拙筆覬記其梗槩欲使後為院主者知其志之
勤其功之労而且継復旧之志因銘

7　報恩寺歴代住持供養板碑群・補陀落渡海碑

本堂山頂上、宇佐大宮司一族の塔碑群の東方２５メートルばかりのところに、補陀落渡海碑と振倉謝公墓標を含めた、天文年間より元和年間に至るあいだの板碑（いずれも安山岩自然石）１０基を集めた一群がある。約半数は以前まで宇佐氏墳墓付近に散在していたものを移したものである。

風化や磨滅もほとんどなく、文字も容易に判読できるくらいに保存がよく保たれている。當寺當時代の住持名を知るうえでも貴重資料だと思う。各個の主要刻銘のみを下に記する。

(1)
永禄七年甲子六月一日
専譽善識大徳施主
（雲上阿弥陀如来立像線刻）（以下略）敬白

(2)
八月七日
㊙轉譽壽延大徳
寛文五年

(3)
七月廿一日施主敬白（他略）
旨天正四年丙子
（雲上阿弥陀如来立像線刻）當寺住持泉譽然公和上

(4)
大永七年丁亥十一月十九日大願主善纏大徳敬白幸仲
（雲上阿弥陀如来立像線刻）逆修

(5)
四月二十八日敬白
當寺住持泉譽然公大徳
法輪然公大徳　（他略）
旨天正四年丙子　（他略）
（雲上阿弥陀如来立像線刻）當寺嫡孫金譽永然和上暁圓大徳

(6)
三月二十一日敷白
永禄十一年戊辰　（他略）
（雲上阿弥陀如来立像線刻）造立石像一尊浄金禅定門

(10) 大明　振倉謝公墳

(9)

本願尾州之住月照上人
補陀落山渡海行者下野之住夢賢上人
旨天正四年丙子八月彼岸日敬白

(十一面観音座像陰刻)　(千手観音立像陰刻)　當山住持〇〇〇〇〇〇大徳
(准提観音立像陰刻)　(聖観音立像陰刻)　奉逆修為〇〇菩提也
(如意輪観音座像陰刻)　(馬頭観音座像陰刻)　干時天文(以下不明)　(他略)

(8) (現在現地になし)

當山住持泉譽三十二　(他略)

(7) (岩上地蔵菩薩立像線刻)奉逆修本願向開宗守居士春秋六十二　大永四年甲申二月時正日
大願主開大学頭　宇佐公頼

II　本堂山遺跡の発掘調査

本堂山の調査を、文献資料（主として古記録）と同地にのこる古塔と発掘の三方面から探求し、本堂山にかかる遺跡の全容を明確にさせるために、発掘調査では先ず、都合上第１地区と第２地区の２地区に分け、第１地区をさらに分け、第１遺構、本堂跡、第２遺構、庫裏（または僧房）跡、第３遺構、山門跡、第２地区を振倉謝公墳とし、さらに、1.　内部構造、(1)　第１号墓、(2)　第２号墓に分けて検討することにした。

第１地区　報恩寺跡

第１遺構　本堂跡

先ず、本堂山のどのあたりに本堂が建っていたかを確認することが先決だ、これさえわかればそ

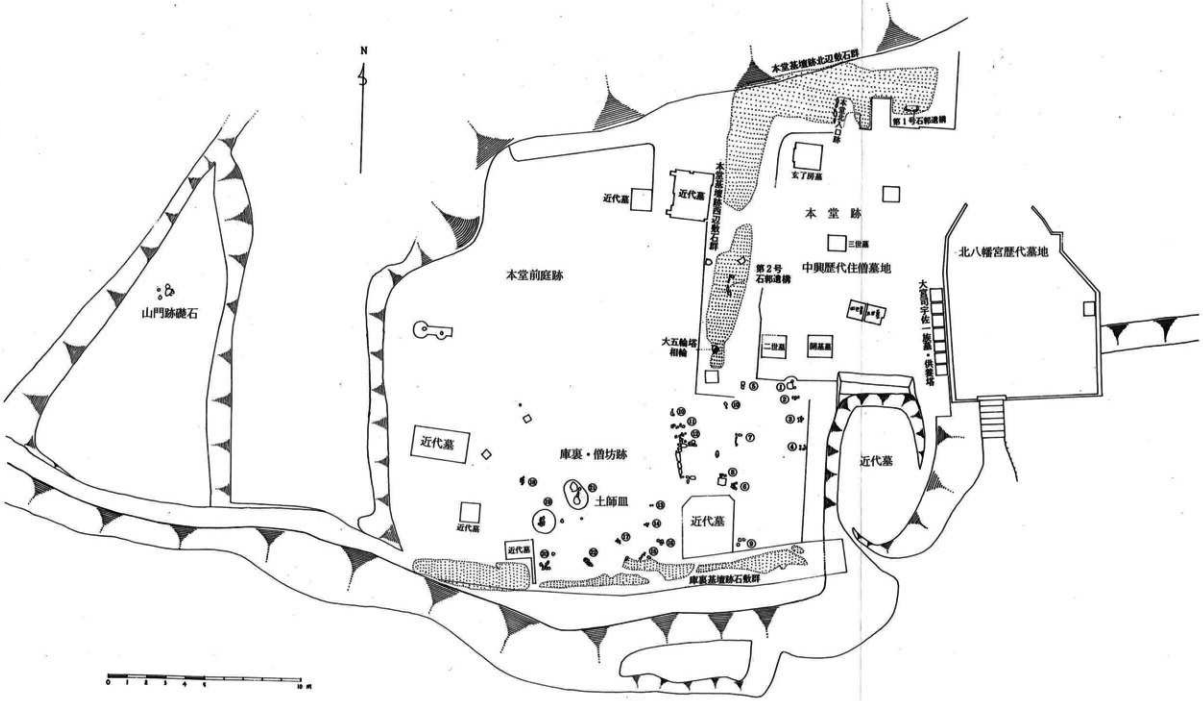
の他の付属施設は逐次わかってくると考えた。山上の眺望のよく利く場所から一望すると一番高い平坦地に住持の墓地があり、その西に隣りしてわずかに低い、かなりに広い平地になる。本堂はここにあったに違いない、ここよりほかにそれらしい場所はないと考えた。ところがそこは、近世の墓地で、墓石が一ぱいに立ち並んでいたところで、近年来大流行の納骨堂へ移葬するため、全山にかけて墓の掘り上げが行われ、そのあと、ぽかんと空いた墓穴、盛り上った土山、乱雑に放置され墓石片、甕棺、骨壺の破片等々、それに加えて無心にはびこる笹竹に包みこまれ、目も当てられない惨状と化していた。ここに建物があったとしてもこの様な状態ではこの中から遺構の確認は絶対望めないと不安を感ずる。一方、最善をつくすことによって果たされる、と思う心に力を得て散乱する墓石や点在する土山群を排除して一応地表面を平坦に均す。

つぎに、歴代住持の墓域を囲む、南と北に東西にとおる幅約１メートル、高さ８０センチ、長さはどちらも同じ８メートル余り、西に面して長さ２０メートルの逆コの字型の土壇がある。東辺には土壇はなく、北辺の東端切れ目から南の宇佐大宮司塔碑列にいたる線で境界する。この土壇を取り去れば建物に即応する地形が明瞭に見られるはずと考え、この土壇を崩し取る。

上部より漸次下へ２０センチほどの厚さに崩していく。上部に近いところに廃棄された墓石片が混入され、その下層に五輪塔片４－５基分が無造作に積みこまれ、さらにその最下層の地盤面にあたるところより、川から運び上げたと考えられる径１５－１６センチ内外の安山岩丸石と割石を１メートル幅で一面に敷きつめ、さらにそれらに五輪塔片が点入され、それが西辺では南端付近で、北辺では全面に、そして西北隅の直角部には大型が見られた。北辺部に接近して急な低地への崖際にかかるためとくに地盤強化のための必要に迫られ五輪塔片の大型が利用されたと思われる。また北辺部石敷の中央よりやや西に寄ったところで、東側には五輪塔火輪石４個を底を東（外の方）に向けて敷石東西線に垂直に並べ、反対の西側には五輪塔の相輪４個をたてに並べ、そのあいだに隅丸石や割石を敷きつめた幅1.６０メートル、長さ1.５０メートルの広さの内側へわずかに上る部分が検出された。敷石中には全面にわたり土師器糸切皿の完形品や無数の破片、または石鍋の破片数個と大小の原石数個も混入していた。北辺石敷の東限あたりは、南に曲り直ちに近世墓に遮ぎられて不明であるが、そのまま直線で延長すれば、前記宇佐大宮司塔列に結ばる。敷石列（群）は北辺で現在の地表下３０センチ、西辺でほぼ同じ水平面となる。

これらは本堂の所在を裏付ける諸条件とみるならばまことに相応しく、したがってここに本堂があったことは間違いはない。

直角に曲った長い礫石群はその基壇を固めた敷石であり、西に面して１２メートルほどつづくほぼ中央に石群のない長さ２メートルばかりの空間で、そこだけわずかに高く、固くしまった粘土質の部分が認められるが、これは本堂建物を西向きとみればこの部分が本堂正面の表玄関となるであ



第８図　遺跡内各種遺構・遺物配置状態実測図

ろう。そして、北辺石敷の中央部の仕組みは、本堂北の通用口の遺構であろう。

敷石に混入された五輪塔の多くは吉野朝時代前後のものと推定され、この時代の遺物を利用しているところをみると、肥後国誌や玉名郡誌、工藤家文書などにみられる。天平時代創建と永正年間小森田但馬等の再興説からすれば、後者の永正年間再興されたものの遺構だということになる。それより以前のものと思われる遺物は何も確認されていない。

なお、石敷中北辺の東端部と西辺の中央あたりから極めて小さい箱式石棺と見られる石組みの遺構が出土している。外側の補強のためと思われる五輪部分を利用した状態はこの時代後の所産であり、もっとも小さく、新らしい箱式石棺の一例として珍例とすべきものであろうことをとくに付記したい。

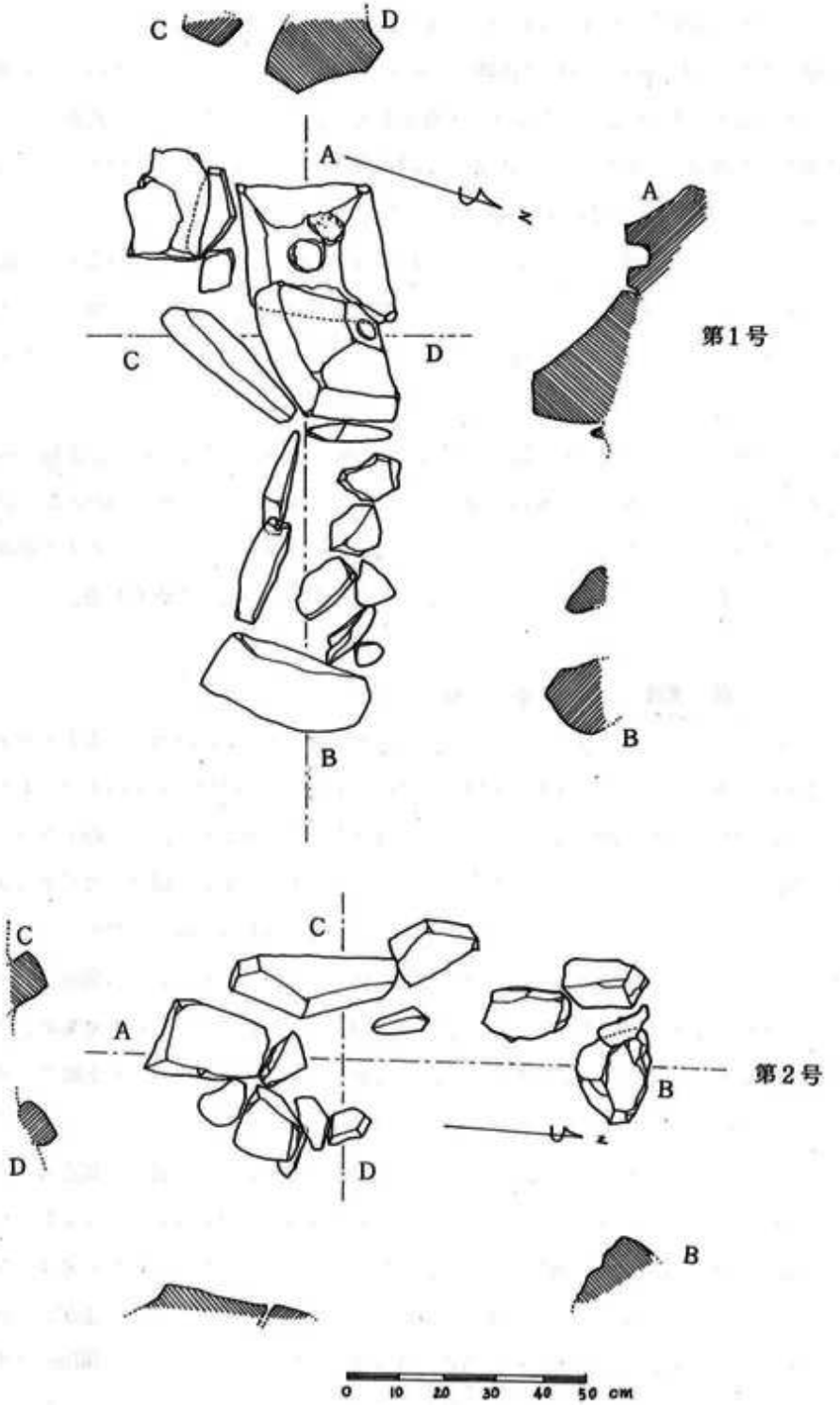
西辺敷石の南端付近より巨大な五輪塔の相輪（風・空輪）１個が出土している。風輪にみごとな八葉蓮弁がめぐらされている。室町後期以降の新しい形式である。これと組み合わさるようなものは何も見つかっていないが、真言宗の寺院では本堂の前に木造の多宝塔を設置することが通例のようになっている。それに代わるものとして大きな石造五輪塔を建てたものと思われる。

第２遺構　庫　裏　跡

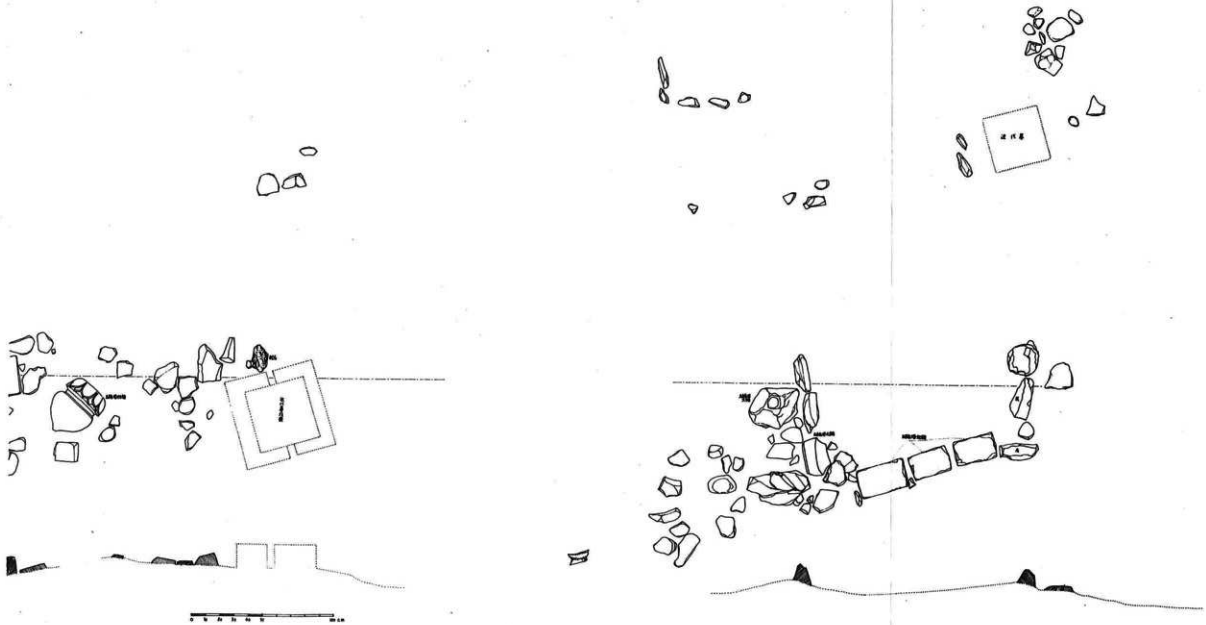
本堂跡とみられる地点の南と西につづく、庶民の墓標の林立していた跡地の表土を５センチほどの厚さにはぎとる。南端は崖の上になり、上端の線にほぼ平行し、東端は地表下約１メートルのところより、西へ向うにしたがい漸次浅くなり、西端では地表下１０センチで、東へ約１５メートルの長さ大体平行を保ち、全長２０メートル、幅は広いところで１メートル、狭いところで３０センチ中央部は狭い幅で二列に分かれたところもある。本堂跡と同じ石敷きが確認された。ここでも五輪塔片が混入されているが、相輪以外の部分はほとんど見当らない。そしてここの場合、石の間に煉った粘土をつめ固めてあった。２列になった北側に、割に大きな石をいくつか寄せ集め、２メートルばかりの等間隔で４，５箇所配列したものが認められた。また、敷石に混じて土師器糸切皿の破片が多く混入していたこともまた本堂跡敷石の場合も同様である。

この敷石は、本堂とまったく別箇の建物で、かなり規模をもつものの遺構の一部と考えられる。

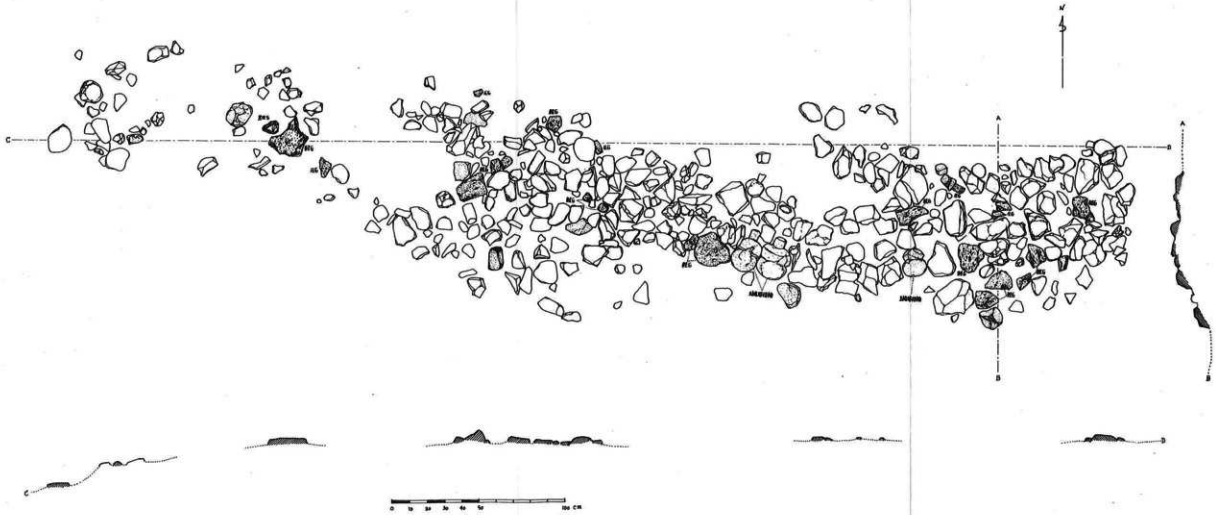
さらにこの敷石線より北へ同じ高さに表土を削り取る。点々と不規則ながら手こぶしぐらいのふくらみのある石や平たいものなど取り交じえた、少ないもので２～３個、多いもので７－８個をあるいは積み上げ、あるいは平らに並べ、または方形にしたりするなど何等かの手法が認められる。総計２３箇所、とくに東に寄ったところに南北に直線をつくり、２.３０メートル同間隔４箇があり北端は本堂跡の西南の一隅につづく。いづれも建物の礎石のあった痕跡である。上になくてはならない礎石の大石は、近世墓地造成の際に取り捨られたのか、寛文９年慶存法印によって伊倉八幡



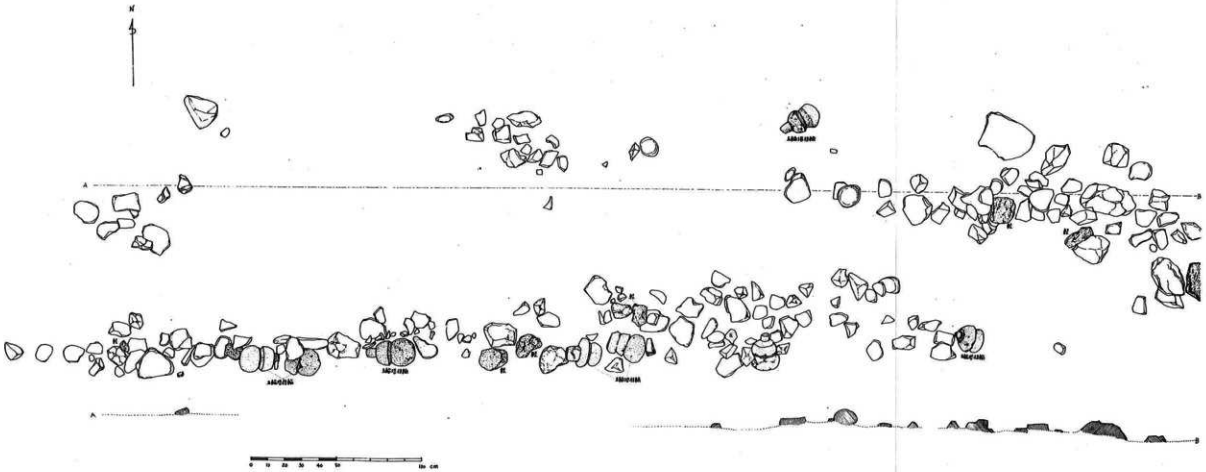
第９図　本堂基壇跡出土　石組実測図
上、第１号石組　下、第２号石組



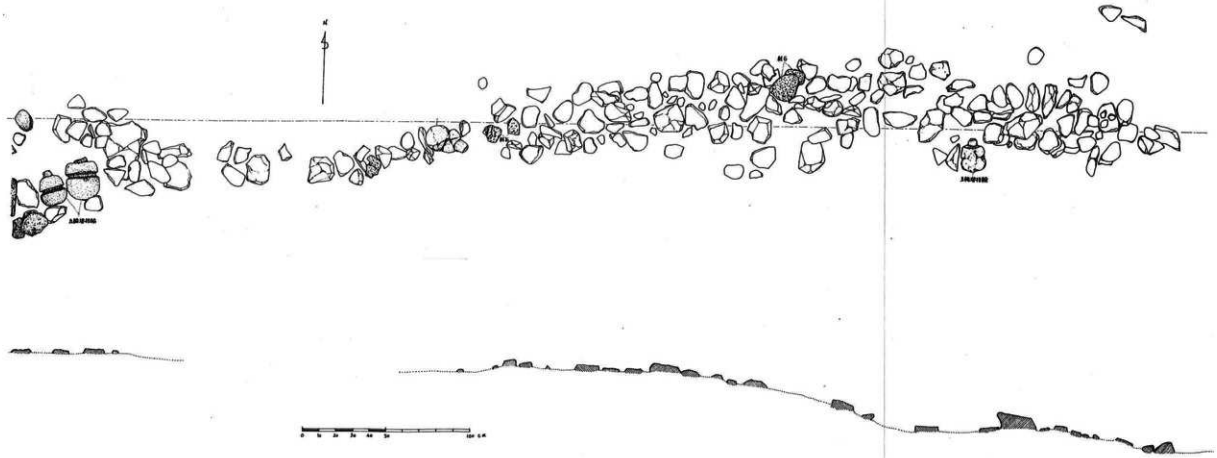
第10図　本堂基壇跡石敷西辺南端部及び庫裏跡の礎石根石・付帯施設石組実測図



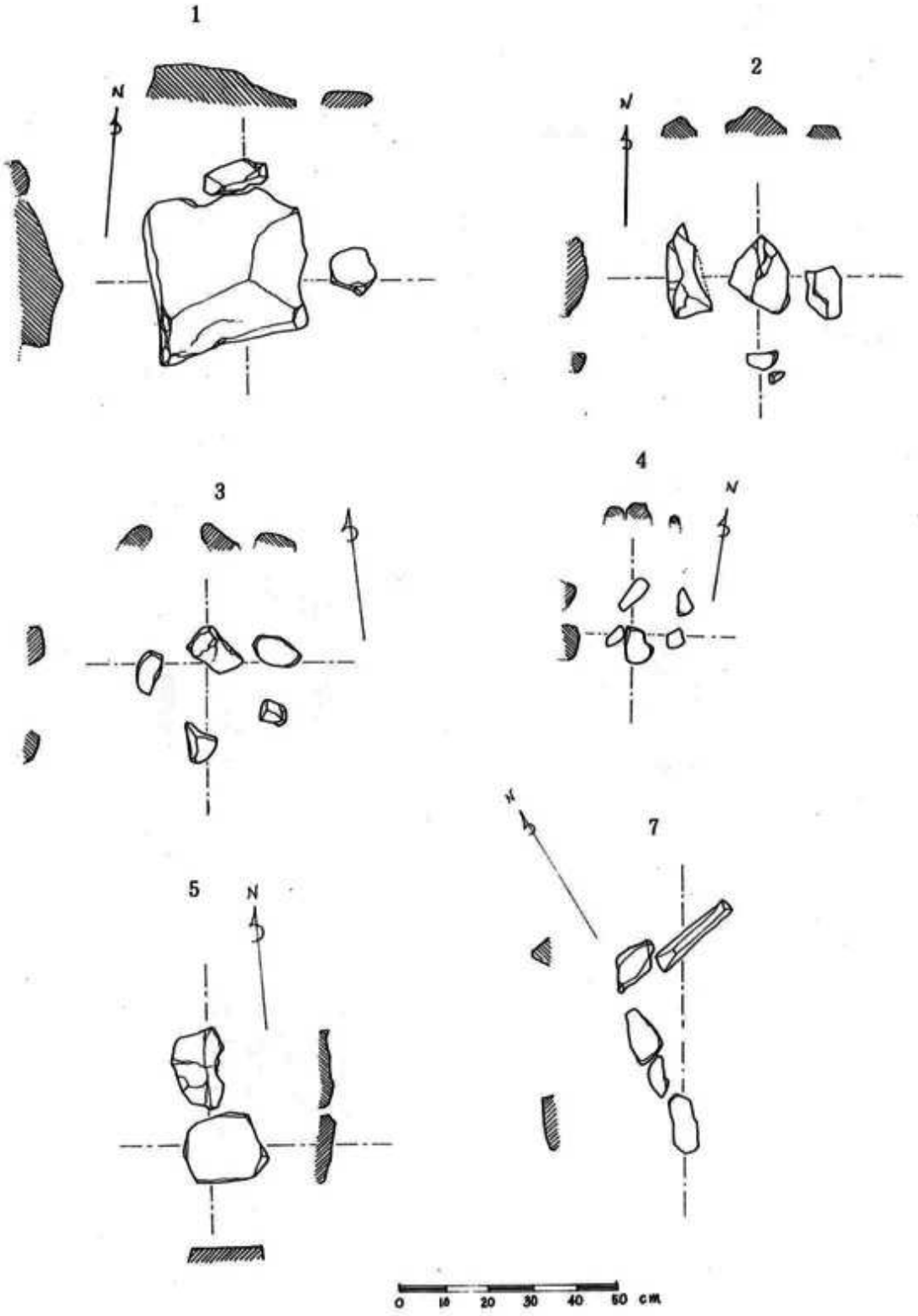
第11図　報恩寺庫裏跡基壇南辺敷石実測図　その1



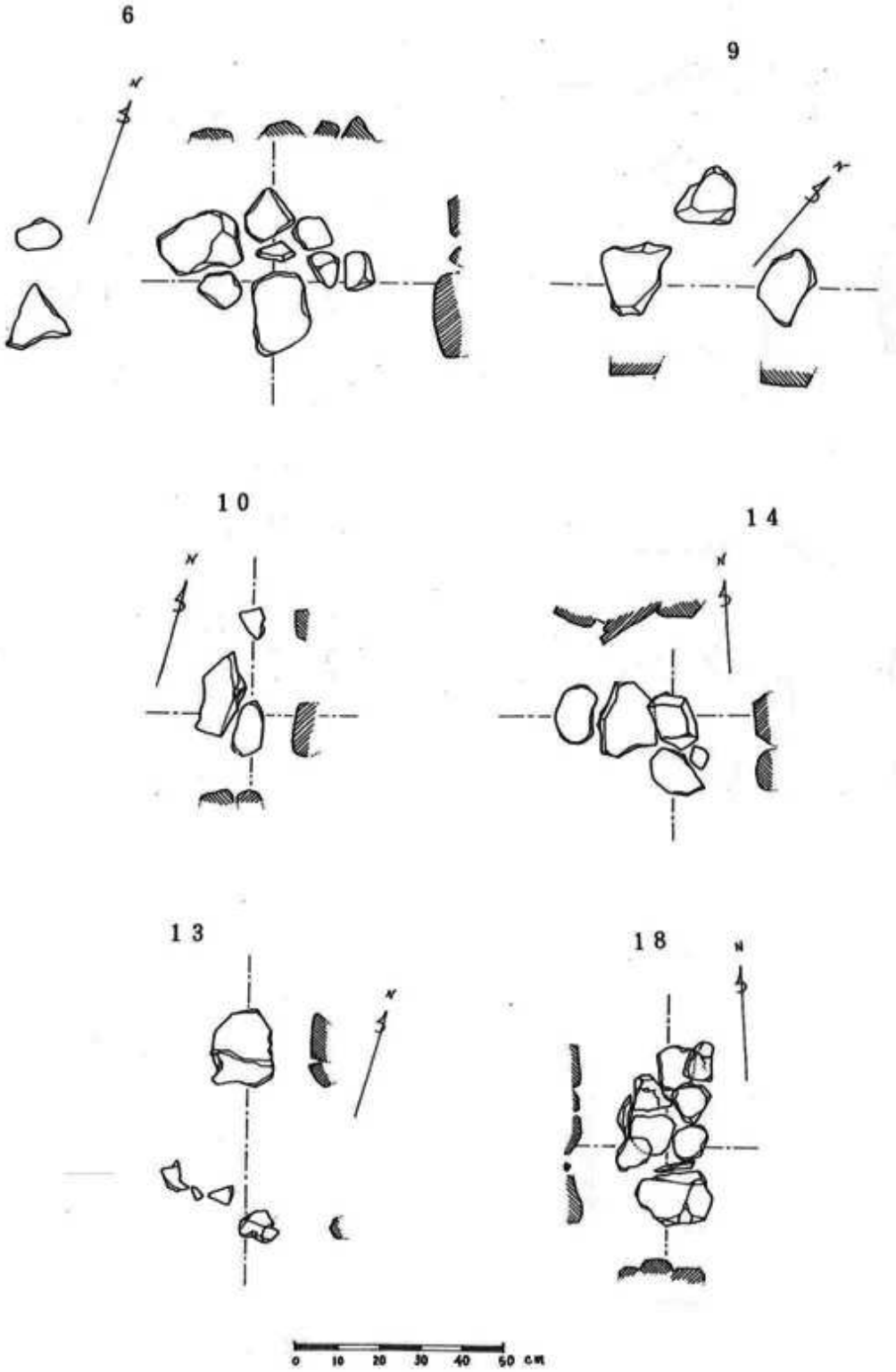
第12図　報恩寺庫裏跡基壇南辺敷石実測図　その2



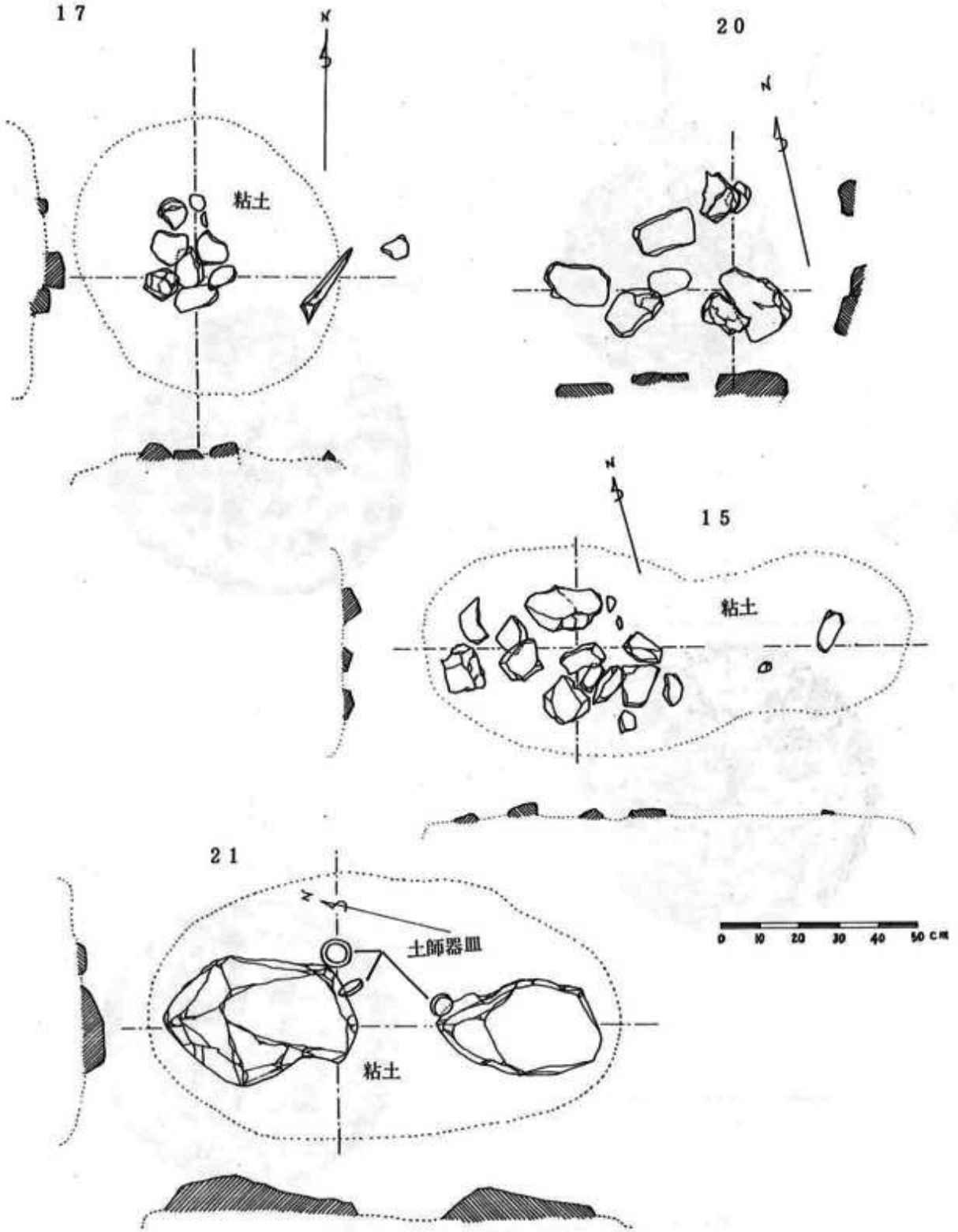
第13図　報恩寺庫裏跡基壇南辺敷石実測図　その3



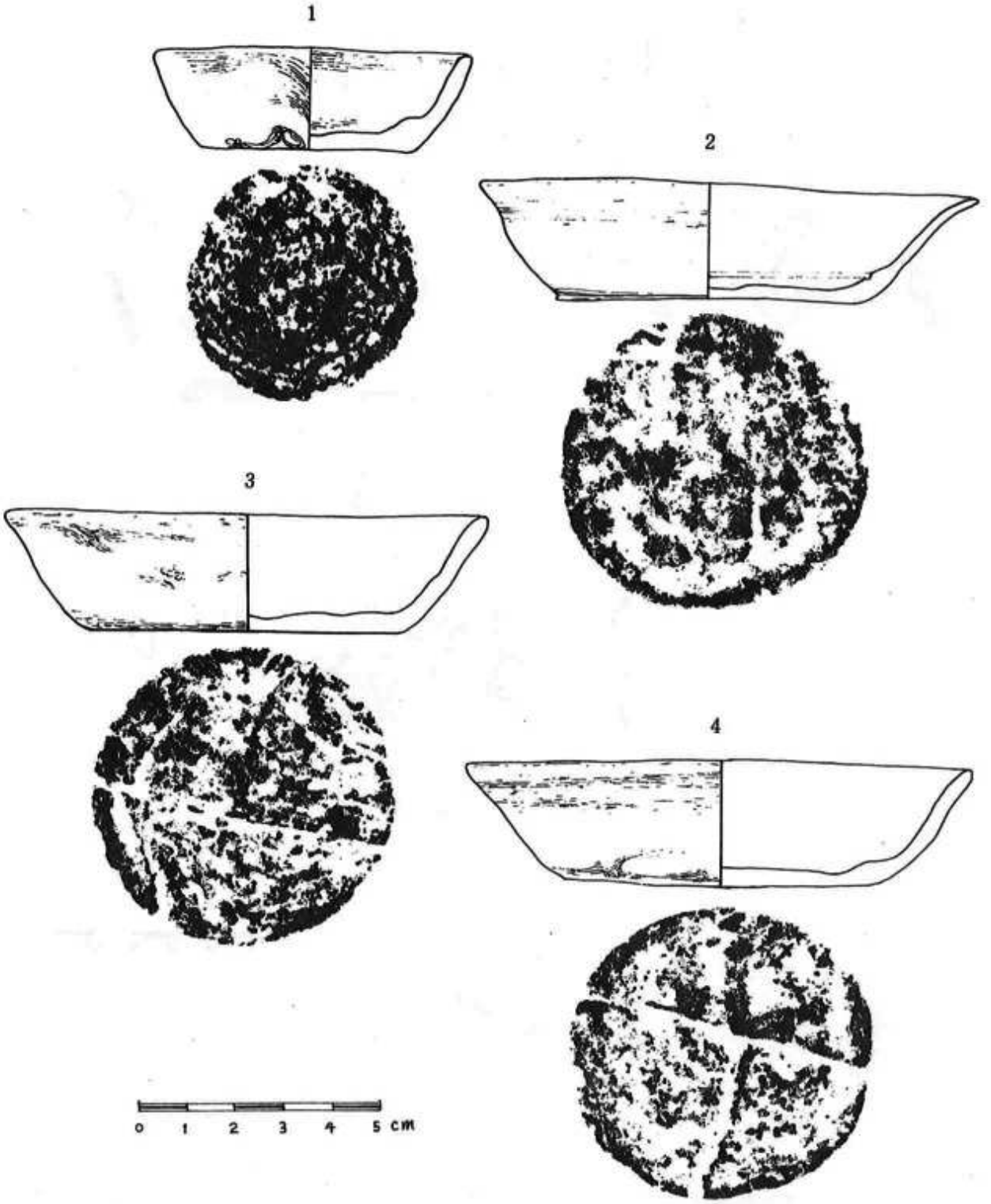
第14図　庫裏跡礎石・礎石根固め石実測図　その1
（1・2・3・4・5・7号）



第15図　庫裏跡礎石根固め石実測図　その2
（6・9・10・13・14・18号）



第16図　庫裏跡礎石根固め石実測図　その3
（15・17・20・21号）



第17図　報恩寺跡出土土師器皿実測図
1＝本堂基壇跡敷石群北辺東端部出土糸切皿
2・3・4＝庫裏跡第21号礎石根石群中出土

のかたわらに寺が移された折にその用材に持ち出されたかの何れかであろう。そのあとに根固めの石だけが遺存するのである。この礎石遺構をかりに復元してみると東西約１５メートル、南北7.5メートルほどの長方形となる。これだけの広さをもつ建物ならば本堂をおいて他に庫裏（または僧房）よりほかにない。また西に寄った中央部に一箇所の土師器糸切皿の破片の混入してひどく焼けただれたところがあらわれたが、これを不明確ながら炉の跡と考えたならば、この地は庫裏跡としたほうがあるいは妥当であろうか。したがって南端の東西にはしる礫石列は庫裏敷地の基壇を固めた遺構の一部であると解される。

第３遺構　本堂前広場跡

本堂跡と推定される区域の西に隣接し少し低くなった平地、本堂が西向きとすれば前広場、または前庭になり、そして庫裏跡と考えられる区域の礎石、根固め石群の点在する地続きで北の区域にあたる南北約１５メートル、東西約２４メートルの広さのところ、ここも近代庶民墓が錯雑していた場所であった。納骨堂へ移すため掘り出された廃材を始末して後発掘作業に取りかかった。本堂に付属する何物かの施設が遺存することを前提として、表土を約5センチの厚さに削りとると下層はすでに固い粘土質となる。この作業の際に西南部の一郭から甕棺の胴部で、鎌倉時代に比定されそうな角格子型押しの瓦器１片と土師器糸切皿片の多量に混入した粘土層の一郭が見出された以外遺構らしい徴候はこの段階では見られなかった。そのあと全面にわたり1メートル間隔で縦横に幅３０センチ、深さ１５センチの小さなトレンチ１５条を通して検視したが、前回の土師器群にかかっただけで、別に何物も発見されなかった。トレンチは遺構の破壊をなるべく少なくするため小さくした。

結局、この区域は堂宇、または他の付属物は最初からなかったものと考えられる。そうすると、この区域が本堂と庫裏真正面にあたることから推せば、前の広場（前庭）ということよりほかに相当するものがないということに落ち付ける。そして本堂正面（西辺）地固め石群の南端に出土した五輪塔の大きな相輪をつけた大五輪塔はこの広場の中央に建設されたのであろう。

第４遺構　山　門　跡

本堂位置のま西にあたるところ、山頂を取り巻く段築の３段目、庶民墓地を掘り上げたあとの空隙を縫うようにして細長いトレンチを南北に通し、遺構の有無を確かめた。北に近い位置の、地表下２０センチばかりのところに数個からなる石群が現われた。さらに周囲の土を排除し完全に石組を露出させると、長径４３センチ、短径３２センチの安山岩の上面の平らな自然石をまん中に据え四方に小さな石を４個配置した状態になり、それに加え大石に一端を触れた長さ１８センチの刀子１本と、小石（根固め）の根もとに永楽通宝の貨銭１個が出土した。石組みの規模は小さいが、礎

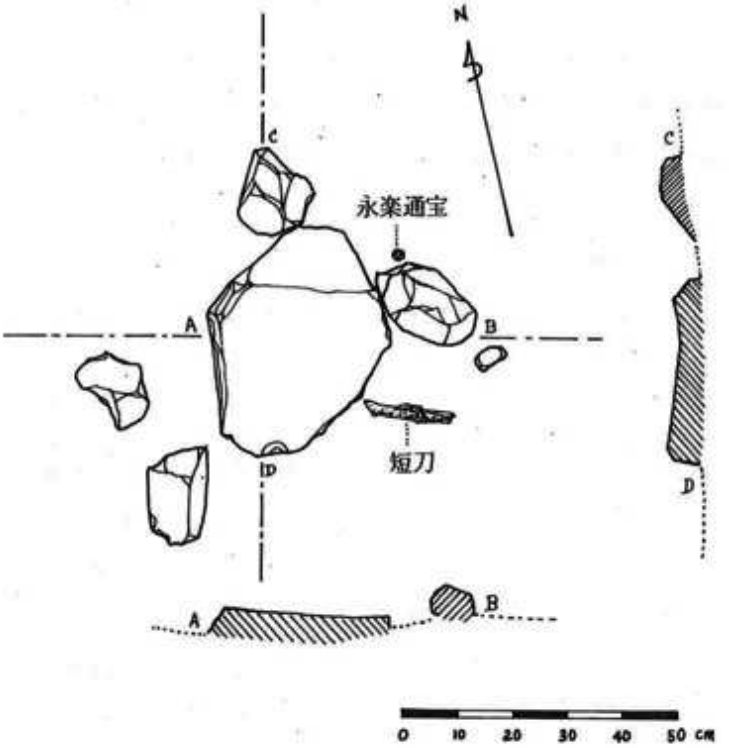
石の一揃いであることは明白である。

本堂が西に向き、前に広場があり、そのまた西といえば寺院の伽藍配置の上では山門がこれに相当するであろう。庶民墓地造成で破壊され一連を見出すことは不可能であったが、山門を裏付けるための資料はこの発見礎石で十分に用を足していると思う。とくに刀子、銭貨などを埋納する礎石となれば、この建造物の中でもっとも重要な位置にある礎石と考えられる。山門は寺院伽藍への第一関門である。刀子は、実用的には護身用の武器、これを超越すれば神聖な宝器として扱かわれ、永楽通宝は豊臣秀吉にはじまる公式日明貿易で第一にあげられた輸入品で日本通貨として盛んに使用された。伊倉は丹倍津と呼ばれ、高瀬とともに良港をもち、郭公、謝公等彼の地の商人も伊倉に来住するほどに日明貿易の一大拠点となって栄えたことは多くの人達のよく知るところである。この地にも永楽銭が使用されたことは間違いなく、貴重品とされ、神仏への賽銭にも用いられている。これら刀子と永楽銭を礎石下に埋納して山門工事の無事と末永く栄えることの深い願いのこめられたあとかたがうかがい知られる。

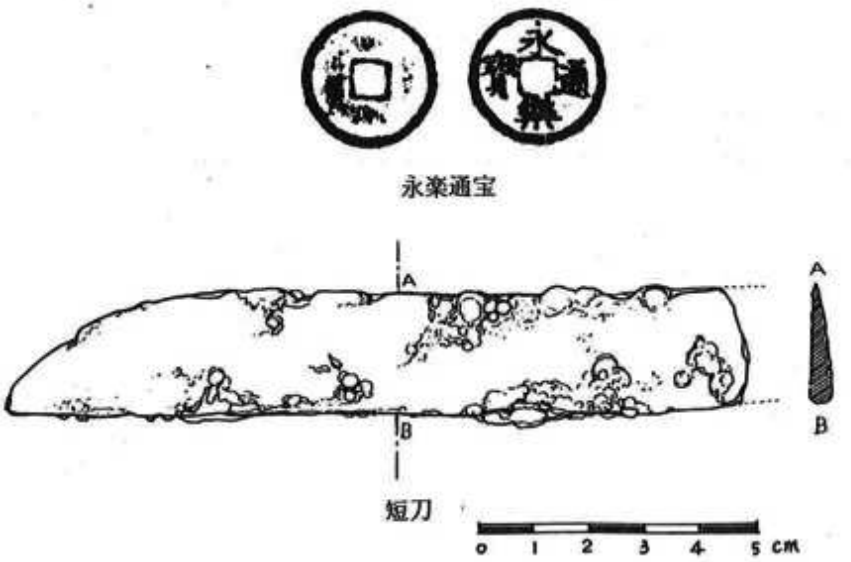
第2地区　振倉謝公墳

本堂山の頂上へ西より登る中腹参道の左わきに立てかけてあった付近に振倉謝公の主体は当然あるものと考え、前面にある庶民の土饅頭墓を避け、空間に幅2メートル、長さ3メートルのトレンチを設定した。地表下２０センチのところで直径1メートルほどの円形の異色土層が現われた。主体部の存在を示す墓孔であると見ると大きな期待がかかる。さらに掘り下げること６０センチにしてほぼ中央にまるい輪が土のあいだに切れ切れに出てきた。甕棺の口縁上面である。庶民墓の感じもあり半信半疑のまま周囲の土を底近くまで排除した。蓋はすでに割れ破片数片がのこっている。副葬品に留意しながら充満した甕の中の土を出すと、人骨に達した。組織が乱れて折重なった人骨が底一ぱいに見える。一見貧弱に感じたので、大腿骨１本を取り出して自分のものと比較してみると３分の２ほど小さい。子供であることは明らかである。甕もまた口径３８センチ、高さ６３センチという目当の人物の想像する体格にしては小さすぎる。庶民の墓であることが分ったので埋めもどす。

そこから北へ5メートルの地点で、小さく突き出た低い崖の先端にセメントのような大きなかたまりが一部を土や草のあいだに姿をのぞかせている。土地の古老たちのあいだでは、日本で一番古いセメントといって噂し合い珍しがられているものだという。よく見ると漆喰で、随分厚く、上面は板状になっている。報恩寺上り口の参道地盤固めか、墓域の地固めか、または、農家の肥溜つぼか、いや墓地にはそんなものは造るまい、などと見かたは様々、笑いもおこるなど一しきり、決め手がない。その決め手は発掘に俟つこと、そしてこれも当初から発掘の対象となっていたので主力



第18図　報恩寺山門跡礎石実測図



第19図　報恩寺山門跡礎石埋納品実測図・拓影

をここに傾注した。結果はこれが謝公の墓であることが確実的なものとなった。内部の主体者が南北にほとんど並列状態で出たため、謝公が１人でよいのが２人とあって当惑したが、１人は夫人ということでこの件も落着。記述の都合上、北の墓室を第１号墓、他を第２号墓と仮称する。

第　１　号　墓

一部露出していた日本最古のセメントといわれるものの全容を掘り出した。棺郭を覆う屋蓋であることが判明した。

(1)屋蓋　全面漆喰でできている。

〔註〕漆喰は、粘土、砂、焼いた貝がらの粉末を混合し練り上げたもので、乾燥すれば石に近いくらいに固くなる。はくとじっくい、しまばるじっくいといわれたものもこの種類。セメントの発明以前泉水建築材、肥溜、台所敷石の目止めその他に広く使われた。

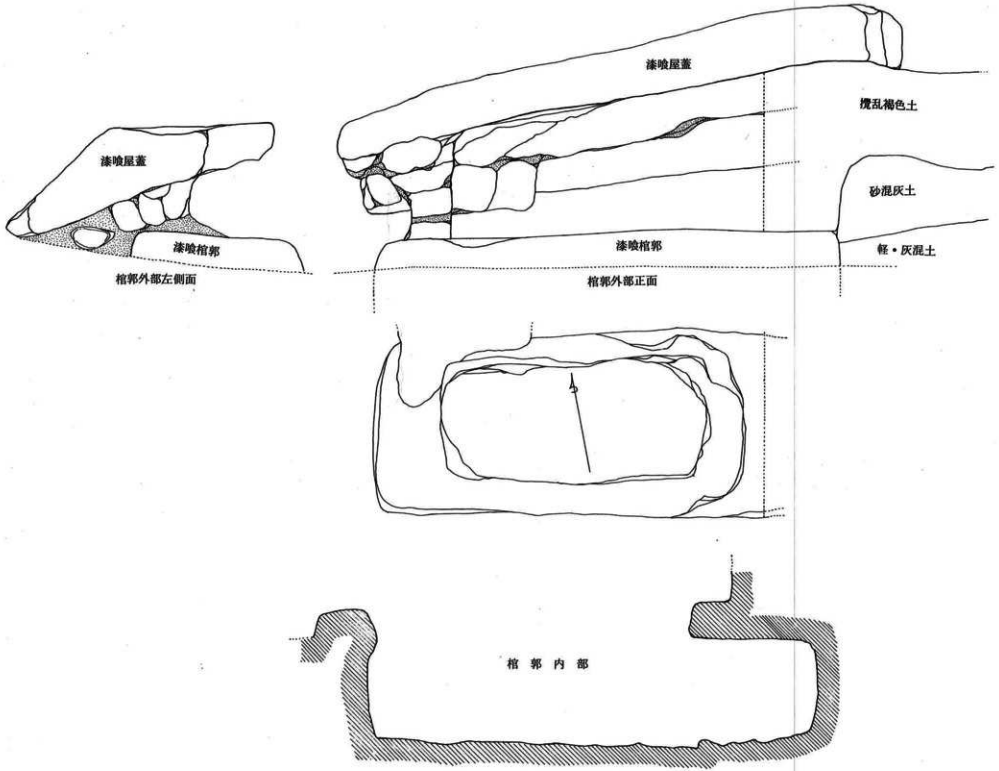
上面の中央に、縦に棟を通し、双方に７５センチの長さ、ゆるやかななだれをつくる切妻式の屋根型で幅1.３０メートル、長さ2.６０メートル、なだれの軒先の厚さ２２センチ、両妻の高さ６３センチの大きさの、巨大な怪物がうつ伏せしたような錯覚にかられるほどのものである。前軒先より４０センチほど下に、貝がら分を少なくした漆喰の棺郭がある。

(2)棺郭　粘土分を多くし、点々貝がらそのものが見えるほど屋蓋に比し粗製である。幅４８センチ、長さ1.９４メートル、深さ（床面より天井まで）頭の方で３５センチ、足の方で４５センチを計る。（何れも内面）四方の壁、床面天井と全面を厚さ１５～２０センチをもって包んでいる。西側面だけ空隙をつくり、木棺をここから挿入し、あとで同様の漆喰塊で閉じ、隙間に粘土に砂利を混入して練り合わせたもので密封した状態が遺存している。

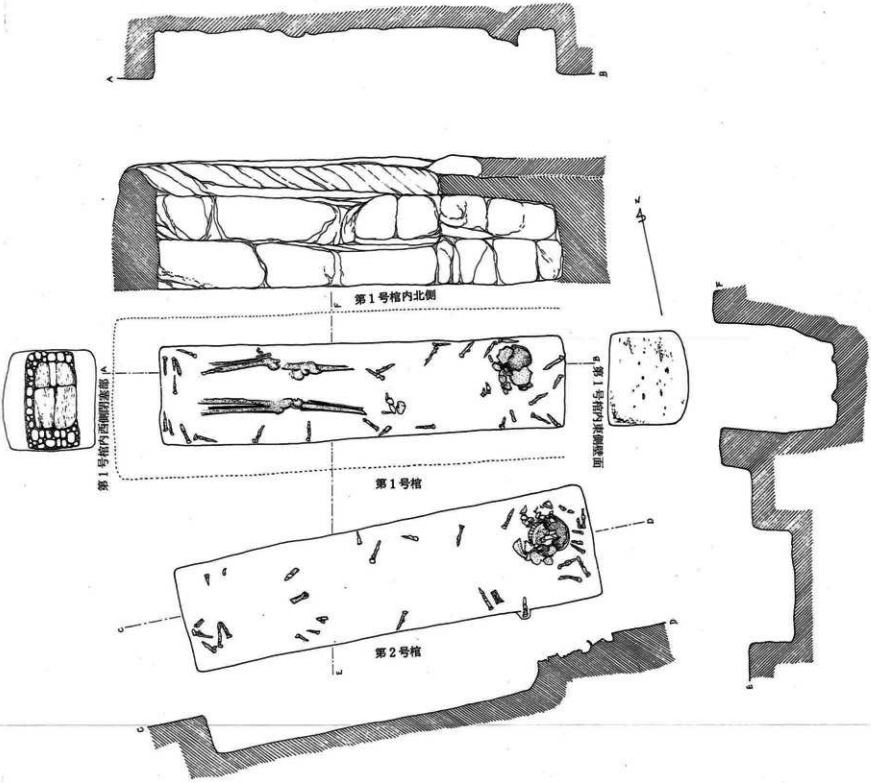
また、棺郭上の前後（両側）に同じ漆喰塊の小さなものをいくつも積み重ねて屋蓋を支えたが貧弱であったため支えきれずに屋蓋は北（後方）へ約５０センチずれを生じ、下へ３０センチほど落下した状態になっている。

なお棺郭には木棺が納められていたようである。

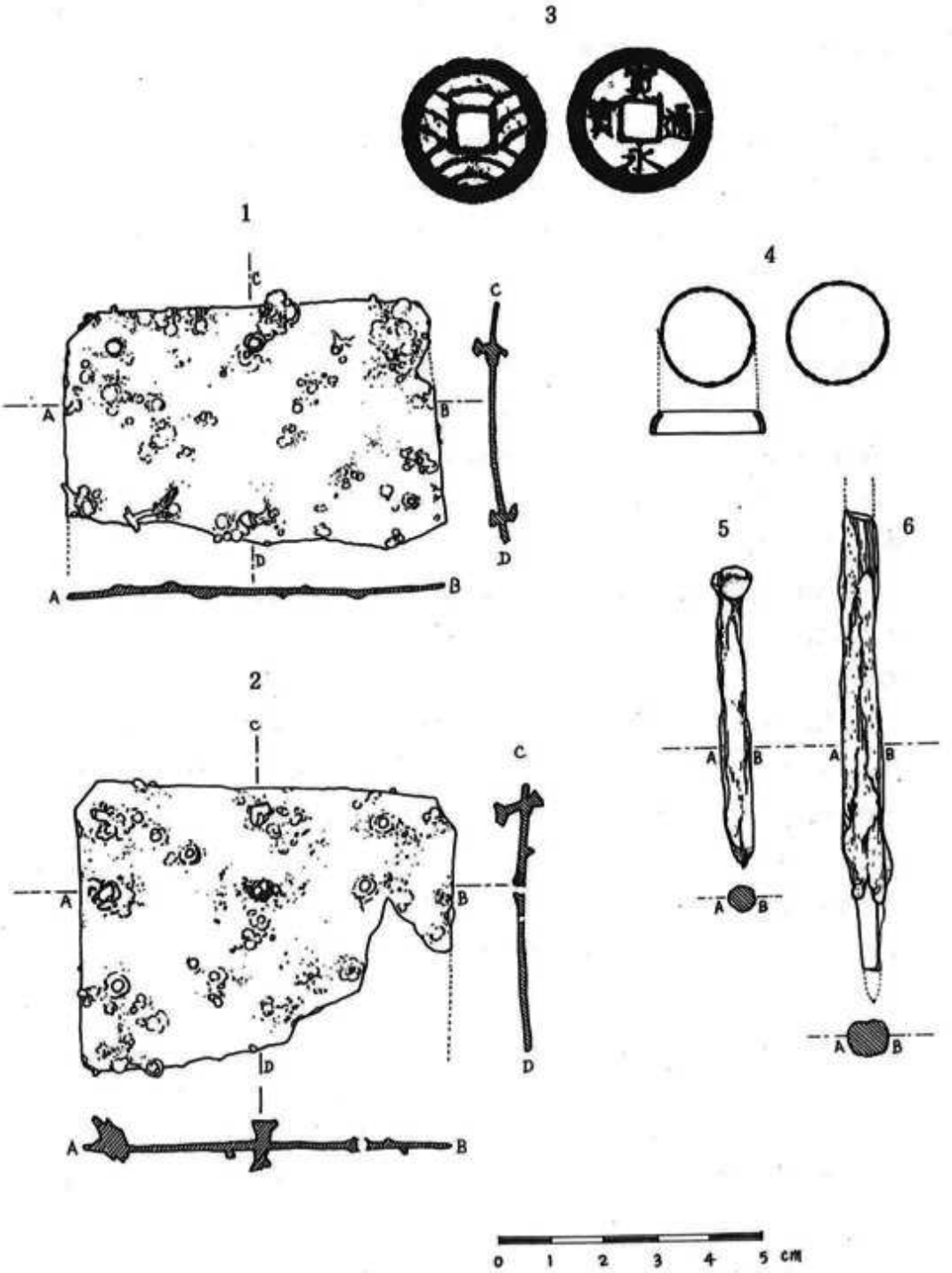
(3)木棺　木棺が納められていたことは床面に遺存する鉄釘と側壁に印刻の形跡によって明確に認められ、またその大きさは、棺はすでに腐敗し、木質などまったくのこっていなく、接着に使われた釘の配列状態によって察知される。幅４０センチ、長さ1.９０メートル余り、深さ２５センチぐらいの大きさ、そして鉄釘にわずかながら付着する腐敗木質部の痕跡からして棺身板は４センチほどの厚さと推定される。釘には長短があり、最長は１６センチ、最短は１１センチ、胴径は最大1.２センチ、最小0.８センチを用いてあった。いまは鍛冶職はないが町名なおのこる鍛冶屋町で日本刀伊倉同田貫を打ったことはよく知られる。この釘もここ



第20図　振倉謝公墳　棺郭外形実測図



第21図　振倉謝公墳　内部構造実測図



第22図　振倉謝公墳第１号木棺内出土品実測図

１・２＝木棺付属鉄板片　　３　＝棺外表土出土、寛永通宝

４　＝指環型銅環　　５・６＝鉄釘

で打ったのではないかという推察も成り立つ。

(4)主体人骨

棺室床面東側鉄釘の配列線より３０センチばかり入ったところの北寄りに頭骨があり、棺郭天井部が落下してその下敷となり、無惨に打砕かれ後部を失い、顔面と顎骨が割によくのこり、とくに歯は骨に付着のまま並び、ほんの１点の虫歯を見るだけで健康な状態を示していた。胴、腹部はすべて削減し、骨盤の位置に海綿状を越ゆるほど腐敗した部分がかすかに認められた。

脚部の保存は極めて良好で、右膝を天井落下で粉砕されたほか両足先の指３節づつがないだけで、その他は類例のない程に完全であった。

頭骨と足先の遺存によって正確な身長が出される。1.６２メートル、中位の体格で骨格は割にたくましく、歯の状態も若く健康で、１点の虫歯をもつだけ。４０才未満の熟年男性と推定されている。

主体者は墓の様式と、付近にあった墓標銘の上から推して明人振倉謝公であることは明らかである。

(5)副葬品

副葬品については、被葬者が明国の貿易商人だとすれば、ふだんの生活も派手で、文化水準の高度なものを使用していたように考えられ勝ちである。そうした見地の上から棺内床上の精査には細心の注意を払ったにも拘らず、それらしいものは何物も検出されなかった。屋蓋は北へ傾き、棺郭の天井部は全体の約半分の中央部が落下して大穴を生じ、その破砕の断片は骨格の腹部の上に堆積していた。これらの状態はどう見ても人為的な所作が濃厚に感じられ、そうだとすれば副葬品を目当にした盗掘にあっている。という以外に考えようがない。あるいは当初から副葬品を副葬しなかったのでもあろうか。

ただ、副葬品とはいえないが次のような出土品が挙げられる。

イ　金属環　１点

銅製らしく、一見指輪そっくりの形をしているが、よく見確かめると上縁と下縁に僅かばかり大きさの相違があり、指輪に比して厚みがなく、材質が粗品であり、小道具の補強環ででもあろうか。

ロ　釘列と釘孔列のある小鉄板　同種２点

もともと１個体であったもので、発見のときはすでに２分され、ほぼ東西方向に主軸をとる棺底の東端に接近する頭蓋骨の顎骨の右がわに接し、片面に打ち曲げられた釘の先端を上面に向け、２枚互いに２センチほどの間隔をおいて天井の落下部分を除く、骨格の上

部と両脚部はすでに露出状態のまま、したがいこの鉄板も半面は露出、遺存していた。分断部分がどちらも風化があり、欠損の一部分が失われているところがあり、早い時代に何かの衝撃を受けて二分されたものであろう。１点は不規則的に、他の１点は表側（発見時では地面側）に浅い湾曲が生じているが初原時には、平面を保っていたに違いない。分断面を合わせ復元してみると、正方形に近い短形の、長辺9.３センチ、短辺の片方が２センチと他方が6.８センチの広さを有し、断面は計っても数字に出ない極めて薄い鉄板である。このように薄い鉄板にしては保存状態はよく、２センチ間隔を保って長さ1.５センチの、尖端の曲った小釘が１点は４本と釘穴だけが１個、他方で釘２本と釘穴４個が認められる。何等の装飾もなく、四隅を小さめに直線に欠き取り、飾り金具としては当らなく、木部は全面腐蝕消滅していて装着箇所はまったく不明であり、遺存する釘とその配列状態によって木棺であったことを知るだけである。

発見時の位置から考えられることだが、棺蓋に設けられた遺体と対面するための窓に用いられた金具と見たらどうであろうか。

ハ　鳥骨　４点

４点のうち脚部の骨完形２点があり、その大きさから見て中形くらいの鳥と思われる。中形の鳥といえば鳩であろうか。日本神話伝説の中で日本武尊が東北平定の帰途病にかかり、伊勢の能煢野まで来てついになくなられた。王子をはじめ多くの縁者たちがかけつけて嘆き悲しみ、やがて御陵を築いてそこに葬った。するとそのとき一羽の白鳩が御陵の中から飛び立ち、三回まわって西の方へ消えて行った。王子たちはこの白鳩こそは尊の化身であると信じた。日本武尊の御陵をいまも白鳥陵と呼んでいる。

このような故事は日本の後世まで続いたが、謝公墳第１号棺から出土した鳥骨が鳩としたとき、白鳩であったかどうかは判断のしようも知らないが、そうした故事に因する表れであろう。謝公の霊魂は鳩に化身して精還させようとする願いがこめられたものであろうか。

ニ　鉄釘　３１本

木棺材板の接合に用いられたものであることは明らかである。大きく片方に偏する帽子をつけ、その根元あたりに最も大きく、１辺８ミリ角をもって、漸次尖端に小さくなって１１センチの長さをつくる。この程度を基準に、長さ、大きさにそれぞれ多少の相違を見る。

大体、長さ1.９５メートル、幅４５センチ大の短形の周囲に、後部の隅５本と４本が集中し、頭部の隅に多少の乱れがあるが２本づつ、長辺ではそれぞれ１本づつ等間隔をとっ

て配列状態で出土し、この配列はおのづと棺形ともなる。棺の木部は全面的に腐触し、認められなかった。

第 2 号 墓

第1号棺郭掘開に際して予期せずして掘り当ったものである。第1号漆喰郭の前（南）縁の部分を掘り下げて露出させるため作業中にはからずも20センチばかり下層から人骨の脛部がスコップにかかり次いで鉄釘2本を出した。人骨だけであったら庶民骨と見なすが、鉄釘が供伴する以上ゆるがせにすることができない。直ちに元へもどし、この作業を中止し出土物にはしるしのくいを立て、浅いめに土をもどし、第1号の完了をまって主力をこれに注いだ。

例の通り現在の表土を8センチくらいの厚さにはぎ取ると、粘土質の中に多量の風化凝灰岩や軽石などのまじった土層の平面に黒味を呈する異質の土がくっきりと目につく。墓孔で幅70センチ、長さ2.20メートルを計る。そこで墓孔の中の土を5センチの厚さをもって平面に段掘りをくりかえすこと数回にして鉄の腐触した赤錆を認めた。床面に近いことを示す。

それから慎重を期し、人骨、遺物に留意しながら清掃し床面に達した。

(1) 木棺

木質部はすでに腐触し、第1号墓同様に見られなかったが、遺存する鉄釘によってそのことが理解できる。釘は大体棺の外側に沿って配列を維持していて、棺の大きさを示していた。四隅に多く集まるが、幅38センチ、長さ2.00メートル、深さ20センチぐらいの大きさと推定され、第1号棺とほとんど大差はないように思う。

(2) 主体人骨

第1号棺に接するように頭を東にして葬られていた。頭骨は東側の釘列に接するようにして遺存し、保存状態は割合良好であることがいえると思う。顔面、上頭部あたりはずい分乱れていたが、縫合部から外れたものもかなり見られるがこれは復元すれば可能である。良好なのは口の部分と後頭部である。下顎で歯はほとんど離脱していたが骨部はしっかりしていて歯のとれたあとかたも健全であった。上顎は主体が欠離してはいたが、数本を除いてほとんど着装のままのこっていて健康状態も健康そのもののように思われる。

脚部は割にのこりやすい脛骨の左のほうがのこっていた。ほかに左上腕骨の一部があった。胴、腹部はもっとも腐触しやすいためこの場合も全く見られなかった。

遺存人骨の状態の上からみて40才前後の熟年であることは1号と同じくらいであるように思えるが、性別についてはこれだけの骨格では判別し難いのであるが、女性への傾向を感じ、一般的には古墳時代から2基並列の例は極めて多く、この場合すべてが夫婦である。ここでも

1号棺が謝公という男性ならば他はその夫人の女性であるとする見方が強い。

(3) 副葬品

副葬品としては何も認められなかった。

出土品としては鉄釘２８本が挙げられる。形も大きさも第１号棺の場合と変らない。これも第１号棺と縦横共同じ大きさの短形周囲の後部両隅では北側で2本、南側で５本、頭部側では、頭蓋骨頂部付近に９本、長辺の北側に５本、南側に７本が配列状態でそれぞれ出土した。

参　考

1　肥後国誌　上　　後藤是山　　九州日日新聞社　　大正　5年　7月

2　玉名郡誌　全　　熊本県教育会玉名郡支部　　名著出版　　大正12年　2月

3　国郡一統志　　北島雪山　　青潮社　　昭和46年　9月

4　おさき墓地古墳碑群　　熊本県教育委員会　　昭和54年　3月

5　北牟田塚墳墓　　玉名市教育委員会　　昭和54年　3月

6　玉泉寺　　一古墳と中・近世寺院の調査一　　熊本県教育委員会　　昭和55年　3月

7　浄光寺蓮華院跡出土品　　玉名市教育委員会
玉名市文化財保護委員会　　昭和56年　3月

8　広報たまな　　聖地本堂山　　玉名市　　昭和51年　9月

9　広報たまな　　中尾山福寿院報恩寺　　玉名市　　昭和51年10月

10　広報たまな　　明人振倉謝公の墓　　玉名市　　昭和51年12月

11　熊本史学　　第50号記念特集号　　昭和52年12月

12　玉名市の文化財　　第1輯　　玉名市教育委員会　　昭和45年　3月

13　玉名市の文化財　　第2輯　　玉名市教育委員会　　昭和46年　3月

14　玉名市の文化財　　第3輯　　玉名市教育委員会　　昭和47年　3月

15　天水町文化史跡　　天水町教育委員会

16　熊本県埋蔵文化財包蔵地一覧表　　熊本県教育委員会　　昭和52年　3月

17　肥後国古塔調査録　　熊本女子大学　　郷土文化研究所　　昭和27年11月

18　肥後文献叢書　㈢　　歴史図書社　　昭和46年　8月

19　肥後国地誌集　　森下　功　　松本寿三郎　　青潮社　　昭和52年　9月

20　寿福寺跡　　玉名市教育委員会　　昭和55年　3月

21　蓮花寺跡・相良頼景館跡　　熊本県教育委員会　　昭和52年　3月

おわりに

昭和５１年７月１日盛夏の中で幾多の方々の来臨を忝のうして、本堂山遺跡の発掘調査鍬入の神儀が挙げられ、以来８月３１日まで満２か月を要しての学理に基づく発掘調査を一応終え、予期以上の大きな成果を収め得て喜びに堪えず、茲にその結果をまとめた。これが急を要したため、また人骨関係分が目下調査中のこともあって略報とし、本格報告は時期を見て、発表したく思っている。

さて、ここ伊倉郷土の文化を再び考えてみるとき、巻首にも述べたとおり、きわめて古く各時代を経てさらに高い文化を創造し、それを後世（現代）に伝えている事実は今なお多くのこり保有されている各種の文化的な遺産の一つ一つがそのことを如実に物語っている。

とりわけ、千数百年昔の奈良時代以来各時代かけてその中心をなすものは伊倉八幡両社と中尾山報恩寺とである。どちらも相互に鎮守神、神宮寺、菩提寺としての役割のもとに密接にして引き離すことのできない関係にあり、報恩寺も八幡両社の繁栄とともに栄え、その中に伊倉町民に及ぼした福利、文化発展はどれほど大きいかはかり知れない。一方その繁栄もそれ自体だけでは果し得るものでなく、片方町民の協力援助の誠をつくすことによってでき得るものであることは言を俟たないであろう。

報恩寺は、本堂山を本拠に一時は町内に六坊町外に十一坊と総数百五か寺の末寺を国の内外にもち、その総寺として規模と勢力を築き上げ空海の教えた真言密教を表看板に掲げて推進し、地元伊倉の文化を開発し、町民の福利増進のためつくしたことは数知れない。

元和年ごろ中国明朝より振倉謝公が伊倉をこよなく愛して移り住み、日明貿易に身をくだき、伊倉町民に多くの利益を与え伊倉町の文化発展に大きな功績をのこしているが、今までつい忘れ去られ、報恩寺はその跡は荒れるに任せられ、まぼろしの寺となり、謝公は墓標はあってもいま香華も見ず、墓の位置も分らないまぼろしの人物となっていた。

このたびの発掘調査によってそれらの遺構が明確にされ、昭和の今日久方振りに陽の目を見ることができた。

報恩寺本堂跡、庫裏跡、山門跡及び謝公墓は、従来からあった本堂山住持墓、供養塔、八幡宮神職墓とともに伊倉町はおろか玉名市の文化財として是非保存を要するものである。

報恩寺跡に出土の遺構は昔の状態を今によく示し、玉名地方でこれほど昔のすがたを明確に示す例は他になく、謝公の墓は異国風の日本的にもあまり発掘例のない珍しいというだけでない。

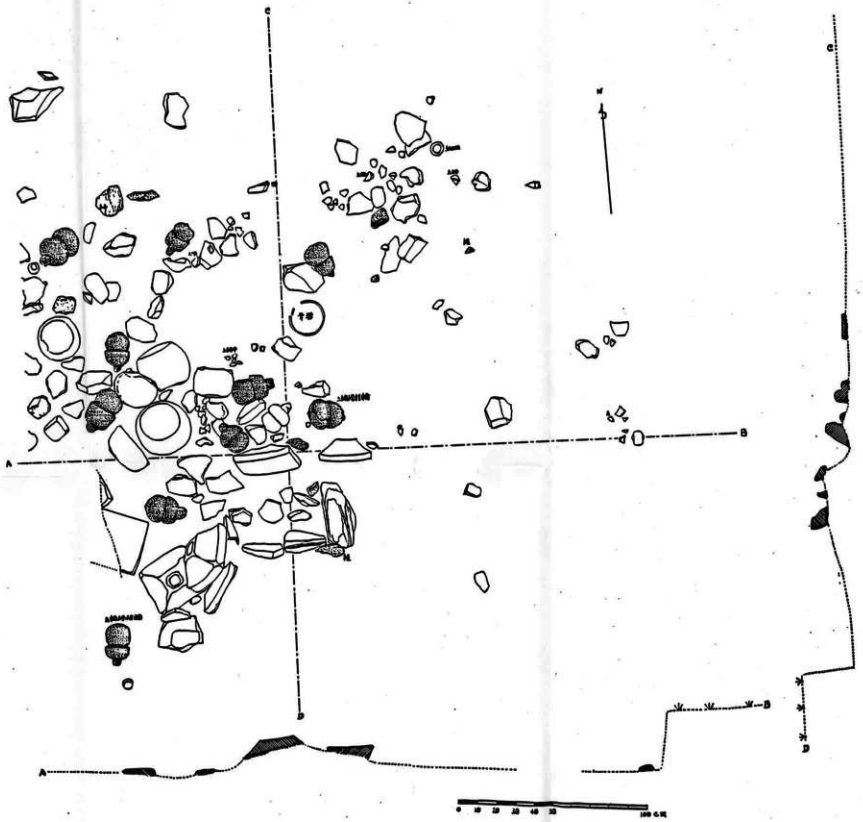
長いあいだもちつづけ今日となって平易に消滅させることはこれらを築き上げた祖先に対し無礼の最大なものであり申し訳が立たない。こんなことを考えると身はもう破滅の感におそわれてならない。何とぞ力を合わせて保存に力を注がれる様切望する。

報恩寺遺構及び振倉謝公墓とそれらをふくむ本堂山の景観風致は伊倉町民ばかりでなく広く玉名市民にとって貴重な文化的財産であって、かけがえのない高度の文化的価値を有している。

昭和５１年９月２２日

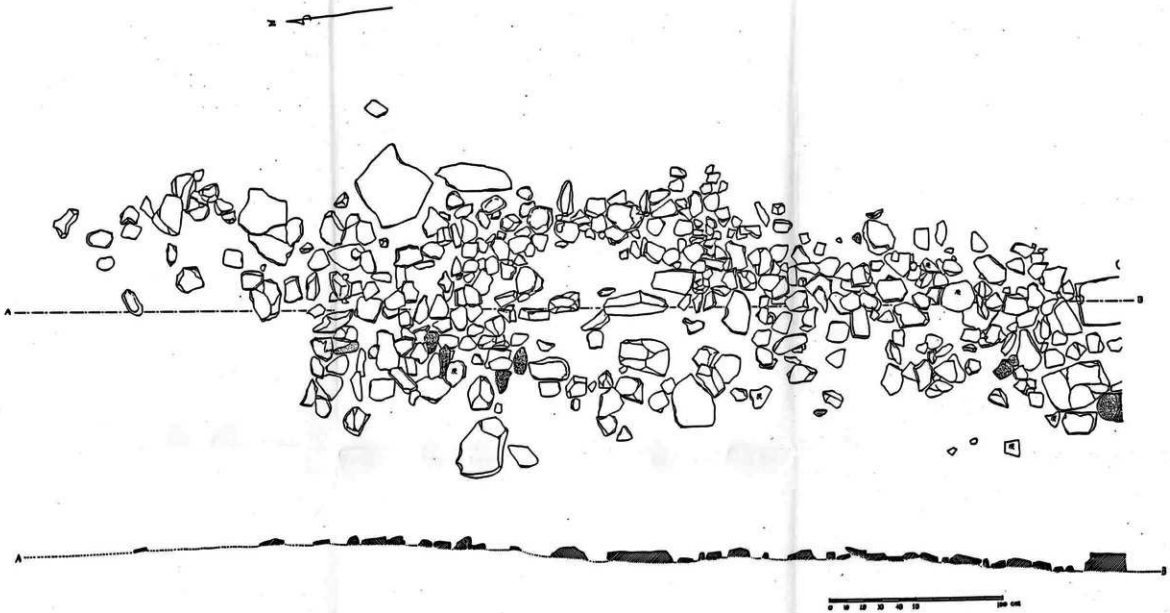
玉名市文化財保護委員会

会 長　　田 添 夏 喜

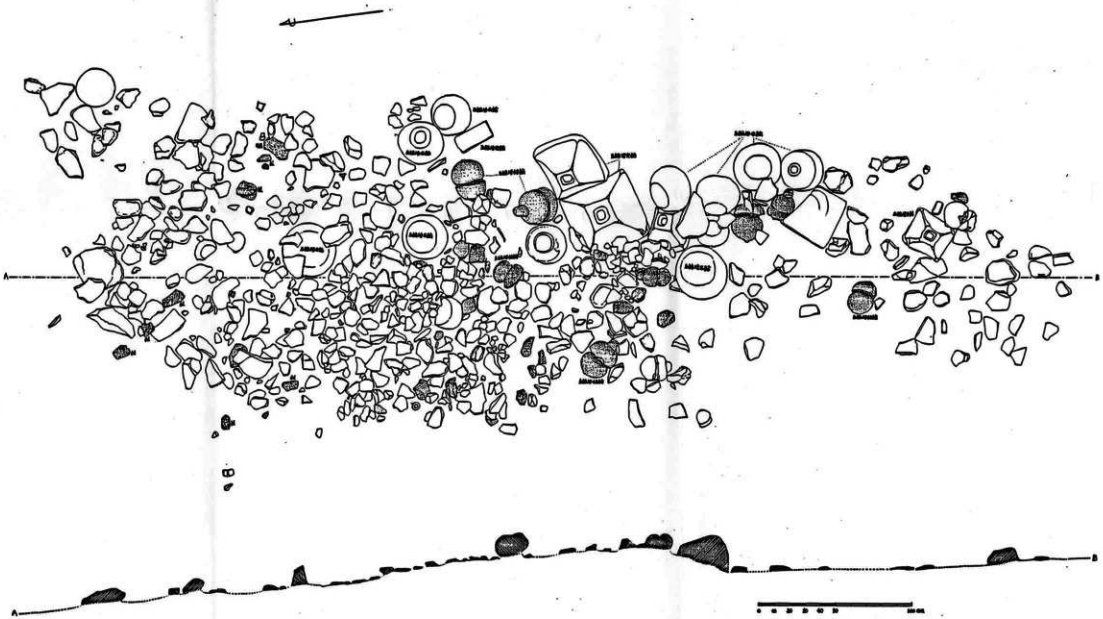


観音寺木造塔跡 礎石実測図 （北面東より） その 1

桂離宮本殿遺跡 検出遺構図 （北区調査） その2



興福寺水堂 基壇跡発掘実測図 （西面南より） その2



[illegible]寺天王寺遺跡 敷石遺構図 （西部南区） 平面3

図版１　本堂山遺跡全景　（西より望む）

図版２　発掘前の遺跡中心部

図版4　下　中尾山報恩寺本尊　薬師如来石仏

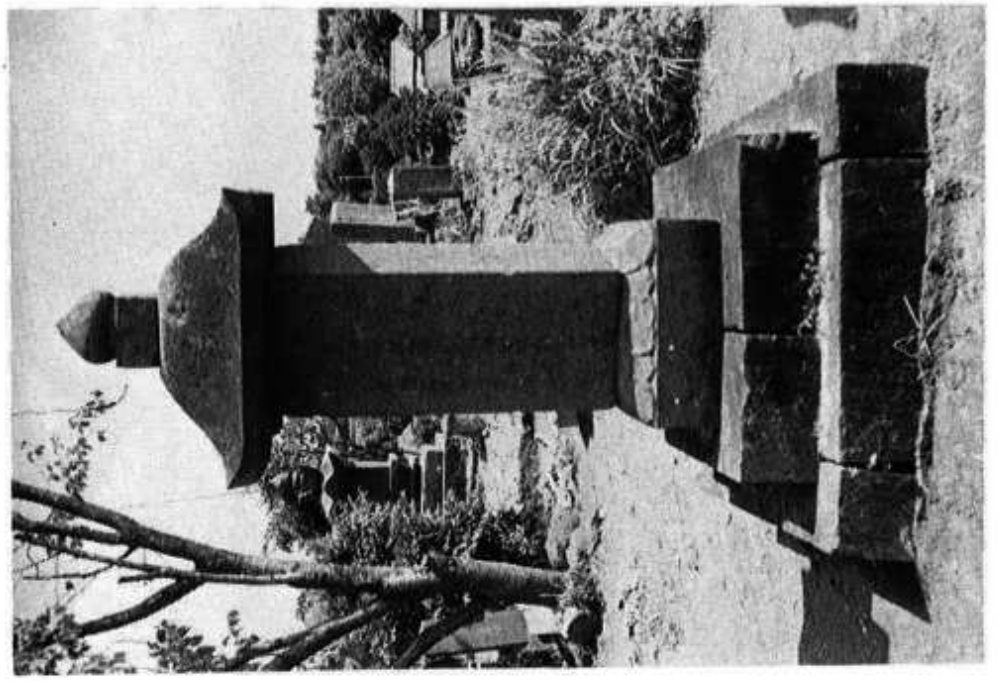
図版3　上　鎮魂祭・鍬入式の情景

図版6　下　宇佐一族の墓・供養塔

図版5　上　本尊石仏背銘

図版7　伊倉本地主宇佐公満墓塔地輪銘

図版8　中興報恩寺歴代住職墓塔群



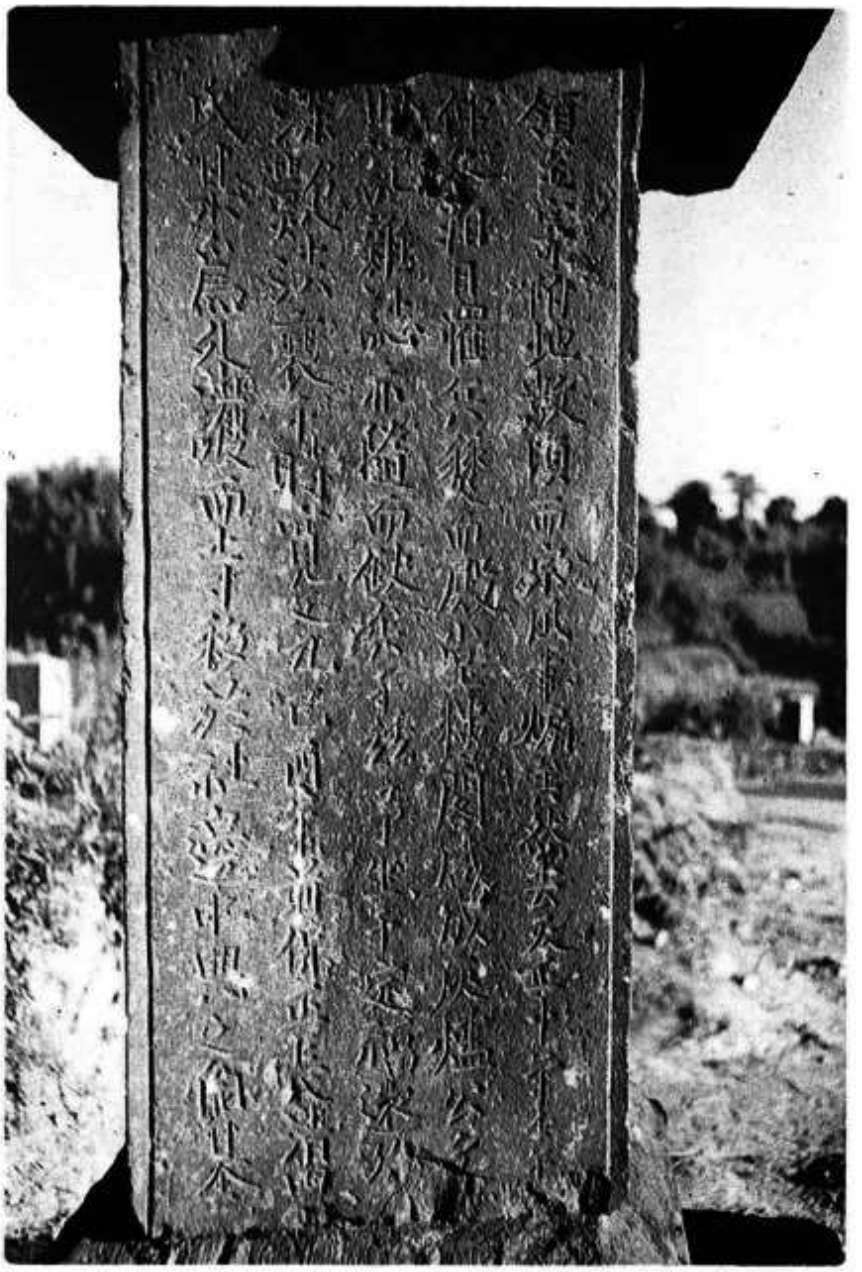
図版 9　當山中興開基権大僧都法印慶存墓

図版 10　當山中興開基権大僧都法印慶存墓塔正面刻銘

図版 11　當山中興開基権大僧都法印慶存墓塔正面銘文拓影

図版 12　當山中興開基権大僧都法印慶存墓塔左側面銘文

図版 13　當山中興開基権大僧都法印慶存墓塔左側面銘文拓影



図版 14　當山中興開基権大僧都法印慶存墓塔背面銘文

図版 15　當山中興開基権大僧都法印慶存墓塔背面銘文拓影

図版 16　當山中興開基権大僧都法印慶存墓塔右側面銘文拓影

図版 17　當寺中興二世住権大僧都法印慶雲墓塔

図版 18　當寺中興二世住権大僧都法印慶雲墓塔銘文拓影

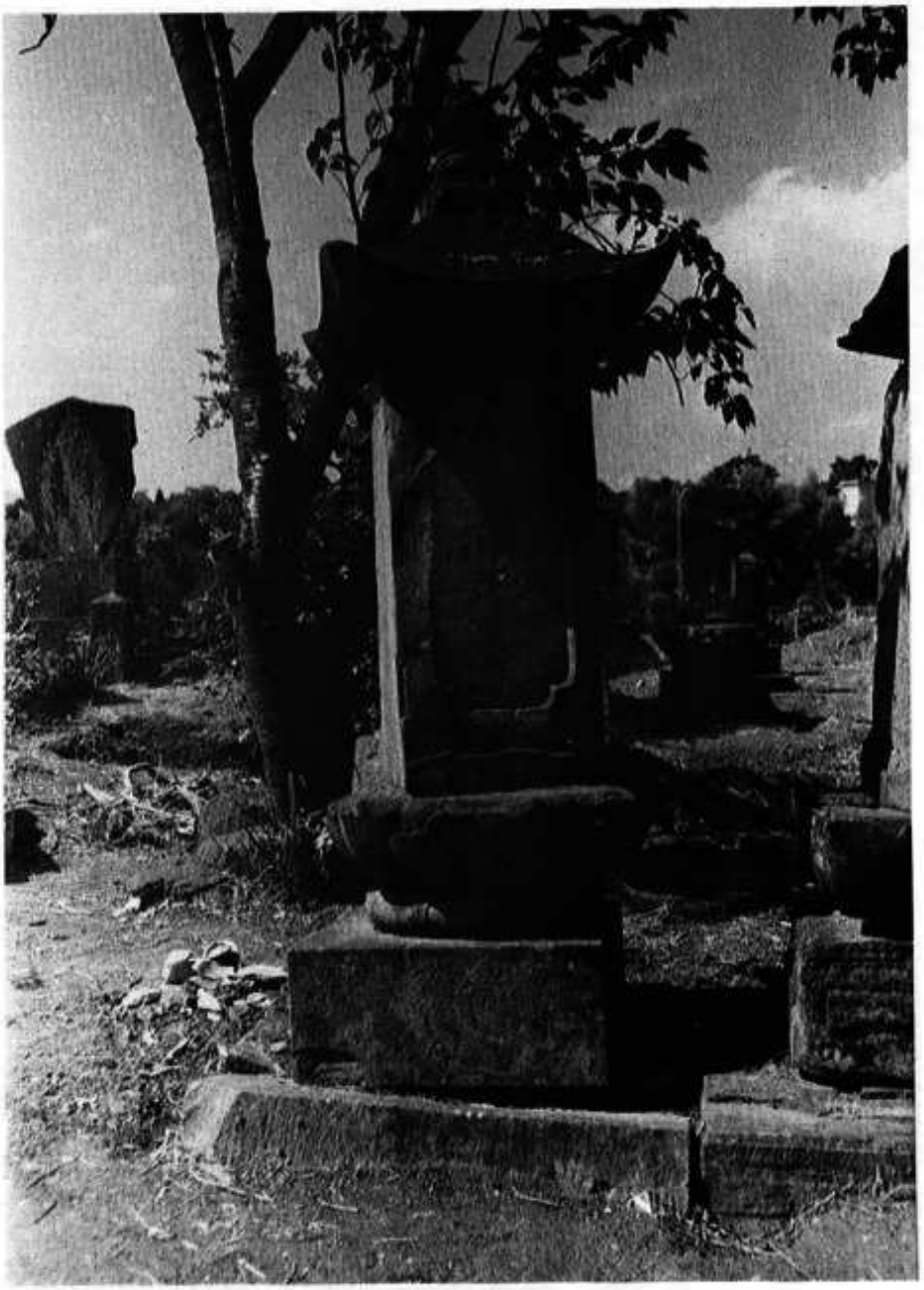
図版 19　當寺中興二世住権大僧都法印慶雲墓塔左側面銘文

図版 20　當寺中興二世住権大僧都法印慶雲墓塔左側面銘文拓影

図版 21　當寺中興二世住権大僧都法印慶雲墓塔右側面銘文拓影

図版22　當寺中興二世住権大僧都法印慶雲墓塔背面銘文

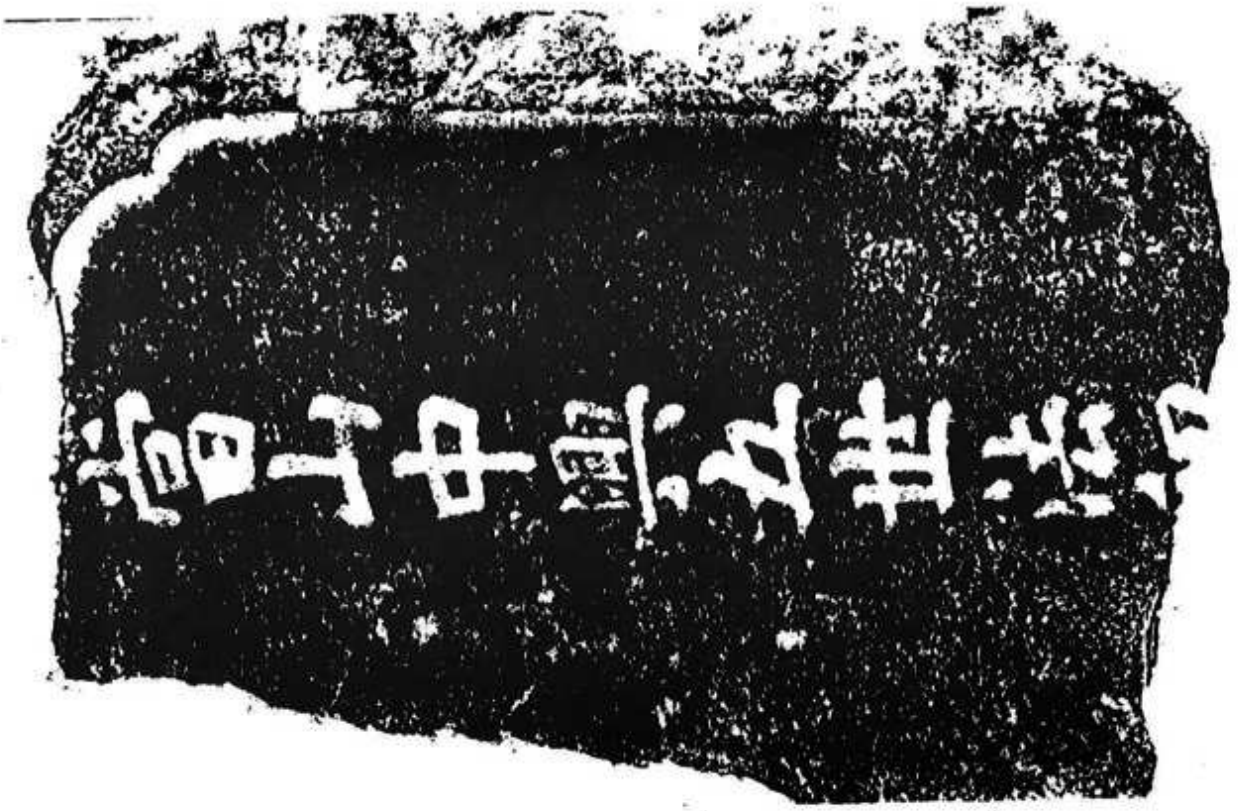
図版 23　當寺中興二世住権大僧都法印慶雲墓塔背面銘文拓影



図版 24　當山中興四世傳燈阿闍梨法印大僧都弘超大和上尊靈塔

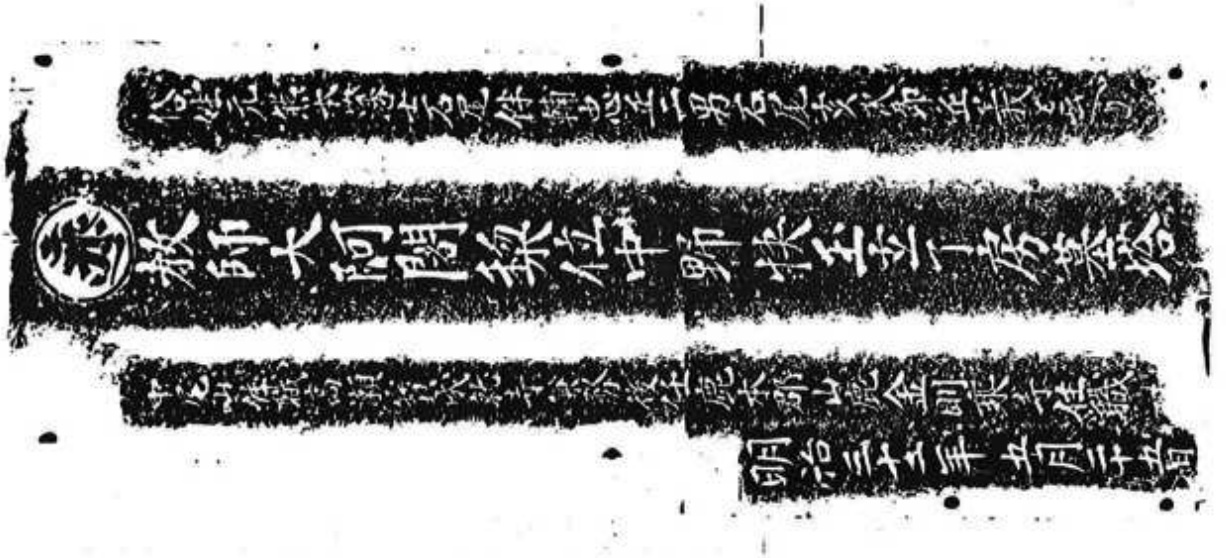
図版 25　當山中興四世傳燈阿闍梨法印大僧都𝔂超大和上尊靈塔銘文

図版 26　當山中興五世法印墓塔



図版 27　當山中興五世法印墓塔銘文拓影

図版 28　権大僧都法印快信大和上墓塔銘文拓影



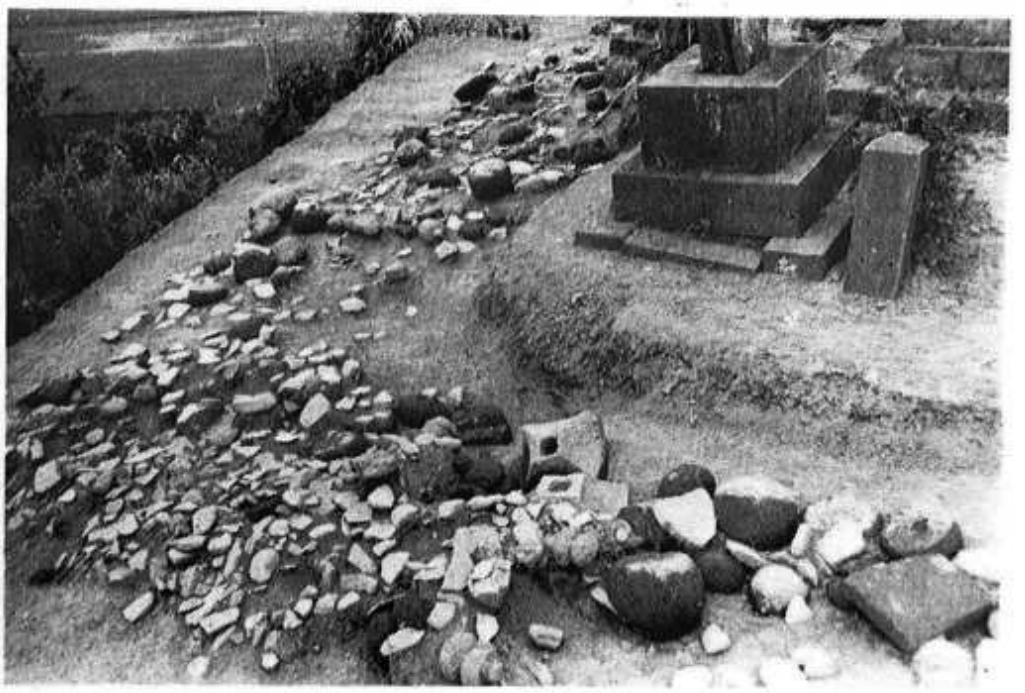
図版 29　　教師大阿闍梨位中野快王玄了房墓塔銘文拓影

図版 30　　教師大阿闍梨位台礎側面銘文拓影

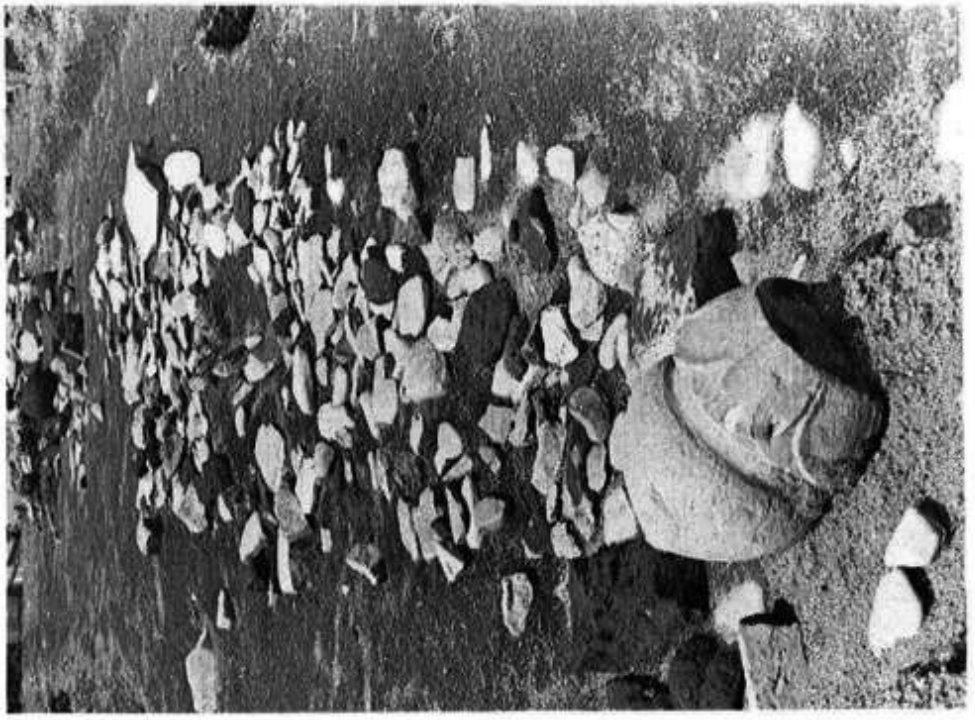
図版 31　中興報恩寺歴代住持・宇佐家・補陀落渡海碑・板碑群

図版 32　夢賢上人補陀落渡海碑（左）　同銘文（右）

図版 33　発掘完了後の遺跡中心部の景観

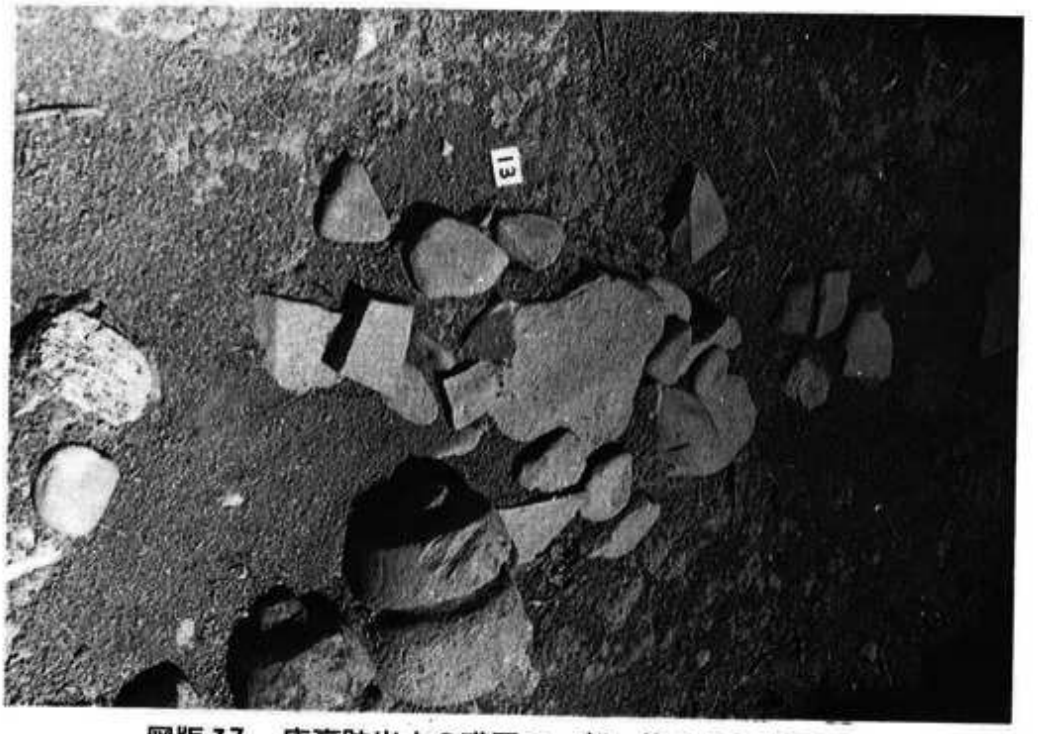


図版 34　露出された本堂基壇跡北面・西面の一部敷石状態

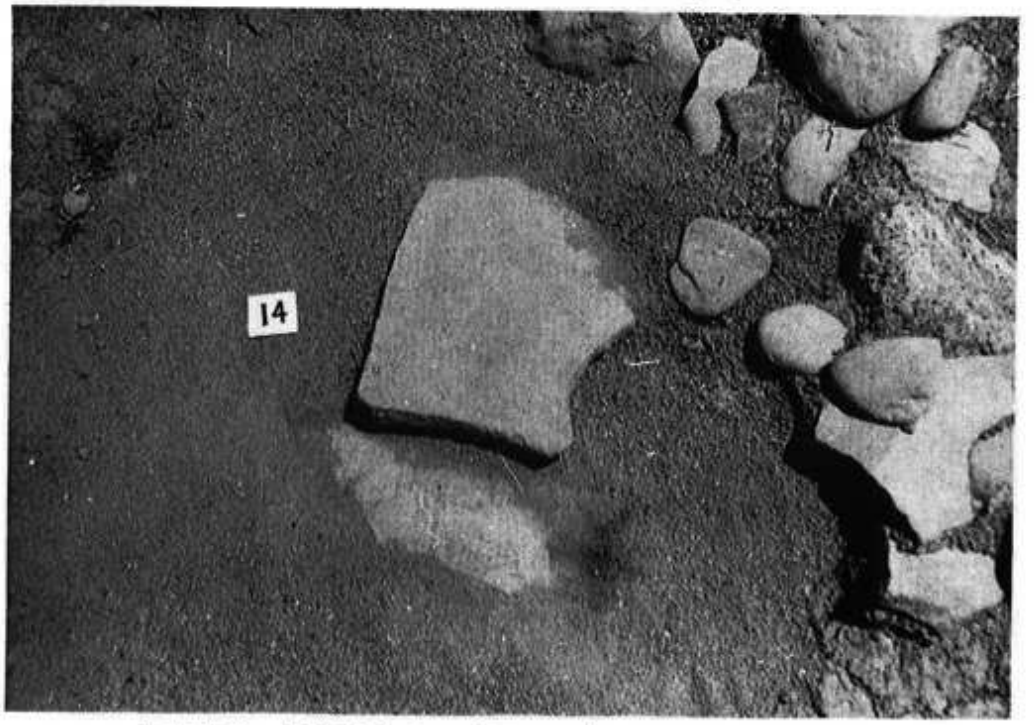


図版 35　露出された本堂基壇跡北面・西面敷石の出土状態

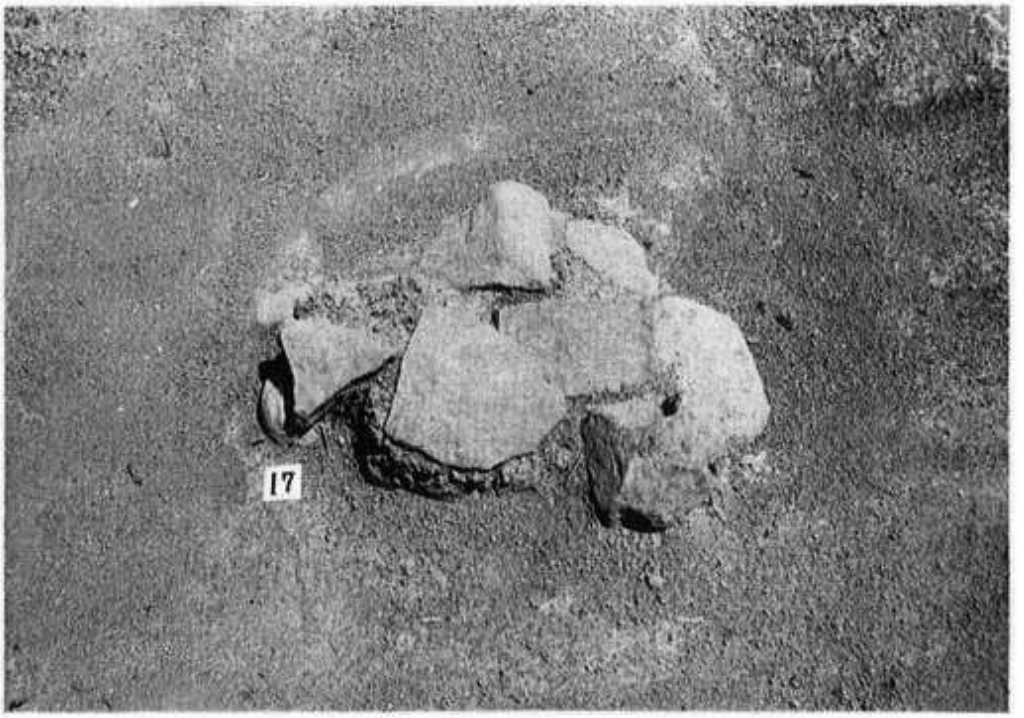
図版 36　庫裏基壇跡の南辺部敷石の出土状態



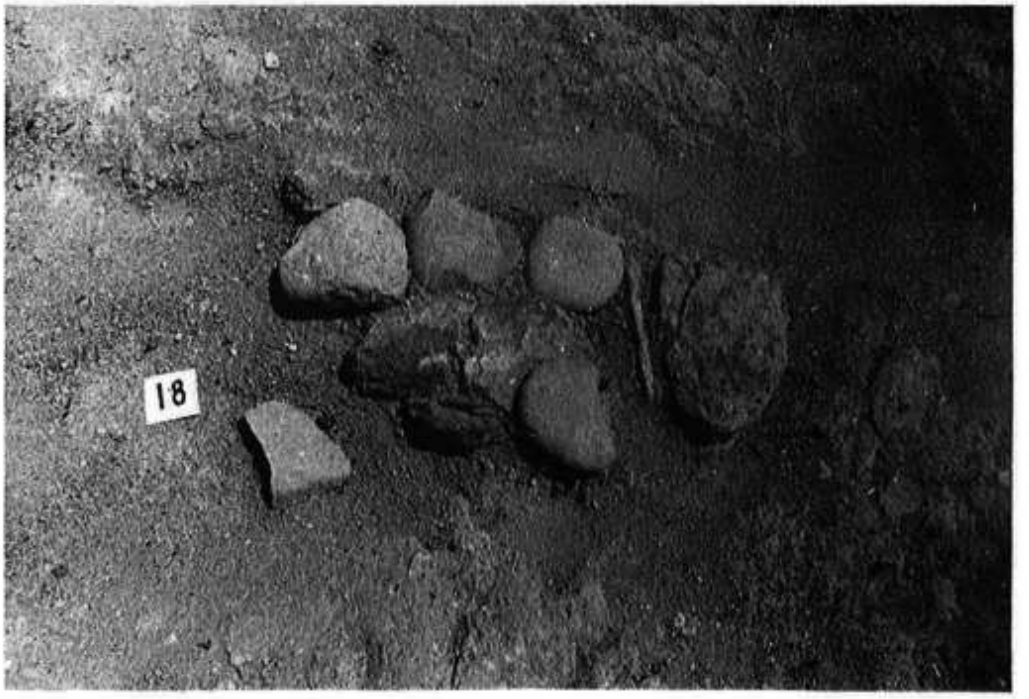
図版 37　庫裏跡出土の礎石の一部・第１３号礎石



図版 38　庫裏跡出土の礎石の一部・第１４号礎石



図版 39　庫裏跡出土の根太束礎石の一部・第１７号礎石



図版 40　庫裏跡出土の根太束礎石の一部・第１８号礎石

図版 41　庫裏跡出土の石組遺構

図版 42　本堂基壇跡西辺石敷中出土の石棺形石組遺構

図版 43　山門跡礎石の一部

図版 44　山門跡礎石の埋納品永楽通寶・短刀の出土状態

図版 45　山門跡礎石の永楽通寶出土状態

図版 46　山門跡礎石の短刀出土状態

図版47　大明振倉謝公墳の墓標石

図版48　発掘完了後の振倉謝公墳外容

図版50　下　振倉謝公墳・第2号棺の人骨の出土状態（頭蓋骨）

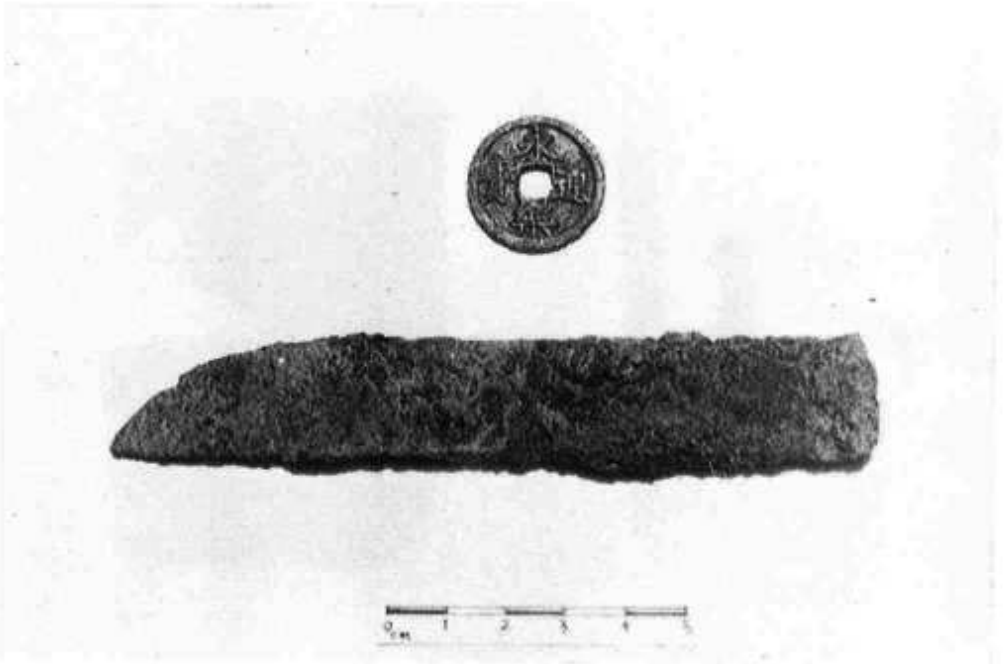
図版49　上　振倉謝公墳・第2号棺内部の露出状態

図版51　振倉謝公墳の外観　第1号棺郭（右）・第2号棺（左）

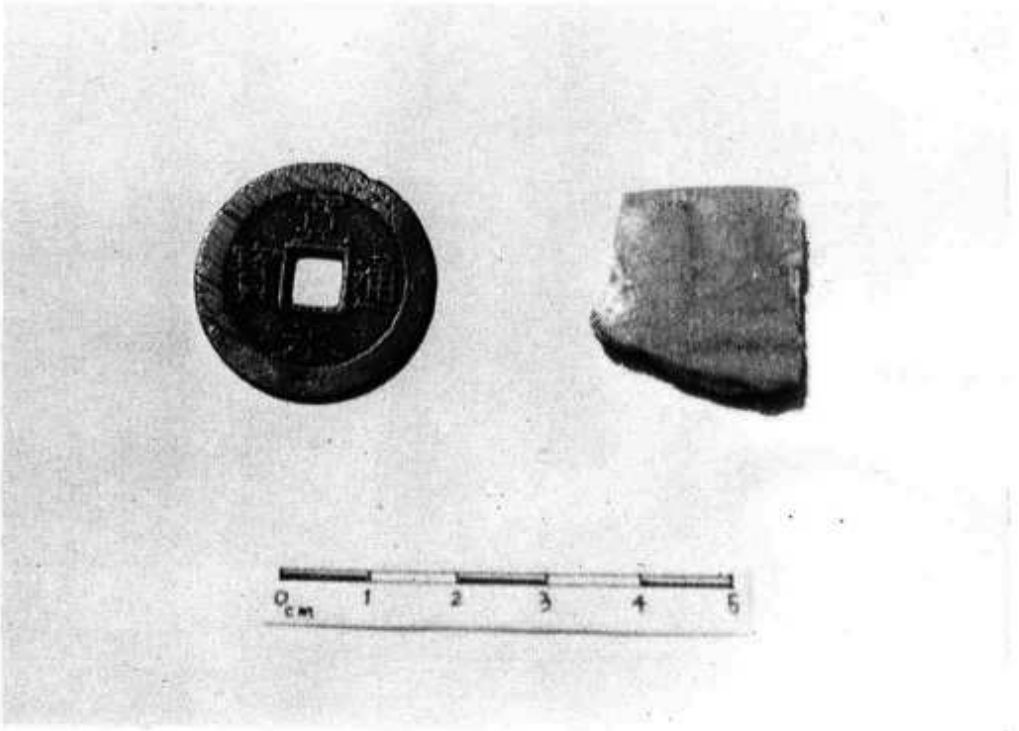
図版52　振倉謝公墳・第1号墓棺郭の漆喰屋蓋

図版54　下　振倉謝公墳・棺郭底人骨・鉄釘の配置状態

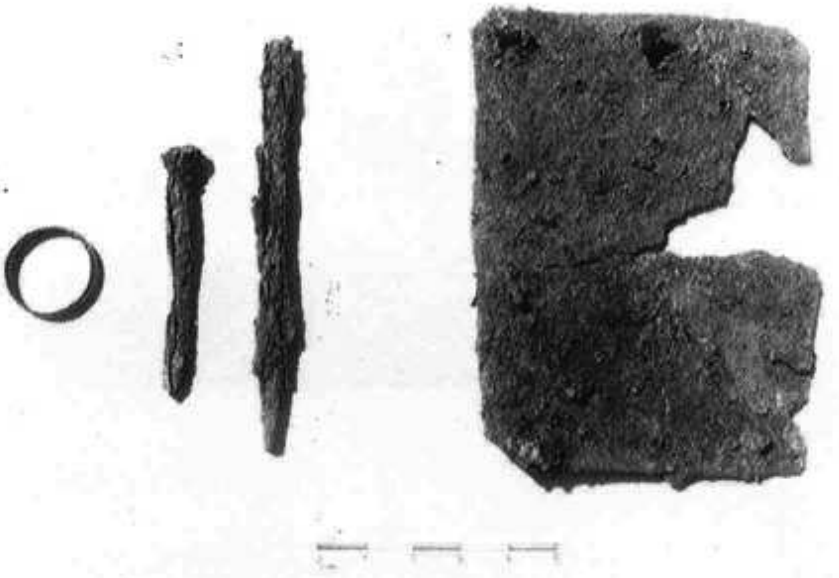
図版53　上　振倉謝公墳・第1号墓漆喰棺郭



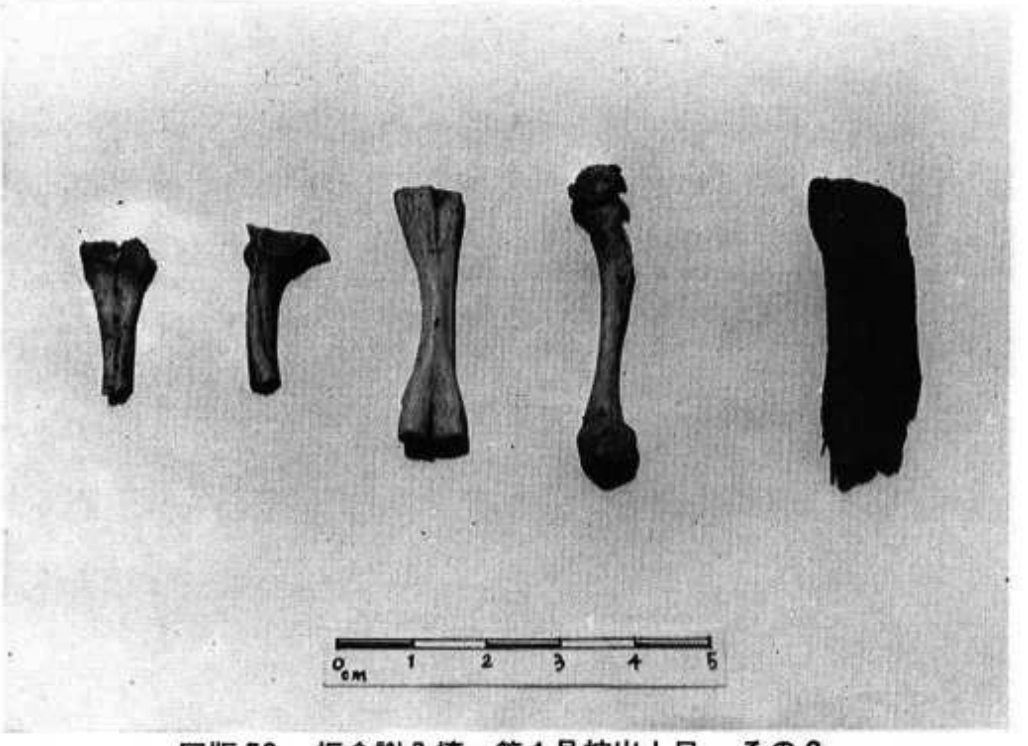
図版 55　山門跡礎石埋納品（上、永楽通寶　下、短刀）



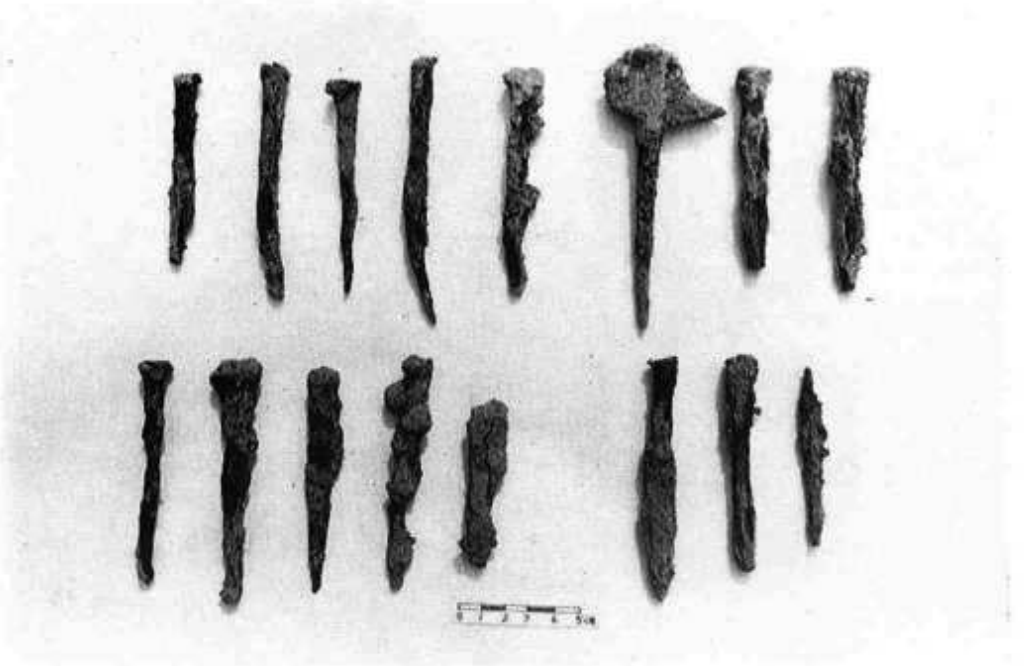
図版 56　振倉謝公墳表土中の出土品
（左、寛永通寶　右、青磁断片）



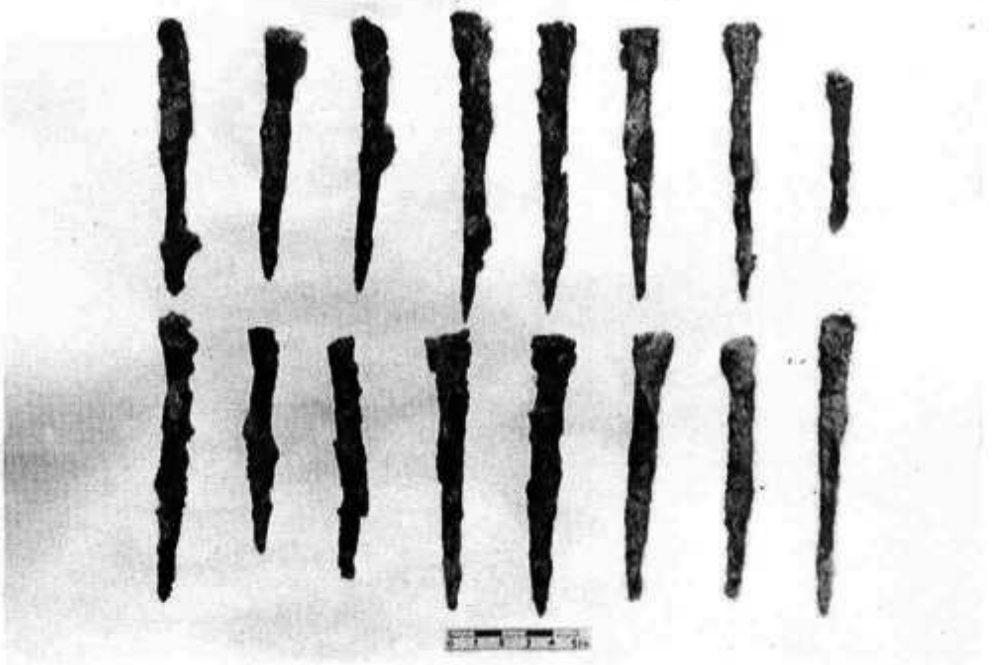
図版 57　振倉謝公墳・第 1 号棺出土品　その 1
左端、指輪型銅環　中、鉄釘
右端、木棺装具鉄板



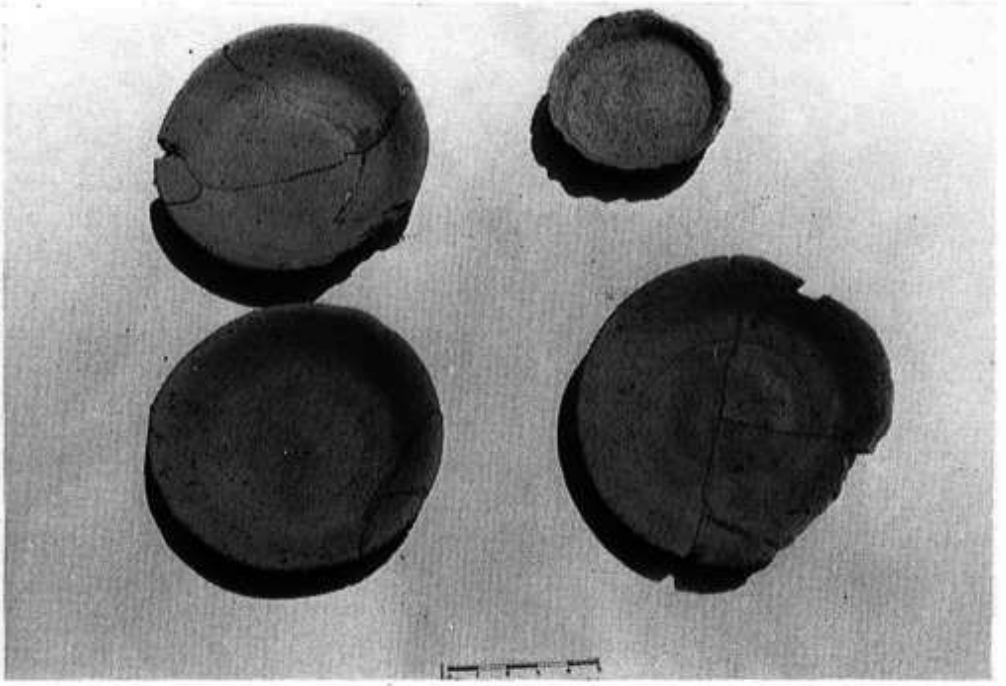
図版 58　振倉謝公墳・第 1 号棺出土品　その 2
左 4 点、鳥骨　右端、炭化竹断片



図版 59　振倉謝公墳・第 1 号棺出土鉄釘の一部
上列左 4 点　東南隅出土　右列 4 点　東北隅出土
下列左 5 点　西南隅出土　右列 3 点　西北隅出土

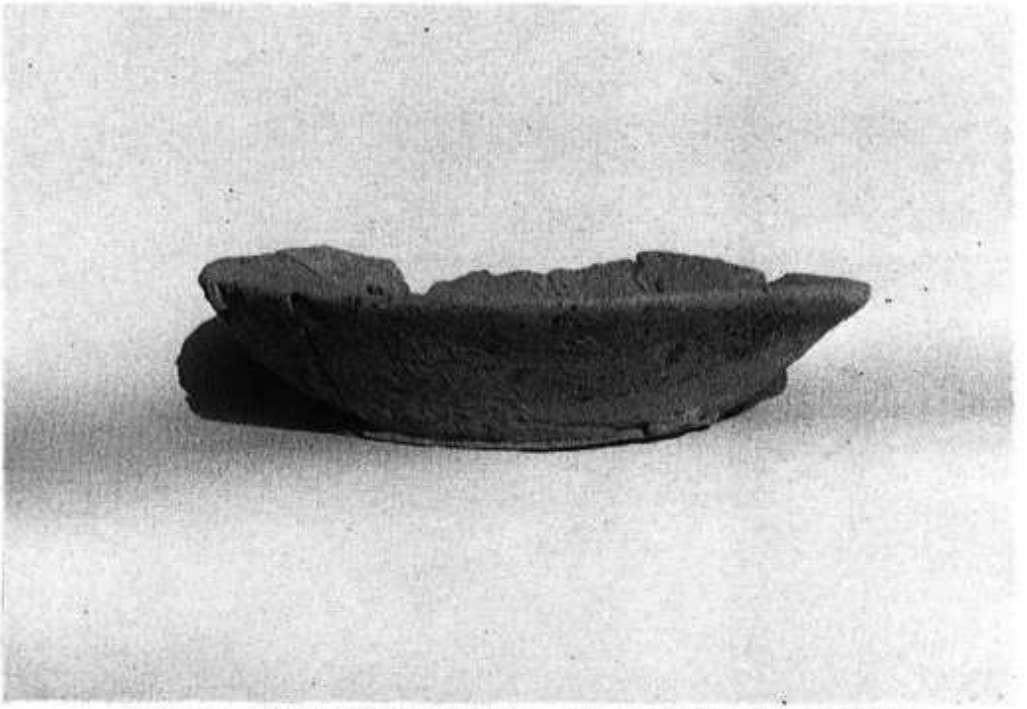


図版 60　振倉謝公墳・第 2 号棺出土鉄釘の一部　上列　北辺部出土
下列　南辺部出土



図版 61　報恩寺跡　第 1 調査区・第 2 調査区出土品

図版 62　報恩寺跡　基壇跡北辺東端部出土の土師器　糸切皿



図版63　報恩寺跡第2調査区　第21号礎石出土土師器皿
その1

図版64　報恩寺跡第2調査区　第21号礎石出土土師器皿
その2

図版 65　報恩寺跡第 2 調査区　第 21 号礎石出土土師器皿
その 3

玉名市文化財調査報告　第６集

滑石小路箱式石棺
本　堂　山　遺　跡

昭和６０年３月３１日

発行　玉名市教育委員会
玉名市繁根木８８－１

印刷　（株）城野印刷所
熊本市琴平１丁目４番１号